

特集：ピタウ先生とソフィア・ミッション—上智大学のアジア貢献—

Joseph Pittau, S.J. and Sophia Mission: Contribution to Asia by Sophia University

Joseph Pittau, S.J. និង បេសកកម្មសូហ្វីយ៉ា: ការចែករំលែករបស់សាកលវិទ្យាល័យសូហ្វីយ៉ាទៅដល់អាស៊ី

# アンコール遺跡 を科学する

第20回  
アンコール遺跡国際調査団報告

INVESTIGATION OF THE ANGKOR MONUMENTS  
FINDINGS CONCERNING THE STUDY OF THE ANGKOR MONUMENTS

ការស្រាវជ្រាវប្រាសាទអង្គរ: របកគំហើញទាក់ទងនឹងការសិក្សាស្រាវជ្រាវប្រាសាទអង្គរ



2016年3月

上智大学アジア人材養成研究センター

Sophia Asia Center for Research and Human Development

មជ្ឈមណ្ឌលអាស៊ីសិក្សាស្រាវជ្រាវនិងបណ្តុះបណ្តាលធនធានមនុស្សនៃ សាកលវិទ្យាល័យសូហ្វីយ៉ា

目次

---

特集：

ピタウ先生とソフィア・ミッション —上智大学のアジア貢献—

「ありがとう」の人生を想う —ヨゼフ・ピタウ大司教を偲んで—

高祖敏明

ピタウ先生 告別式（弔辞） ————— 和泉法夫

ヨゼフ・ピタウ先生とアジア人材養成研究センター

—グランド・レイアウト第1号、アジアへ出かけてソフィア・ミッション—

石澤良昭

アンコール文化遺産啓蒙教育 —上智大学の国際貢献—

ニム・ソテイーヴン

カンボジア王立芸術大学における「クメール美術史」集中講義から  
(2013年～2014年) ————— 久保真紀子

Conservation and Restoration Project of the Western Causeway of  
Angkor Wat Phase II (APSARA and Sophia University)

Sophia University / ICC technical committee, June 4-5 2015 ————— Satoru MIWA

アンコール・ワット西参道技術交流研修委員会

：日本委員のカンボジア現場視察調査報告 ————— 三輪 悟

アンコール・ワット西参道技術交流研修委員会

：カンボジア委員の日本現場視察調査報告 ————— 三輪 悟

カンボジアにおけるソフィア・ミッション

(旧称：カンボジアにおける人材養成)

—保存官養成のためのアンコール遺跡現場実習プログラム— (1991～2015)

日本語／英語／カンボジア語

---

**Special Edition:**

**Joseph Pittau, S.J. and Sophia Mission:  
Contribution to Asia by Sophia University**

Memories of the Life filled with Thanks: Recalling Joseph Pittau, S.J.  
\_\_\_\_\_ Toshiaki Koso

Funeral Ceremony of Joseph Pittau, S.J. (A Message of Condolence)  
\_\_\_\_\_ Norio Izumi

Joseph Pittau, S.J. and Sophia Asia Center for Research and Human  
Development: The First Grand Layout, Sophia Mission in the Field of Asia  
\_\_\_\_\_ Yoshiaki Ishizawa

Cultural Heritage Education at Angkor: International Contribution by  
Sophia University \_\_\_\_\_ Nhim Sotheavin

Intensive Course “History of Khmer Art” in Royal University of Fine  
Arts, Cambodia (2013-2014) \_\_\_\_\_ Makiko Kubo

Conservation and Restoration Project of the Western Causeway of  
Angkor Wat Phase II (APSARA and Sophia University)  
Sophia University / ICC technical committee, June 4-5 2015 \_\_\_\_\_ Satoru Miwa

Committee for Technical Exchange and Training for Conservation  
and Restoration Project of the Western Causeway of Angkor Wat:  
Report on the Inspection of Cambodia by Japanese Committee Members  
\_\_\_\_\_ Satoru Miwa

Committee for Technical Exchange and Training for Conservation  
and Restoration Project of the Western Causeway of Angkor Wat:  
Report on the Inspection of Japan by Cambodian Committee Members  
\_\_\_\_\_ Satoru Miwa

**Sophia Mission in Cambodia**

(Former name: Human Development in Cambodia): On-Site Training Program  
for Development Preservation Officers of Angkor (1991-2015)  
Japanese / English / Khmer

---

មាតិកា

បោះពុម្ពពិសេស៖ Joseph Pittau, S.J. និង បេសកកម្មសូហ្វីយ៉ា៖  
ការចែករំលែករបស់សាកលវិទ្យាល័យសូហ្វីយ៉ាទៅដល់អាស៊ី

អនុស្សាវរីយ៍នៃជីវិតដែលពោរពេញដោយអំណរគុណ៖

ការចងចាំលោក Joseph Pittau, S.J. \_\_\_\_\_ Toshiaki Koso

បុណ្យសពរបស់លោក Joseph Pittau, S.J. (សារចូលរួមរំលែកទុក្ខ) \_\_\_\_\_ Norio Izumi

Joseph Pittau, S.J. និងបង្កើនបណ្តាលអាស៊ីសិក្សាស្រាវជ្រាវនិងបណ្តុះបណ្តាលធនធានមនុស្ស  
នៃសាកលវិទ្យាល័យសូហ្វីយ៉ា៖

គម្រោងដ៏ធំលើកទី១នៃបេសកកម្មសូហ្វីយ៉ានៅអាស៊ី \_\_\_\_\_ Yoshiaki Ishizawa

ការអប់រំបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌នៅតំបន់អង្គរ៖ ការចែករំលែកជាអន្តរជាតិដោយសាកលវិទ្យាល័យ  
សូហ្វីយ៉ា \_\_\_\_\_ Nhim Sotheavin

ថ្នាក់បង្រៀនពិសេសអំពី “ប្រវត្តិសិល្បៈខ្មែរ” នៅសាកលវិទ្យាល័យភូមិន្ទវិចិត្រសិល្បៈ, ប្រទេស  
កម្ពុជា (ឆ្នាំ២០១៣-២០១៤) \_\_\_\_\_ Makiko Kubo

គម្រោងថែរក្សានិងជួសជុលស្ថានហាលអង្គរវត្តក្នុងដំណាក់កាលទី២ (អាជ្ញាធរអប្សរា និង  
សាកលវិទ្យាល័យសូហ្វីយ៉ា)

សាកលវិទ្យាល័យសូហ្វីយ៉ា / ICC អង្គរ, ថ្ងៃទី៤និង៥ ខែមិថុនា ឆ្នាំ២០១៥ \_\_\_\_\_ Satoru Miwa

គណៈកម្មាធិការដើម្បីការផ្លាស់ប្តូរ និង ការហ្វឹកហ្វឺនសម្រាប់គម្រោងថែរក្សានិងជួសជុលស្ថាន  
ហាលអង្គរវត្ត៖ របាយការណ៍អំពីការពិនិត្យស្រាវជ្រាវនៅប្រទេសកម្ពុជាដោយសមាជិកគណៈ  
កម្មាធិការជនជាតិជប៉ុន \_\_\_\_\_ Satoru Miwa

គណៈកម្មាធិការដើម្បីការផ្លាស់ប្តូរ និង ការហ្វឹកហ្វឺនសម្រាប់គម្រោងថែរក្សានិងជួសជុលស្ថាន  
ហាលអង្គរវត្ត៖ របាយការណ៍អំពីការពិនិត្យស្រាវជ្រាវនៅប្រទេសកម្ពុជាដោយសមាជិកគណៈ  
កម្មាធិការជនជាតិខ្មែរ \_\_\_\_\_ Satoru Miwa

បេសកកម្មសូហ្វីយ៉ានៅប្រទេសកម្ពុជា (បណ្តុះបណ្តាលធនធានមនុស្សនៅប្រទេសកម្ពុជា) ៖  
កម្មវិធីបណ្តុះបណ្តាលនៅទីកន្លែងដើម្បីការអភិវឌ្ឍន៍អ្នកជំនាញផ្នែកអភិរក្សនៅអង្គរ  
(១៩៩១-២០១៥) ភាសាជប៉ុន / អង់គ្លេស / ខ្មែរ

【特集】

# ピタウ先生とソフィア・ミッション

—上智大学のアジア貢献—



## インドシナ難民に、愛の手を

戦火と飢えと疫病のため、いま毎日千名もの人々が死んでゆくという、インドシナの難民。テレビでも、たくさんのお体のかたわらで、骨と皮ばかりになり、目だけを輝かせている子供たちの姿が写されています。新聞もその実情を報じています。「インドシナの難民を救おう」という社説もみかけます。私たちは、この悲惨な状況を、ただみづめているだけでよいのでしょうか。

第二次世界大戦のあと、日本では日々々の糧をも得られなかつたとき、多くの国々からたくさんの援助を受け、そして現在の平和な日本が築きあげられたという事実を、私たちは忘れることができません。そして、いま日本は高度の経済成長をとげ、国際性の豊かな国民になったといわれています。その国民が、同じアジアの諸人の苦しみを、ただ傍観しているだけでよいのでしょうか。

ワルト・ハイム国連事務局長は「人類史上かつて例をみない悲劇に見舞われているインドシナ救済のため、直ちに、できる限りの援助を送ろう」と各国官民に訴えました。日本政府もこれにこたえて、最近、日本赤十字社が医療班の第一陣をおくつたのをはじめ、民間団体が援助の手をさしのべはじめています。

上智大学は、キリスト教の精神を基盤として、文化の発展と人類の福祉に寄与することを目的として設立された大学です。キリスト教の精神、それは愛です。学内でも教職員や学生が、ささやかながら援助のボランティア活動をすすめています。この活動をさらに促進させ、上智大学の使命を具現化させるため、このほど大学が主体となつて委員会を組織し、インドシナ難民の救済に向けて、積極的な活動を開始することといたしました。

この主旨をご理解の上、教職員、学生、卒業生、そして父兄の皆さまのご協力を、心からお願ひ申し上げます。

この活動に関連して、左記のとおり、インドシナ難民の実情を伝える写真展と、講演会を開催いたしますので、参加してご理解を深めていただきたいと思いますと存じます。

昭和五十四年十二月四日

上智大学長　ヨゼフ・ピタウ

# 「ありがとう」の人生を想う

—ヨゼフ・ピタウ大司教を偲んで—

高祖敏明

学校法人上智学院 理事長  
上智大学教授

大司教ヨゼフ・ピタウ師は去る12月26日午後9時55分、ご病気のため逝去されました。

1928年10月20日のお生まれですので、享年86のご生涯でした。その2カ月前に脳梗塞に襲われ言葉が出なくなられたのですが、それまではお世話になっている医師や看護師、お見舞いに来てくれた知人や卒業生たち一人ひとりの手をとって、「ありがとう」と感謝の気持ちを伝えるのが常でした。「ありがとう」の人生を全うされたご生涯でした。

ピタウ師は、ローマで20年以上もの重責を担われた後、「皆さん、帰って来ました」と日本に戻りましたが、それほど日本が、日本人々が大好きでした。いまでも、そのあたりから「皆さん、帰って来ました」と姿を現されるのでは、と思うくらいです。

## まばゆい巨星逝く

実はピタウ師は、私にとっては「まばゆい」存在でした。1945年4月18日にイエズス会に入られたとき、私はまだ生まれていませんでした。ハーバード大学で博士学位をとり、1964年に政治学の教員として上智大学法学部に赴任されたとき、私はまだ高校生でした。39歳で上智学院理事長となり、46歳で上智大学学長、その後もイエズス会日本管区長、ローマのグレゴリアン大学学長、教皇庁教育省次官と、次々と要職を歴任されました。

1981年2月の教皇ヨハネ・パウロ2世の来日の折には、気配りの利いたおもてなしをもって接待に当たられました。ところが、その機敏な働き振りと有能さに目を留められた教皇によってローマに呼び戻されてしまいました。上智にとっても日本にとっても痛手でしたが、ピタウ師にとっては、これが世界を舞台に活躍する契機となりました。

ピタウ師逝去の報がローマに伝わると、教皇フランシスコはすぐにイエズス会本部の総長ニコラス神父に電報を送り、お悔やみと「福音のために神に仕えた模範的な人であった」とピタウ師を高く評価して感謝するお言葉を伝えられました。これに添えられたピタウ師の生涯を紹介するバチカンからの記事には「He was an “intellectual, administrative and spiritual giant”.’とあります。

しかし、ピタウ師はこうした「まばゆさ」を、接する人に感じさせないお人柄でした。そうしたお人柄を三つの側面からお話して、ピタウ師を偲ぶことにしたいと思います。

## ザビエルを敬愛した宣教師

第一に、ピタウ師は宣教師でした。ご遺影のカードに付したマタイ福音書の「あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子としなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」(28・19、20) とのみ言葉に一生を賭けられた人でした。ローマでの任務を終え、イタリアに残ることもできたのに日本に帰って来られたこと自体、ご自分が宣教師として赴任した日本に骨を埋めたいとの思いがあったからに違いありません。ピタウ師は若いころから東洋の使徒フランシスコ・ザビエルを敬愛しておられましたし、その生き方に憧れを抱いておられました。

教育省次官として世界を飛び回っていたときの話です。ギリシャでヨーロッパの文部大臣会議があり、48人の大臣を前に講演をされたその中で、リングを引き合いに出して語られました。リングといえば、ザビエルが応仁の乱などで荒れていた都を、わずか10日ほど滞在して離れるとき、何度もリングを空にむけて軽く投げ上げ、片手でそれを受けていたことが知られています。この会議の席でも、そのエピソードがピタウ師の頭をよぎっていたでしょうか。師の語られた話はこうです。

〈小学1年生の教室で担任の先生が「リングは何色？」と聞いた。子供たちはどんどん手を上げて、赤、緑、黄色と答える。するとひとりの子が、「リングはみんな白い」と言う。先生はこれに、「そうですね。皮をむけば、リングの中身はみな白いですね」と応じ、「うわべで判断するのではなく、中身、本質を見て」と教えた〉

ピタウ師は、この話から、国籍や肌の色の違い、文化や宗教の違いがあっても、人はみな神様から選ばれてこの世に生まれてきた同じ人間、兄弟姉妹ですと展開されたのでした。これが、民族的対立や紛争が激化しているヨーロッパの現状を念頭においての話であることは容易に察せられるところでしょう。かつてザビエルも、リスボンに引き止めようとする周囲の説得を振り切ってインドに向うとき、「かの地に住む人も神によって創造された人々であり、キリストはその人々をあがなうためにも死なれたのだ」と説いたのでした。

このようにピタウ師は、身近な例から福音のメッセージ、キリストの教えを分かりやすく話す人でしたし、印象に残る話によって人々の心をつかむ才に恵まれた人でした。

## 「愛を得るために観想」生きる

第二に、ピタウ師は、イエズス会の精神をしっかりと身に付け、これを生きようとした人でした。1998年9月26日、ピタウ師はバチカンのサン・ピエトロ大聖堂で大司教に叙されました。そのときに考案された師ご自身の紋章の下段には、ラテン語で“IN OMUNIBUS AMARE ET INSERVIRE”（すべてにおいて愛し、仕えること）とあります。通常、紋章に付けられた言葉は、その人の信条や生き方を示すものです。

本日の葬儀ミサの聖書朗読として、愛すること（コリント12・31b-13・8b）と、仕えること（マルコ10・35-45）をテーマにした箇所が選ばれたのも、このピタウ師が自らの生き方の土台とし、その信条とした「すべてにおいて愛し、仕えること」を改めて味わい、師を追憶するからに外なりません。そして、ピタウ師が選ばれたこの言葉は、イエズス会の創立者ロヨラのイグナチオが自ら



の霊的体験、祈りの修行と恵みの体験をまとめた『霊操』の、総仕上げともいえる最後の祈り「愛を得るための観想」（230番 - 237番）の一説から採られたものです（ホセ・ミゲル・バラ訳『霊操』新世社、1986年を参照）。

「愛を得るための観想」というのは、自分が生まれてからこのかた「受けた恵みを余すところなく感謝して認め、すべてにおいて主なる神を愛し、仕えることができるように、そのかすかすの恵みを心にふかく知ること」を願う祈りです。たとえば、「神が私をあがなって下さったこと、そして、私個人に下さった賜物を思い起こし、「私が主なる神に似たものとなり、その似姿に造られたので、私をご自分の神殿とされ、私のうちにお住みになる」こと、「地上の万物において神がいかに私のために活動し、働いておられるか」などを思いめぐらして考察し、では「私の方から主なる神に何を捧げ、何を差し上げるべきか」を熟慮し、判断していくのです。

ピタウ師が出された結論は、自分自身を自由も含めてすべて主に返し、主の望まれるところへ派遣されて、そこで出会う人を愛し、その人に仕えることでした。

1970年代末のベトナムとカンボジアとの紛争がもとで、インドシナ難民が大量に生まれました。タイの国境近くにはいくつもの難民キャンプが設けられ、他方、国を逃れるため小さな船にぎゅう詰めになって海を渡ろうとする、いわゆる「ボートピープル」がテレビや新聞で何度も報じられました。このときピタウ師は、「インドシナ難民に愛の手を」と支援募金を学内外に呼びかけ、自ら新宿の駅頭に立って一般社会にも協力を訴えたのでした。

いただいた芳志を教職員と学生の代表とともにタイの難民キャンプに届けたのですが、生活資金以上に必要なのは、人として温もりのあるかわりであり、子供たちとの触れ合いであることに気づきました。そこで帰国後、上智の教職員と学生たち、それに学外の希望者で10人のボランティア派遣チームを編成し、1チーム2週間というローテーションを組んで、順次難民キャンプへと派遣し続けたのでした。これが大きなきっかけとなり、上智大学もアジア重視、ボランティア重視へと活動を広げることになりました。

しかしピタウ師は、同時に決断の人でした。1968年、上智大学も大学紛争に見舞われ、全共闘系学生による主要な校舎占拠が長期化する恐れが明確になったとき、理事長として大学を正常化するために機動隊を導入して占拠を解き、半年間の大学の臨時休校と自主閉鎖を決断されました。この官憲導入によるキャンパス解放は当時初めてのことで、他大学もこれに倣って紛争を収めていった経緯もあり、「上智大方式」と当時のマスコミに報道されました。でもピタウ師自身の述懐によれば、「これで上智が閉鎖になるなら、それも仕方がない」とまで、祈りと熟慮を重ねての決断でした。

### 仕えられるためでなく仕えるために

第三に、ピタウ師は謙虚に仕える人でした。華々しいご活躍やご経歴の裏に、その土台に、他の人のために（for others）仕える生き方を実践しておられました。

理事長として学長として、学内を足早に移動することが多かったのですが、道筋にゴミが落ちていることに気づかれると足を止め、手ずからそれを拾ってゴミ箱に入れておられました。そして、

キャンパスの掃除を担当していた会社の人には、「キャンパスの掃除は人間教育の原点です。ありがとうございます」と、いつも声をかけておられました。

大司教に叙されたとき、紋章を定めるとともに記念のカードも作成します。紋章そのものをカードの図柄にする例も多いのですが、ピタウ師の場合は、最後の晩餐の席に着く前に、主イエスが弟子たちの足を洗う場面（ヨハネ 13・1-20）を用いておられます。この洗足の儀式は、今日でも聖木曜日の夜に教会で広く行われており、現教皇フランシスコがこの伝統的な儀式に新しい風を吹き込んでいることをご存知でしょう。教皇同様ピタウ師も、これを単なるスローガンやジェスチャーに終わらせず、「人に仕える」を生きる姿勢の根本におかれていた、あるいはそう努めておられた。その決意のほどが記念カードの図柄に込められていたと推察できるのです。

そうした姿勢があったからこそ、掃除をしてくれる人に親しく声をかけ、出会った一人ひとりに、とりわけ病床にあって自分の世話をしてくれる人一人ひとりに、「ありがとう」という感謝の言葉が自然に出てきたのでしょう。

### 「ありがとう」の人生を生きる

いま最後のお別れをするにあたって、おひとりおひとりがピタウ師との思い出を思いめぐらし、反芻しておられるかと存じます。私どもがピタウ師からいただいたご薫陶、師の宣教師としての「愛し、仕える」生き方に教えられたこと、同じ神様のもとの兄弟姉妹として親しく交わってくださった数々を思い起こし、私たちの方からピタウ師に「ありがとうございました」と申し上げたい。

それと同時に、‘an “intellectual, administrative and spiritual giant”.’ の心に福音宣教という志を抱かせて日本に派遣し、私たちと出会い、交わる機会を与えてくださった神様に感謝の祈りをお捧げしたいと思います。

そして、ピタウ師の心にあった思い、その生き方、人との接し方を私どもも受け継いで、これから生きてまいりたい。今、そう決意してお別れすることにいたしましょう。

ピタウ先生、長い間本当にありがとうございました。天国からどうぞ私どもを見守り、祈りをもって私どもの歩みを導いてください。ピタウ先生、またお会いする日まで。

追悼説教（2015年1月14日、聖イグナチオ教会主聖堂にて）

---

## ピタウ先生 告別式（弔辞）

和泉法夫  
上智大学ソフィア会会長

弔辞 ピタウ先生、ありがとうございました。学生時代の多感な時期にお会いでき、そして直接ご指導いただけたことは幸せでした。また卒業後も同窓生の会合には必ず顔を出していただき、「卒業生が社会で活躍されることが上智大学の評価を高めるのです」と言われ激励していただきました。そして常に「人に尽くす心を持ちなさい」「弱いもの貧しいもの困っているものを助けなさい」と語られ、自らも実践されました。学長でありながらインドシナ難民を救うための街頭募金の先頭に立たれました。そしてボランティア活動の大切さを身をもって教えてくださいました。また、理事長であり学長でありパチカンの高官であったときでも、だれとでもわけ隔てなく接し、一人ひとりの名前をよばれ挨拶されました。にこやかな挨拶こそが「あなたを大切に思っています」というメッセージだと言われました。ピタウ先生の生き方は上智大学の建学の精神「他者のため、他者とともに」そのものでした。先生の薫陶を受けた卒業生たちはアンコール・ワット遺跡修復をはじめ国内外のさまざまな分野で、ピタウ先生の精神を忘れず活動し、活躍してくれていますのでご安心ください。ピタウ先生との思い出は数えきれないほどありますが、ピタウ先生の人柄を偲ぶ三つのエピソードをお話させてください。

一つ目は1968年の大学紛争での出来事です。上智大学も例外ではなくバリケードがはられていました。紛争の最中、39歳の若さで最年少の理事長になったピタウ先生は「大学は学生、教員、職員の共同体である」と言われ、学生の声に耳を傾け、教職員と一体となってさまざまな大学改革を、当時の守屋学長とともに断行されました。現在の上智大学の礎を築いたと言っても過言ではありません。しかしながら、いつまでもバリケードを解除しない全共闘に対しては、大学は学問の府であると言われ、毅然として機動隊導入・ロック・アウトを実行されました。この時、ピタウ先生の正義に対する揺るぎのない信念を感じました。一方、上智の全共闘の学生に対しても、赦し合う心をもって接しておられました。上智大学では学生同士の憎み合いがなかったのは、先生の思いやる心でした。その後の上智では多くの元全共闘の方々も上智大学の発展のために尽力してくれています。

二つ目は、ピタウ先生がバチカンでヨハネ・パウロ二世の側近として活躍されたあとの、2004年の75歳定年後のことです。故郷のサルディニアではなく、日本に帰ってこられました。イエズス会の修道者として、日本に来た日から一生を捧げるという信念がそうさせたのだと思いました。私たちに、日本が「終の棲家」だと言っていたことを実践されました。日本に一生を捧げるという思いに、ピタウ先生を敬愛する卒業生が中心となってピタウ先生の精神を現役の学生や伝説としてしか知らない世代の卒業生にも伝えようとして「ピタウ先生の語る会」がはじまりました。昨年12月までに通算90回を数え、毎回ピタウ先生の生き方、ヨハネ・パウロ二世のこと、ハーバード留学のこと、バチカン教育省次官の時の話などテーマを決めお話しくださり、そして締め挨拶は先生お得意の「バンザイ」でした。残念ながら最後の頃はお病気で顔を出されるだけになりましたが、会のメンバーにとってはお会いするだけでうれしいことでした。この会はこれからも「ピタウ先生を語る会」としてピタウ先生の精神を語り継いでいくとのことです。

三つ目は2008年8月、ピタウ先生と一緒に、故郷のサルディニアからバチカン・アッシジ・フィレンツェを旅した時のことです。故郷サルディニアでは弟のアンジェロ神父さんはじめ大ファミリーの親族の方とお会いし、家族愛の大切さを教えられました。そして大司教叙階の際、故ヨハネ・パウロ二世から授かった小高い丘の上の歴史ある教会では、地元の方のためにイタリア語のミサをあげられ、その最後に日本を紹介された後、教会のなかで大声で「バンザイ」をされました。日本を愛する心がそうさせたのだと思いました。また、バチカンのサンピエトロ寺院では地下にあるお御堂に案内され、特別にミサをあげてくださり、同行したメンバーの半数がカトリック教徒ではないことを配慮されミサ曲の代わりに校歌をうたいましょうと言われ、サンピエトロ寺院の地下で大声で歌ったこと、そして勢い余って「フレイフレイソフィア、フレイフレイピタウ」と大声でエールを贈ったときもこやかに笑ってくれました。思えばあの旅は、13を超える由緒あるカトリック教会を大司教であるピタウ先生自らが案内され、上智ゆかりの場所でミサをあげてくれたのは、ソフィア会の会長に就任直後であった私と同行した卒業生たちに、上智大学のルーツと建学の精神を再認識させてくださったのだと思い、感謝しています。

ピタウ先生の思い出は尽きませんが、日本と上智をこよなく愛されたピタウ先生とのお別れに、先生の大好きな「バンザイ」とサンピエトロ寺院のお御堂でも発したエール「フレイフレイソフィア、フレイフレイピタウ」を送ります。ピタウ精神は上智に根付き、これからも語り継がれていきますのでご安心ください。天国では生前敬愛されていたルーメル神父・守屋元学長はじめ多くの先哲の方々とゆっくりお過ごしください。四ツ谷のキャンパスを歩けばいつでもピタウ先生の元気に挨拶されるお声が聞こえる気がします。また、土手の桜が満開の頃、お会いしましょう。ありがとうございました。

2015年1月14日

---

# ヨゼフ・ピタウ先生とアジア人材養成研究センター

## —グランド・レイアウト第1号、アジアへ出かけてソフィア・ミッション—

石澤良昭  
上智大学特別招聘教授  
アジア人材養成研究センター 所長

### I アジア研究の拠点「アジア文化研究所」の設立

#### 1. イエズス会3神父がはじめた AUVIT 学生交流会 (1960-1965)

—アジア地域とのかかわり・その1—

上智大学と東南アジアとの学生交流は1960年に始まる。当時のイエズス会の3人の神父、日本ではリーチ (P. Riestch) 上智大学教授、バンコクではゴマンヌ (Gomane) 神父、サイゴン (ホーチミン市) ではラル (Larre) 神父が「オーヴィット (AUVIT=Amitié Universitaire entre Vietnam-Japon-Thaïlande)」という任意の学生交流の団体を立ち上げた。その第1回の学生交流は1960年に上智大学から出発した。フランス語学科の3年生、4年生の私たち学生に、リーチ教授からベトナムの大学で集中講義をするので、「一緒に来ないか」とのお呼びがかかった。そのリーチ教授は私の最も敬愛するフランス人のイエズス会の神父さんであった。

そんなリーチ教授の誘いに応じたのは、私を含めて上智・東大・慶大の7人の学生であった。私たちは、まず大泉孝上智大学長 (1953年-1968年) から日本銀行の外貨申請書に印鑑をついてもらい、渡航手続きを開始した。教授は「これからはアジアの時代になる。今のアジアの現実をしっかりと見ておきなさい」と言われたが、私たちは一種の海外旅行気分で浮かれていた。教授の炯眼はさすがであった。その4年後の1965年 (~1975年) からベトナム戦争がはじまり、ベトナム戦争のため、アメリカ軍がタイの軍事基地使用開始 (1964年)、カンボジアの国内混乱と内戦が1970年 (~1993年まで) から勃発した。

1901年からアンコール・ワットなどの遺跡を修復してきたのはフランス極東学院のフランス人専門家たちであった。

#### 2. インドシナ難民に愛の手を—上智大学の教育理念の具現化

—そしてアジア地域とのかかわり・その2—

上智大学は、ピタウ学長在任中 (1975年-1981年) に本格的なアジアとのかかわりの第一歩を踏

み出すことになった。

先ず、ピタウ学長は1979年12月にインドシナ難民を助けるため新宿駅東口の駅頭に立って、道行く人たちに募金を呼びかけた。1979年秋ごろから学内では、教職員や学生の有志によって自発的にインドシナ難民の救援募金活動が行われていた。これに対して、ピタウ学長は、大学主催での募金活動を実施すべく、同年11月28日の大学評議会にこの件を提案した。全学がこれに賛成し、「インドシナ難民に愛の手を」のボランティア活動が決議された。

大学主催の決定を受け、「インドシナ難民に愛の手を」委員会が発足し、本格的な募金活動がはじまった（『上智大学通信』昭和54年（1979年）12月14日発行より）。

### 3. 人間の悲劇と尊さ ―無心の愛に支えられたボランティア活動から―

現地へのボランティアの派遣は、同年12月に新宿の街頭に立った学生たちから強い要望があり、実施することになった。ピタウ学長と教職員代表は同年12月下旬から1980年1月上旬にかけてそれまでに寄せられた義援金を携えて現地を訪れた。

ボランティアの派遣先はタイ国内にあるサケオ難民キャンプ内にあるチルドレン・センターであった。そこには、帰るところがない子供たちが助けを求めているので、学生ボランティアの派遣が決まった。

さらに、ピタウ学長は有志のみなさんと共に、同年1月に、生命の危険にさらされているカンボジア難民の現地報告会を聖イグナチオ教会において開催した。これがマスコミにとりあげられ、多くの日本のみなさんが、救援活動に参画いただいた。

募金についての問い合わせや、ボランティアを希望する学生の電話があいついだ。集まった募金は現地のカトリック緊急難民救済事務所（COERR）、日本奉仕センター（JVC）、日本赤十字社等へ送金し、難民の人たちの教育施設、教材、医療、食糧等のために使われた。

一方、本学の現地ボランティアは同年2月3日に第一陣が出発し、以降2週間の交替で、1グループおよそ10名の編成で出発した。ボランティアには、学生たちが参加した。しかしながら、同年4月上旬、タイ国軍部は、チルドレン・センターの子供たちを難民の人たちが里親として引き取ることとしたので、同センターの閉鎖を通告してきた。ボランティアの派遣延人員は152名に達し、そのうち本学教職員18名、学生67名であった。



ヨゼフ・ピタウ元学長と筆者、ロヨラハウス於2012年1月

この現地ボランティアの派遣に際し、ピタウ学長は「ボランティアとは自分の資金で無償で奉仕することが建前」と強調、また、出発を前にしたボランティア諸君に向かって「皆さんは愛を与えるのではなく、受けるでしょう。教えるのではなく教えられることでしょう」と語りかけた（『上智大学通信』昭和55年（1980年）10月23日発行より）。

#### 4. ピタウ学長は「アジアと協力し、新しい世界を築く」 —1980年ピタウ学長年頭あいさつ—

「今年は80年代の最初の年になりますが、これから上智大学はどのような道を歩むべきか。「量より質」、それは私たちの今まで一つの基本的な方針でしたが、これからもそれを強く打ち出したいと思います。この80年代、私たちの夢であった中央図書館も完成するでしょう。そこで、学問的雰囲気をも高める、精神的なものを深めるということは、私たちの今後の課題であると思います。第2に上智大学の建学の精神を考えてみますと、この永遠の価値のための教育を与えるべきでありましょう。第3に私の一つの大きな希望ですが、今までどちらかという上智大学は西洋に目を開いて、西洋中心に国際性を強調してきました。これからの80年代ではアジアを中心にしながら、アジアを理解し、さらにアジアと協力して新しい世界を作るという使命があると思います。つまり国際性の意味を再考する、その意味で4年前に立てた10年計画の中にアジア研究を強化するという項目が盛りこまれています」(『上智大学通信』昭和55年(1980年)1月23日発行より)。

#### 5. 1980年上智大学評議会が「アジア文化研究所」の設置を決定

上智大学は1980年5月の理事会においてアジア研究体制(具体的にはアジア文化研究所設置構想)について具体化を承認した。時系列に従ってその具体的な設置の手続きをたどってみたい。

(1) 大学評議会(1980年6月25日)の議題として「アジア文化研究所(仮称)設置案」が諮られ、ピタウ学長からその構想案が述べられた。討論の後、設置の主旨を承認の上、準備委員会(橋口委員長)を設ける等具体的準備活動に入ることを承認した。

(2) 「アジア文化研究所(仮称)」設立準備委員会第1回会合(1980年9月30日)

(準備委員会委員長からの説明) 中国・朝鮮、大陸部東南アジア(タイなど)……すでに本学には研究の蓄積がある。スタートする場合に、既存の研究組織において欠けている分野を当面は考えていきたい。例えば、イスラム研究を目的の中心とする。アフリカも含むことになるかもしれない。歴史・宗教などの人文系社会科学系研究に重点を置く。国としてはフィリピン、インドネシアは含まれるがイスラムが中心である。中国やタイを入れないのは現時点で既存の研究が進んでおり、将来は含めてもよい。新地域を挙げたのは新鮮味を持たせるためでもある。(委員長の補足説明1980年10月3日、イスラム中心というのは説明不足であった) 地域研究としてフィリピン、インドネシア、西南アジアを3本の柱とする。将来は中国等を包含する。

(3) (委員長から)ピタウ学長に対して構想の具体案を説明(1980年10月7日)

(4) 「アジア文化研究所(仮称)」設立準備委員会第2回会合(1980年12月4日)

委員長が同研究所設置案を提示。

##### ① 設立趣旨：

東アジアの一隅において、キリスト教的ヒューマニズムを基礎として、東西文化交流を念願する本学の建学の理念に鑑み、近隣友邦たるアジア諸地域の宗教・言語・社会・歴史等を総合的に調査研究し、必要な教育活動を行うことの重要性が、今日ますます高まりつつある。そのため、将来恒久的に本学の特色の一つとなるようなアジア諸地域の文化およ

び社会に関する研究、とりわけ、その地域の伝統文化、伝統的生活様式についての専門的研究を行う、さらにその理解の上に、現代の社会・文化諸現象を把握することを目指した研究機関の設立が望まれる。このような研究機関を設立し、アジア諸地域との学術文化交流を図り、また研究、交流の成果を世に問うことをもって、アジアのみならず世界の平和と発展に寄与しうることを期して本研究所の設立の趣旨としたい。

② 設置計画、研究対象：

広くアジア諸地域、とりわけ当面はフィリピン、インドネシアおよび中東における社会、文化現象を、従来の学問の専門領域や国境にとらわれることなく、総合的、学際的、国際的に把握する。特に本研究所では基礎文化（ないし常民文化）と外来文化との関わりを主たる問題関心とし、たんなる個別地域の歴史・文化研究だけを行うのではなく、また、たんに現代国際関係、現代の社会経済問題のみを研究対象とするのではない。分野としては、文化、歴史、宗教、言語の研究、イスラム研究はこの一部となる。

(5) 「アジア文化副専攻（仮称）」の開設

（委員長から）ピタウ学長に対してアジア文化研究所（仮称）の概要の説明（1981年2月12日）「できれば将来的に、①アラブ（イスラム）文化圏 ②東南アジア（ASEAN＋インドシナ）③漢字圏（中国、朝鮮）という分野を研究したらどうか。いつかイスラム研究を通じてアフリカについても考えることができるだろう。」（ピタウ学長の言葉）

「アジア文化副専攻（仮称）」新設の件については、アジア文化研究所の1982年4月の発足に伴い、外国語学部教授会がこの設立を受け入れ、「アジア文化副専攻（仮称）」の設立が承認された。国際関係副専攻からは、アジア文化副専攻の教員人事やカリキュラムを独自に進めることのできるアジア文化副専攻が設立されることが、アジア文化研究所の発展のためにもなるので、教育のコースとしても開設のあかつきには、独立させた方がよいとの意見があった。

(6) 大学評議会（1981年2月18日）において上智大学アジア文化研究所規程が承認され、アジア文化研究所運営準備委員会（設立準備委員会が昇格し改編した委員会）を、外国語学部教授会内に設置承認（1981年12月17日）。国際関係副専攻の了解（いわゆる軒貸し）および外国語学部が同研究所の設立母体になることを承認。1981年4月に学長に就任した柳瀬陸男新学長（1981年-1984年）に対してアジア文化研究所の設立とアジア文化副専攻の開設を報告（1981年4月17日）。柳瀬陸男学長からは中国・朝鮮を含むというのは理事会の方針ではない。イスラム研究はお願いしたい旨要望があった。柳瀬陸男学長が兼務ではあるが初代アジア文化研究所長に就任された。

## 6. アジア文化研究所内に「アンコール調査室」を開設（1992年4月1日）

本学は1979年からインドシナ難民の救済活動に取り組んできた。1982年に設立されたアジア文化研究所には、鹿児島大学から石澤所員が移籍し、カンボジア問題とアンコール遺跡の問題についてたくさんの情報が集まっていた。

1980年代後半からカンボジアでは、平和構築に向けて作業がはじまり、国交回復、国連カンボ



ジア暫定統治機構（UNTAC）、日本のPKO自衛隊第1陣到着など、マスコミは連日カンボジア報道に終始した。日本では平和になったらアンコール・ワットを訪ねたいとの世論が盛り上がり、同時にアンコール・ワットの保存・修復は日本人の手で、という産・学・官の有志が集まりアンコール・ワット救済の任意団体が結成された。ヘンサムリン政権文化省と接触のある本学が中心的な役割を果たすことになった。

正式には1991年4月17日に産・学・官の有志により「アンコール遺跡救済委員会」が設立され、会長に石川六郎氏（鹿島建設株式会社社長）、事務局長に石澤アジア文化研究所長、同補佐に遠藤宣雄（東洋エンジニアリング株式会社人事部長）、監査役に酒井幸弁護士が就任した。同顧問に就任した大谷啓治学長（1993年-1999年）の指示により、アジア文化研究所内に同委員会の事務局を担当する「アンコール調査室」（1992年4月1日）が開設された。

同委員会には個人の資格とはいいながら、外務省・文化庁はじめマスコミ各社、ゼネコンなど約65社が参加し、同年4月29日から5月3日にかけて同委員会を中心に「アンコール遺跡救済日本代表団」31名がアンコール遺跡調査のため現地カンボジアを訪れた。代表団は一部倒壊したアンコール・ワットなど主要な遺跡の目視を行った。

## II アンコール研修所（1996年）からアジア人材養成研究センターへ

### —「グランド・レイアウト」第1号の新センター開設—

#### 1. 現地カンボジアに上智大学アンコール研修所の建設（1996年）

カンボジアでは1970年から24年間にわたり内戦が続き、都市住民約100万人の追い出し、知識人の虐殺が約150万人、そして約200万人が難民となった。

前述の通り、上智大学は1979年に新宿の駅頭で「インドシナ難民に愛の手を」募金を開始した。そして内戦中の1980年代からソフィア・ミッションの人たちがカンボジアへ出かけ、現地にカンボジア文化復興のための「アンコール研修所」（1996年）を建設した。アンコール・ワットはカンボジア民族の栄光の歴史の証人であり、24年間の4派内戦の結果和解の共通課題は「アンコール・ワットの昔に戻って話そう」であった。アンコール・ワットこそはカンボジアの皆さんが勇気と元気と希望を取り戻す心の拠り所であった。ところが、知識人虐殺のため1980年に生きて現場に戻ってきた保存官は3名のみであった。そのアンコール・ワットを守る保存官がゼロとなってしまった。私たちは「カンボジア人の手によるアンコール・ワットの保存・修復」を国際協力（ソフィア・ミッション）の哲学に掲げ、4派が和解に向けて共通テーマとするように、その修復を提案したのであった。



カンボジアのアンコール研修所設置 1996年8月

上智大学アンコール研修所は敷地 4,800 m<sup>2</sup>、研修所母屋 282 m<sup>2</sup>、倉庫 36 m<sup>2</sup>である。住所はカンボジア王国シェムリアップ市トレファン地区である。開所式は(1996年)8月29日午後4時にヴァン・モニヴァン国務大臣など関係者80人が列席し、大谷啓治学長が式辞を述べた。

近くの寺院から僧侶6人を招き、カンボジアの伝統儀式にのっとり厳かに執り行われた。

この研修所は、アンコール・ワットから約2.5kmのところであり、シェムリアップ川沿いの果樹林に囲まれた閑静な場所にある。近くにはカンボジア王国政府文化芸術省のアンコール遺跡保存事務所やフランス極東学院がある。

建設の総経費は約3,000万円余り、朝日新聞、東京海上火災キャリアサービス、(株)資生堂、(株)求龍堂および個人の篤志家などのご厚意により全額寄付金により賄われた。建設の目的は、カンボジア人保存官の人材養成を実施するため、若手研修生と教授陣が泊まり込んで、数ヶ月にわたり調査・研究や講義・製図・実習などができる施設が必要であった。2002年10月にアンコール研修所はこれまでのソフィア・ミッションをさらに発展させるため、名称をアジア人材養成研究センターに改称し、「グランド・レイアウト」第1号の新センターとして発足設立されることとなった。

## 2. 上智大学教育・研究・キャンパス再興「グランド・レイアウト」(第1期(2001年-2005年))

### とは何か

アジア人材養成研究センターは2002年10月にアンコール研修所を改組して設立された。上智学院理事会はキャンパス再興「グランド・レイアウト」第1期(2001年-2005年)新ホフマン計画の第1号として新センターへと発展したのである。

2001年5月、上智学院理事会は創立100周年(2013年)に向けて「上智大学 教育・研究・キャンパス再興グランド・レイアウト」を学内外に発表した。①優位性・独自性を樹立する。②国際的評価を受けるに値する高等教育機関になる。③キャンパス・ライフの環境条件を整備充実させる。④21世紀を見据えた教育研究体制を確立するための組織・職制・人事計画を整備する。ことを掲げた。そして理事会は、「グランド・レイアウト」を推進し、実現するために「長期計画企画拡大会議」を設置した。「グランド・レイアウト」第1期(2001年-2005年)で実現した新ホフマン計画の第1号は「アジア人材養成研究センター」であった。

本学の「グランド・レイアウト」は、本学が取り組まなければならない新たな課題が多くあることを認識し、困難な環境を「可能な限りプラスに捉え、恒常的な自己変革体制を構築」し、「厳しい状況変化のなかで、キリスト教精神を土台とした上智大学創立当初からの理念を踏まえつつ、新しい世紀に向け、自由をもたらす真理と福音的正義に基づいた一歩」をさらに踏み出さなければならない(『創立100周年(A.D.2013)上智大学教育・研究・キャンパス再興グランド・レイアウト第1期(2001年-2005年)、第2期(2006年-2010年)に向けて』2006年1月25日版より収載)。

### 3. アジア人材養成研究センター設置の趣旨

(1) 設置の目的：上智大学アジア人材養成センター（以下センター）は、アジア現地に暮らす人たちの自立を援ける人材養成センターであり、同時に、アジア現地から学び、そこに住む人々との協働作業（調査・研究・現場実習など）を通じて地域に機能し、存続する村落・環境・開発・生態および歴史が塗布された文化遺産などの新しい地域研究と自国研究を行い、各学部および大学院各研究科等と密接に協力しながら、アジア研究、中でも東南アジアや南アジア等を研究する大学・研究機関・博物館・現地の行政機関と提携する。本センターは、人材養成とそこから生まれる密度の濃い地域研究を基軸に置き、地球世界にアジア世界に貢献することを目的とする。

設置の形態：上智大学長のもとに、「センター」を置く。センターは、本学学則第6条に定める「附置教育研究機関」とする。

設置の場所：センターは、カンボジア王国シェムリアップ州（Phum Treang Slokram, Srok Siem-Reap, Siem-Reap Province, Cambodia）に置く。

(2) 計画内容（概要）：センターは、上智大学アンコール研修所を改組し、発展させ、これまで以上に活用するために、アジア地域の中堅幹部の人材養成を中・長期計画に基づき現場実習を中心に実施し、同時に人材養成から生み出される自国研究を援け、日本人研究者、学部・大学院学生による現地調査に基づく地域研究の促進を図る。

#### 1) 上智大学の教育理念をアジアで実践：

本学の建学の精神である「キリスト教的ヒューマニズム」を基本に、世界を一つの家族と考え、国際化時代を先取りした教育を実践する。①アンコール・ワットでの活動は、世界・アジアに向けて、本学における国際貢献の発表の場とし、もって、本学の建学の精神を実践する。②センターは、当面、ボルポト時代に虐殺された中堅幹部の欠落を補い、とくに保存官や指導者を養成する。それがカンボジアの自立を援け、遺跡を文化資源と位置づけ、地域発展につながるように支援する。

#### 2) 本学のアジア文化研究：

アジアに生きる人々の生活とその社会・文化を尊重し、強固な信頼関係を結び、彼らの社会を内側から理解し、暮らしや人々の顔が見える地域研究に取り組む。

#### 3) 本学の人材養成をアジアで実践：

(1) 教育活動の拠点としての役割：①「カンボジア人による、カンボジア人のための、カンボジアの遺跡保存修復」を協力の哲学に掲げ、考古発掘および保存修復ができる遺跡保存官および熟練した石工の養成を実施する。②保存官候補者は、歴史学・考古学・政治学および建築学・地質学の講義を受講し、現場実習の指導を受ける。③実習生・研修生は、王立芸術大学・プノンベン大学等から積極的に受け入れる。④センターは、本学の学部、大学院の学生を受け入れ、学生が受講した講義や現場実習が単位の要件を充たしている場合には、学科長・専攻主任がこれを認定する。⑤講義および現場実習は、衛星を通じて四谷キャンパスに同時中継されることを検討する。

- (2) 研究活動の拠点としての役割：①地図や図面の作成・土器の計測・文献研究、そして広い意味の自国研究を行う。また、研究活動は、人文・社会科学、情報科学、自然・環境科学、理工科学の分野を対象とする。②センターには、数百箱におよぶ発掘出土品、数多くの修復現場写真・図面・設計図が保管され、多くの研究者にこれら資料を公開し、提供する。③シンポジウム、講演会、セミナーを開催する。④本学の教職員・学生は、研究活動と研修のため優先的に施設を使うことができる。
- (3) 国際交流の拠点としての役割：①本学の教職員・学生は、カンボジア人とともにアンコール・ワットの清掃、出土遺物の水洗い、ボランティア活動への参加、分野別の特別講義出席などにより、教育的交流を深める。②発掘・修復現場の説明会を開催する。③近隣の住民および小・中学校生徒に、土器や仏像・出土品を見学させるとともに、影絵芝居・トロット（鹿踊り）など村の無形文化財についても発表の機会を提供する。
- (4) 広報活動の拠点としての活動：①日本や東南アジアの専門家・研究者が数多く来所し、国際的な情報交換および研究活動の中心とする。調査団の活動概要（説明パンフレット）を、日本語・カンボジア語・英語・フランス語の各国語で常備する。②センターは、本学の出版物・教育・研究・国際交流の活動報告（英文）を展示し、販売する。③研究活動について、常時、マスメディア関係者と連絡をとる。
- (3) どのような人材を養成するか
- 1) 保存官・石工の養成：
 

10年前からの考古発掘・遺跡修復の現場実習の経験に基づき、考古・建築・保存科学系のカンボジア人研修生を受け入れ、学位取得もしくはこれに準じる学術・技術を学び国際舞台で活躍できる保存官を育成する。
  - 2) 自然環境保全者の養成：
 

保存官・研修員・石工・作業員の中から、自然環境の保全と歴史景観を検分できる州政府官吏になる人間を育成する。熱帯雨林の伐採と乱開発を防ぎ、自然の環節に合わせた村落の発展に役立てる。
  - 3) 自立農民の養成：
 

保存官・研修員・石工・作業員の中から、村落の生産メカニズムを検証できる自立農民を養成する。農村調査・研究を通じて、市場経済を踏まえた貧困撲滅のための新農村運度につながる事が期待される。
  - 4) 研究者の養成：
 

保存官・研究員・石工・作業員の中から、自然（森林）・人間（村落）・文化（遺跡）を基軸に自国研究を推進する研究者を育成する。保存・学術振興・文化観光・生涯教育等の分野における専門家・研究者が輩出されることが期待される。
  - 5) 文化遺産保全ボランティアの養成：
 

森林・村落・遺跡を守るボランティアを育成する。遺跡近隣に住む村人・サラリーマン・小中学校の教員などが、村人に文化遺産保全講座を開き、遺跡の意味・価値・重要性を講義し、

時には発掘・修復現場見学を開催し、理解を深めること（「アジア人材養成研究所センター設置の趣旨」2002年10月「グランド・レイアウト」第1期（2001年-2005年）上智学院理事会より取載）。

### Ⅲ なぜ、上智大学がアンコール・ワットの修復を提案か

#### —ここから、平和構築に向けてアンコール・ワット修復の共同作業開始—

##### 1. ソフィア・ミッションは戦禍に苦しむ人たちを見過ごさない

カンボジア人にとってアンコール・ワットは、今も神・仏（守護精霊）が住み続ける大きな石の祠であり、単なる遺跡ではない。篤い仏教の信仰に脈々と生き続けている聖地でもある。聖地の中心に聳えるアンコール・ワットの威容は特別の存在である。

上智大学は前述のとおり1979年から「インドシナ難民に愛の手を」の募金活動に取り組み、1980年代初めからカンボジア本土へ向け、ソフィア・ミッションを実施してきた。カンボジアは、冷戦時代のおりを受けて、1970年から1993年まで24年間にわたり政治混乱、内戦が続き、その結果、都市住民約100万人の追い出し、約150万人の知識人の虐殺、約200万人の難民流出、地雷による負傷などの大惨禍を被った。そして、1993年にやっと和平にこぎつけた。

上智大学は“Men and Women for others, with others（他者のために、他者と共に生きる）”を建学の精神に掲げ、カンボジアにおいて戦禍に苦しんでいる人たちを見過ごすわけにはいかなかった。カンボジアの人々はすべてを失い、内戦による混乱に喘いでいた。ソフィア・ミッションは困っている人を見捨てない活動である。

振り返れば私たちは4派に分かれて内戦中の1980年代からカンボジア現地へ出かけ、現地において文化復興に向けての人材養成活動を開始し、カンボジアの人たちがアンコール・ワットを自分たちの手で修復する活動を通じて、彼らが勇気と希望を取り戻すお手伝いを続けてきた。

アンコール遺跡の保存と修復事業は、とくにカンボジア人にとって民族文化アイデンティティの再構築のための事業として人材養成活動を着手した。アンコール・ワットは民族の和解にとって共通の話題であり、民族の文化共有遺産そのものであった。「カンボジア人の手による保存修復作業」は、カンボジアの人たちにとって新しい民族共生社会を再構築する共同作業と同じであった。

##### 2. アンコール・ワットは民族の誇り —保存修復は文化復興を先導する波及効果—

カンボジアは1993年に王国として再出発することになった。その時、国家再建のために5大課題に直面していた。第1に戦争（内戦）の傷痕からの復興、第2に国際社会への復帰、第3に脱社会主義化と市場経済への移行、第4に文化アイデンティティの再確立（和解）、第5に貧困からの脱却であった。

その中でも、文化アイデンティティの再構築（和解）には、何よりも民族共有遺産のアンコール・ワットにおいて共同作業の修復事業を実施する必要がある。それは和解に向けての第一歩であった。アンコール・ワットはこれまでに和解と民族団結の「場」を提供してきた。



カンボジア国旗

とくに、アンコール・ワットは、カンボジア人が人類の文化史の文脈から自国の文化を見直し、自分の文化的独自性を再確認する手懸りとなる文化遺産であり、どの民族も自己の独自性の基礎を求めるものはその文化遺産に対してであり、その遺産の修復による学術的解明は大きな民族的誇りをその民族に与えるものである。そしてアンコール遺跡の保存・修復とその研究成果はたんに偏狭な民族主義的誇りをその民族

に与えるのではなく、広く世界に開いた民族の誇りを学ぶことになるのである。

とりわけ、東南アジアの文化遺産の歴史的解明は、古代日本との関係において多くの新しい知見を私たち日本人に与えてくれる可能性がある。さらに、私たち日本人にとってアンコール・ワット研究は、カンボジアの数年に及ぶ奥深い文化とそこに住む人たちをより正しく理解する一助となる。

その先例として挙げるならば、エジプトのヌビア遺跡とボロブドゥール仏跡の保存修復事業は、保存官の人材養成と両国の学術研究を一挙に世界的水準に発展させたという波及効果を実証済みである。2016年から始まるアンコール・ワットの第2期修復事業は、カンボジア人専門家たちの手により実施されることを喜ぶたい。

### 3. アンコール・ワットはカンボジア民族和解に向けて文化共有遺産であった

なぜカンボジア人の手による「アンコール・ワットの保存・修復」を呼びかけたかということ、アンコール・ワットは、国旗の中にアンコール・ワット寺院のシルエットとして描かれ、掲揚してきたカンボジアの人たちに勇気と希望を呼び戻す文化遺産であったからである。前述のとおり、カンボジアはかつて24年間（1920年-1993年）にわたり4派に分かれて内戦が続き、虐殺と難民流出で大混乱を重ねてきた。この民族の和解に向けて共通の願いは「アンコール・ワットの昔に戻って」であった。

これら4派は近隣にあるアンコール時代の遺跡周辺を閉鎖したが、何ひとつ破壊は行わなかった。加えて、プノンペン国立博物館を封鎖し、収蔵庫の宝物を政治混乱から守った。アフガニスタンやイラクの博物館の盗掘とは違うのである。アンコール・ワットはやはり彼らにとって心の拠り所であった。私たちは、カンボジア人が自分たちの手でアンコール・ワットの修復ができるように提案し、誰もが賛同してくれた。私たちはカンボジア人の保存官を養成する現場研修を実施してきた、その技術交流はすでに25年が経過した。

私たちソフィア・ミッションは、カンボジア人たちの奮起をうながし、やる気に希望を託し、彼ら自身の手で修復できるように、一緒に現場研修に取り組んできたのである。

## IV ソフィア・ミッションは平和構築に貢献

### 1. カンボジア人留学生（保存官候補）の大学院教育 —学位取得プログラムから—

(1) 3名の遺跡保存官候補が大学院入学：

上智大学大学院地域研究専攻は1997年にカンボジア人大学院留学生3名を受け入れた。内戦から和平に向かう1991年に王立芸術大学(以下、芸大)が再開され、この3名は入学した1期生、2期生であった。当時芸大では、先生不足で開講されている学科目はわずかであった。多くの先生や若手助手などが内戦で狩り出され、行方不明となり、授業学科目を埋めることができなかった。私たち上智大学教授陣は毎年8月を中心に集中講義を実施してきた。この3名の学生は保存官の幹部候補であった。彼らは日本に着くと、①生活上の日本語を学び、②英語の特訓を受け、③カンボジア文化復興に資する学位請求論文のテーマ探し、④研究方法論の構築などを抱え、前途多難な大学院入学であった。



遺跡内で保存官候補者たちへの集中講義

## (2) S.J.ハウスで英語の特訓：

学位論文は英語で書かねばならなかった。しかし、彼らは芸大在学中に英語を学んでこなかった。そこで、上智大学での特訓が始まった。英語力をつけるため学内で開講している英語系の授業に出席し、朝から晩まで英語に明け暮れた。大学構内にあるイエズス会の修道院S.J.ハウスには、英語教育の先生(神父)たちが住んでおられたので、夕食後2時間の特訓をお願いした。カンボジア人留学生たちは英語で書いた修論・博論のドラフトをS.J.ハウスの先生のところへ持参し、添削を含め特訓のご指導をいただいた。これら留学生18名は全員S.J.ハウスの先生から英語の指導を、個人で6年間にわたり受けてきた。上智大学は国際大学であると同時に建学の精神である「困っている人を助ける」というソフィア・ミッションを最初にS.J.ハウスの先生方に実践いただいたのである。

## (3) 研究意欲にあふれる18名の留学生：

英語による博士の学位請求論文を5年間で仕上げることは日本人の学生であっても困難である。彼らはゼロからの国づくりを背負って来日したが、英語による学位取得は至難の業であった。その陰にはカンボジア人留学生を励ましてきた先生や同級の院生たちの協力があつたことは忘れられない。上智大学が総がかりでソフィア・ミッション(国際協力)を四ッ谷キャンパスにおいて実施していたのである。大学院地域研究専攻の学位請求論文提出者は18名(博士7名、修士11名)であり、現在も19人目の留学生が挑戦している。全員がすでに母国に戻り王国政府の要職に就き活躍している。

## 2. アンコール・ワット西参道第1期起工式1996年 —建築技能者の研修現場から—

アンコール・ワット西参道の起工式が1996年(平成8年)8月29日午前9時に本学の太谷啓治学長が出席して、カンボジア王国シェムリアップ市で行われた。石造大伽藍アンコール・ワットは世界的に有名なアジアで最大級の寺院である。この西参道工事はカンボジア政府アンコール地域遺跡整備機構(略称国立アプサラ機構)との共同事業であり、国家再建に奔走するカンボジアの人た



アンコール・ワット西参道第1期工事

ちを励まし、ゼロから国づくりを始めた彼らを勇気づけ、波及効果が大きい民族再生事業である。

修復する西参道は、環濠をまたぐ陸橋状の参道（長さ約 200m、幅 12m）で、正面に向かって左半分に手をつけることになった。右半分は 60 年代にフランス極東学院の手で修復されたが、70 年以降の内戦で中断していた。左半分は創建当時のままで損壊の恐れがあるため、カンボジア政府が、80 年代から現地に来て人材

養成の保存・修復・調査活動に実績のある上智大学に修復を依頼してきたものである。式典には、近隣の寺院から僧約 20 人が参加し、仏式の伝統儀礼にのっとり、祝賀の古典アプサラ舞踊と民族音楽が入り、カンボジア方式で執り行われた。カンボジア政府からは国務大臣ヴァン・モニヴァン閣下、トンチャイ州知事、今川幸雄前カンボジア日本大使、それに本学の大谷啓治学長、外国諸機関関係者、調査団員などが出席し、近隣の町村の代表や住民など総勢約 500 人が列席した。

アンコール・ワットの西参道はまさしく表玄関に当たる。工期は 12 年、総工費は約 2 億円となったが、アプサラ機構が建材およびカンボジア人作業員の人件費を負担し、上智大学は募金活動を実施し、会社・団体・個人からの浄財が集められた。特にカンボジア人の保存官を養成しながら、修復工事をする西参道の現場が、NHK の「プロジェクト X」番組（2001 年 11 月 21 日（日））に取り上げられ、全国各地から称賛の手紙やメールが寄せられ、さらに現金封筒が届けられた。

保存官候補者は、石工研修生 25 名、作業員 30 名、建築学幹部研修生 5 名など合計 60 名であった。2007 年 10 月まで参道の擁壁 12 段と敷石二層には、保存官たちがラテライト（紅土石）と砂岩約 6,000 個を積み込んだ。この修復工事を通じ、カンボジア人の建築学技能を学んできた研修生は、アンコール・ワット時代の石積み技術水準の精巧さを学び、感動し、再認識した。

2007 年 11 月、西参道 200m のうち、第 1 工区 100m が 12 年に及ぶ修復工事のすえに完成し、カンボジア王国の副首相ソック・アン閣下出席のもと、近隣住民 2,400 名が集まり、竣工式が行われた。同年、カンボジア王国政府はアンコール・ワットの修復工事を担当した石工たちを国家公務員技官職に採用した。

### 3. 世紀の大発見—274体の仏像を地中から発掘—カンボジアの人たちが元気を取り戻す—

考古学分野の現場研修はバンテアイ・クデイ遺跡内で実施されてきた。その現場研修の 11 年目となった 2001 年に境内から 274 体の仏像が地中の埋納坑から発掘された。状況からみて、それは廃仏毀釈された仏像であった。当時の村人たちによって篤信されていた仏像そのものが破壊された。仏像の尊顔は閉眼で慈悲に満ち溢れ、高貴で美しく、10 世紀から 13 世紀頃の仏像と考えられる。これらの仏像はバンテアイ・クデイ寺院の回廊にずっと安置され、村人により灯明や供物が捧げられてきた。アンコール遺跡の存在が世界に知られてからおよそ 160 年になるが、このように仏



像が一箇所の埋納坑から大量に発掘された例は初めてであり、文字どおり世紀の大発掘となった。

大乘仏教に帰依したジャヤヴァルマン7世（1181年-1218年頃）は、アンコール王朝の中で最も数多くの仏教寺院を建立し、大繁栄をもたらした王である。その2代あとに即位したジャヤヴァルマン8世（1243年-1295年）は、ヒンドゥー教を篤信し、王位継承争いから反対派の仏教徒への見せしめ「仏教狩り」を命じたのであった。2001年に大量の廃仏が発掘されたことにより、ジャヤヴァルマン8世の統治下で廃仏毀釈が行われたのであった。このように王の命令が全国に行き届き、国内の治安が維持され、それなりの繁栄が維持されていたことが明らかになった。まさにアンコール王朝末期の歴史動向を示す物的証拠となったのである。

これまでフランス極東学院が立論したアンコール王朝末期の「建寺疲労による亡国」説を否定する物証となったのである。これら国宝の仏像が現場で実習中のカンボジア人研修生の手で発掘されたのである。この時、カンボジア国内の新聞・テレビが大々的に取り上げ、三段抜きの号外扱いであった。テレビが連日報道番組を組んでいた。まさに、カンボジア人考古学研修生の手により発掘がなされた。これまでポルポト政権下の暗い時代に苦しんできたカンボジアの人たちが文化的自負と民族的自信を取り戻すきっかけになった。2010年8月に再び6体の仏像が同じ境内から発掘された。



バンテアイ・クデイ遺跡から発掘された廃仏274体 2001年

#### 4. シハヌーク・イオン博物館の建設 —本学のイニシアティブによる国際貢献—

2002年3月、岡田卓也氏（イオン株名誉会長）がカンボジアにおける植樹活動のためシムリアップを訪れ、アジア人材センターに一時保管していた廃仏274体を見学された。氏は仏像の尊顔の美しさに感動し、これらを展示するための博物館建設を提案。その建設費を本学に寄付くださった。博物館の用地はカンボジア政府が提供し、国立アンコール地域遺跡整備機構（略称アプサラ機構）が管理・維持をすることになった16,200㎡の敷地に2階建て（建築面積1,728㎡）の博物館が建設された。

2007年11月2日、シハモニ国王臨席のもとに博物館の落成式が挙行され、その席上で上智大学は274体の仏像すべてを博物館に収納の上、カンボジア王国政府への移管を宣言し、同時にイオン株からはこの博物館の贈呈状がアプサラ機構へ交付された。博物館入り口正面には、カンボジア王国の国章が掲げられ、カンボジアでも最も格式の高い仏像博物館である。

#### 5. アンコール文化遺産教育センター（Heritage Education）の開設

##### —地域の住民と手を携えて歴史探訪—

2011年12月、バンテアイ・クデイ遺跡内に「アンコール文化遺産教育センター」（日本外務省草の根文化無償）を開設、文化遺産啓蒙教育プロジェクトが本格的に始動した。このセンターは、

周辺住民および小学校・中学校生徒に対し自国の文化遺産への理解を深めてもらえるよう教材パネルを常設展示し、発掘現場の一部を復元（レプリカ）で公開している。また、王立芸大の研修の拠点として活用することを目的としている。

文化遺産啓蒙教育は、すでに2008年から開始され、近隣の小学校生徒・教員ら約1,200名に対して発掘現場の見学やシハヌーク・イオン博物館において写生教室を開いてきた。このセンターは、近隣住民に歓迎されており、外国人観光客との交流の場としても広く利用したいという要望が届いている。



シハヌーク・イオン博物館 2007年11月開館当時



「アンコール文化遺産教育センター」（日本外務省草の根文化無償）2012年12月開所式にて

## 6. 本学の学外共同研究：アンコール遺跡の環境保全プロジェクト — ISO14001認証取得—

2003年度にアンコール地域を訪れた観光客は53万名を数え、2014年度には300万名を突破した。観光客の急増に伴う環境劣化、膨大なゴミ、車両による大気汚染、未処理下水による川の水質汚染、ホテルや駐車場建設による自然林の破壊、歴史景観の消滅など、深刻な問題であり、国際社会やユネスコからは大きな懸念が示された。このような環境劣化に対処するためアプサラ機構は環境マネジメント局を新設し、2003年5月から本学の学外共同研究プロジェクトにより「国際標準化機構（ISO）」の認証取得に向け、約1,200名の職員に対して環境保全の実務研修を開始した。日本からは国際規格研究所、品質保証機構の2機関が環境保全教育に協力し、2006年3月「ISO14001



シムリアップ川辺で夕涼みをする市民たち  
ISO申請前 2003年



ISO取得に向けてMOUに調印するJQA（日本品質保証機構）代表とアプサラ総裁 Bun Narith

認証」を取得した。同年4月、アンコール・ワットにおいて認証式が行われた。アンコール地域の遺跡入場証には「ISO14001」という文字が印字されているが、世界遺産としてISO14001取得は、世界で初めてのことであり、ユネスコから高く評価されている。

## 7. カンボジア発上智大学21世紀 COE プログラム —アジアにおける「知」の再編成—

日本の文部科学省の21世紀 COE プログラムは、世界的な研究教育拠点の形成を目指したプログラムであり、本学は「地域立脚型グローバル・スタディーズの構築」(2002年-2006年)として採択となった。その採択の理由は「カンボジア、特にアンコール・ワットの歴史文化の総合調査研究・交流などの実績は評価できる。上智らしい国際性を活かし、グローバル・スタディーズの構築をさらに具体的に進められることを期待する(日本学術振興会 HP より)」であった。

アジア人材センターはアジアにある海外研究・教育拠点であり、国内外からその活動が高く評価されてきた。特に現地アジアへ職員が出張、人材養成を実施し大きな成果を挙げている。その COE の海外国際シンポはカンボジアのシェムリアップにあるアジア人材センターを会場として4年間にわたり5回開催された。



CEO 海外国際シンポ アジア人材センターにおいて開催

### 第1回「地域から発信するグローバル・スタディーズの方法論構築」

2002年12月27日～27日／出席者約180名(8ヵ国)

### 第2回「文化遺産とアイデンティティとIT(情報技術)」

2004年3月12日～14日／出席者約130名(12ヵ国)

### 第3回「カンボジア版地域自立型発展は可能か—小さな民と農民の声を発信させよう」

2005年2月21日～22日／出席者約120名(9ヵ国)

### 第4回「文化遺産と環境と観光」

2005年12月31日～06年1月1日／出席者約180名(11ヵ国)

## 8. 日本国文部科学省「大学教育の国際化推進プログラム」(戦略的国際連携支援)

上智大学は「文化遺産教育戦略に資する国際連携の推進—熱帯アジアにおける保存官・研究者等の国際教育プログラム」(2006年-2009年)を申請し、採択された。その場所はカンボジアのアジア人材センターにおいて4年間にわたり文化遺産の保存・修復をメイン・テーマに掲げた大学院レベルの講義および現場研修(4週間)が実施された。このプログラムは本学グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻内に併設され、日本で初めて国境を越えた国際「文化遺産学」の大学院教育であった。英語によるアジア文化遺産の専門家会議、併せて現場体験研修が実施された。教授陣は日本、フランス、カンボジア、ミャンマーから、大学院学生は日本、フランス、カンボジアから4

年間で約 90 名が出席し、上智大学大学院の実習認定単位が付与された。

### 9. 「上智大学国際化拠点整備事業（グローバル30）」—現地アジアにおける上智モデル事業—

本学は全国の国公私立 13 大学とともに「グローバル 30（国際化拠点整備事業）」（2009 年）に採択された。カンボジアのアジア人材センターは、これまでにアジア人の大学院教育研究に大きな実績があり、アジア留学関係の情報を収集し、必要があれば東南アジアの留学生受け入れの窓口となっていた。

2012 年 1 月に、中川正春文部科学大臣（当時）はじめ随員 10 人の日本政府関係者が、国際化拠点整備事業視察のため、アンコール・ワット西参道修復現場を訪れた。現地では本学大学院で学位を取得したカンボジア人 Ly Vanna（リ・ヴァナ）博士（シハヌーク・イオン博物館長）や 5 人のカンボジア人卒業生、参道の工事を担当した技官（石工職）ら 19 人が一行を出迎え、本学の 20 数年に及ぶ国際協力と人材養成の成果について彼ら自身が説明した。



中川正春文部科学大臣のアンコール・ワット西参道視察 2012年1月

建学の精神と結びついた本学のアジアにおける国際化拠点事業は、上智モデルとして世界から注目され、先駆的事业として評価されてきた。

### 10. 文化庁「国際協力拠点交流事業 —カンボジアにおける文化遺産保存のための拠点交流事業—」（2010年-2013年）

アジア人材センターは、文化庁から「カンボジアにおける文化遺産保存のための拠点交流事業」（2010 年-2013 年）により 4 年間にわたり約 20 名のカンボジア人学生に対する文化遺産保存修復の専門家養成プログラムを実施してきた。日本、カンボジア両国の教授陣が専門講義と実習を担当し、プログラムは第 1 回が 2010 年 7 月～9 月、第 2 回が 2011 年 7 月～9 月、第 3 回が 2011 年 12 月、第 4 回が 2013 年 7 月～9 月にわたり実施された。併せて、公開シンポジウム「International Symposium on khmerology in Phnom Penh」を 2012 年 1 月にプノンペン大学で開催された。そこには、本学で博士学位取得者らが講師を務め、約 100 人ものカンボジア人学生が受講した。

### 11. 文化庁「国際協力拠点交流事業 —東南アジア 5 ヶ国における文化遺産保存のための拠点交流事業—」（2014年-2015年-2016年）（略称「メコン文化遺産国際プロジェクト」）

文化庁の委託を受けて「東南アジア 5 ヶ国における文化遺産保護のための拠点交流事業（略称メコン文化遺産国際プロジェクト）」を 2014 年から開始された。その拠点会場はカンボジアに在る上智大学アジア人材養成研究センターであり、現場の交流フィールドは上智大がカンボジア人保存官候補者の研修に占有しているアンコール遺跡内のバンテアイ・クデイ寺院跡（考古系）とアンコー



メコン文化遺産国際プロジェクト開会式 2015年8月

ル・ワット（建築系）であった。

第1回目の2014年度および第2回目の2015年度はタイ・ミャンマー・ベトナム・ラオス・カンボジアの東南アジア5ヵ国から文化遺産現場の担当者43名が集まりカントリー・レポートを発表、熱気あふれる質疑応答が14日間にわたり続いた。

この交流事業の目的は、①遺跡現場の担当者同士の相互信頼関係の構築、②担当者同士のネットワークづくり、③文化遺産を活用した地域の国際協力のモデルづくり、④土着技術の再開発を通じ東南アジア版の修復の大綱づくり、⑤文化遺産分野における「南・南協力」の場を設定。日本が主導した初めての試みである。

## 12. アンコール・ワット修復をオール・ジャパンで応援 ―第2期工事はじまる―

アンコール・ワット西参道の修復工事の第2期工事（2016年-2020年）がアプサラ機構と共同工事としてはじまる。このたびの第2期工事には、外務省のODA（一般文化無償資金協力）として採択され、日本からすでに修復に必要な機材が現地に届いている。

実施体制は上智大学アジア人材養成研究センター（本部はシェムリアップ）とアプサラ機構が、合同で「アンコール・ワット技術交流研修委員会」（技術教育・工事指導）を設置し、協議しながら施工計画を作成し、着工していく。この技術交流研修委員会には、日本の建築学・土木工学各分野両学会の専門家が参画し、2015年3月と2016年1月に第1回、第2回「アンコール・ワット技術交流研修委員会」が上智大学で開催され、京都研修が実施された。本工事には6年未満の歳月と総事業経費約7億円が見込まれている。日本政府からは機材が供与されたが、上記のODAには現地の作業員に対する人件費と管理費、石材の購入費並びに供与された機材の燃料費等が含まれていない。

### 13. 結論として：アジアにおけるソフィア・ミッション

#### —25年間（1991年 - 2016年）の12大プロジェクト

- 1) プノンペンの王立芸術大学への集中講義と教授陣派遣（1991年-現在まで）
- 2) アジア現地に「上智大学カンボジア人材養成研究センター」の建設とアジア地域の研究拠点（1996年-現在）
- 3) アンコール遺跡現場における人材養成活動（建築学の現場研修と考古発掘の現場研修）（1991-現在まで）
- 4) 学位取得プログラム—保存官候補者の大学院教育—（1997年-現在まで）
- 5) バンテアイ・クデイ遺跡において280体の仏像発掘（2001年と2010年）
- 6) シハヌーク・イオン博物館の建設（2002年-現在開講中）
- 7) アンコール・ワット西参道第一期工事に100mを修復（1996年-2007年）
- 8) アンコール遺跡がISO（国際標準化機構）の「ISO14001（環境マネジメント）」の認証取得（2003年-2006年）
- 9) 2009年日本国外務省「草の根文化無償支援」により「アンコール文化遺産教育センター」を開設（2009年-現在）
- 10) 日本国外務省 ODA（一般文化無償資金協力）「アンコール・ワット西参道修復機材整備計画」に採択され、全機材がアンコール・ワット西参道の修復現場に到着（2015年-現在）
- 11) 国際シンポジウム「過去から未来へ、アジアにおけるカトリック教会の使命」上智大学の貢献、（上智大学創立100周年記念事業，日時：2014年3月14・15日，会場：ローマ教皇庁立グレゴリアン（Gregoriana）大学・マテオ・リッチ会議場）において Prof. Yoshiaki ISHIZAWA, International Cooperation Among Jesuit Universities in Asia, Sophia's Current Development of Human Resources in Cambodia 発表）
- 12) アンコール・ワット西参道第2期工事（西寄り100m）着工（2016年-）

#### 参考資料

- 1) パウロ・フィステル（編）『日本のイエズス会史—再渡来後、1908年から1983年まで』（非売品）イエズス会日本管区 昭和59年（1984年）刊 pp.246-254
- 2) 上智大学『上智大学通信 創刊号～第100号（昭和43年12月～昭和56年10月）』（縮刷版）、上智大学 pp.657, 660, 662, 666, 687, 698, 713, 714, 732
- 3) *International Symposium between Past and Future, the Mission of Catholic Church in Asia: the Contribution of Sophia University on the Occasion of the 100th anniversary of Sophia University, March 14-15, 2014, Gregoriana 8, Gregorian & Biblical Press, Roma, 2015*
- 4) 遠藤宣雄・丸井雅子・三輪悟・田代亜紀子・阿部千依「調査団年表 上智大学アンコール遺跡国際調査団の50年史（日・英両文併記）」『カンボジアの文化復興』第27号（2011・2012年合併号）pp.146-181

---

# アンコール文化遺産啓蒙教育

—上智大学の国際貢献—

ニム・ソテーヴン

上智大学アジア文化研究所客員研究所員

## はじめに

カンボジアにおける人材養成と文化遺産教育に関連して、私はカンボジア内戦のことを思い出すべきだと思います。なぜならば、約 20 年続いた内戦によってカンボジアは多くの点で、とくに教育分野で後退してしまったからです。ある国の教育システムがうまく機能しなかったなら、その国は発展することはできないでしょう。

内戦中、文化遺産教育は顧みられることがありませんでした。カンボジアにおける考古、文化、遺跡の保存や修復などの分野における大学教育の中心であった王立芸術大学は、1989 年に再び開校するまでほぼ 20 年間、閉鎖されていました。考古学部が再開されても、科学的な教育方法や教育に必要な設備も教材もありませんでした。さらにクメール・ルージュ時代を生き延びた遺跡保存官や考古学者は、ほんのわずかでした。人材の不足は解決しなければならない最大の問題でした。そのため、王立芸術大学は国際的な水準にある他の大学からの支援を必要としていました。

1991 年、王立芸術大学は再開してから初めて外国人の専門家から知識を得ることができました。それは、日本からやってきた上智大学の石澤良昭教授をはじめとする専門家グループでした。それ以来、王立芸術大学の学生が選抜されてアンコール遺跡国際調査団によってアンコール地域での実地教育を受けました。さらに考古学部と建築学部の学生が多数、奨学金を得て日本にやってきました。

こうしてみると、ソフィア・ミッションの目的はアンコール遺跡そのものの研究、保護、修復だけでなく、最大の鍵である人材育成であることがわかります。石澤教授に主導されたソフィア・ミッションは「カンボジア人によるカンボジアのための、カンボジア遺跡の保存修復」という哲学に基づく長期的構想 (Long Term Vision) を持っていました。カンボジア人学生を教育するために研究施設がシェムリアップに設立されました。現在のアジア人材養成研究センターです。この施設はカンボジアにおける日本初の、上智大学がその 21 世紀の国際構想 (International Vision) を実現するための拠点です。この施設のもうひとつのねらいは、アジアにおけるグローバル化に伴う社会問題とそれに関連した現象を研究することでした。

この報告は、主にカンボジアにおいて、上智大学がどのように国際教育に貢献してきたか、ソフィア・ミッションが初期に行った王立芸術大学学生の教育から現在に至るまでのさまざまな活動のあらましをみていきます。

## 文化遺産の保存と修復の歴史の概略

19世紀半ばの Henri Mouhot によるアンコールの探検と旅行記の出版以来、アンコールはヨーロッパを、とくにフランスを魅了し、大きな衝撃を与えてきました。それ以来、アジアで植民地の経営を進めようとするフランスにとってアンコール・ワットは遺跡の修復と研究における植民地政策の象徴になりました。

カンボジアがフランスから独立したのち、1960年に Norodom Sihanouk 王はアンコールを訪れました。それ以降、国王はカンボジアのナショナリズムの威信を高めるために、文化遺産の保護に対する関心を表明するようになりました。国王はカンボジアのナショナリズムのもとでの文化遺産の保護の必要性に対するひとつの答えとして、1965年に王立芸術大学を設立しました。王立芸術大学の設立は称賛されました。考古学、建築学、歴史学、民族学、そして遺跡の保存修復に関連した学科を作ることが計画されました。多くの学生が各学部を卒業し、そのうちの何人かは海外に留学し、勉強を続けました。その他にはアンコール地域で遺跡の保存修復、民族学の研究、考古学的な発掘調査などを行いました。

王立芸術大学の活発な活動は1975年、クメール・ルージュの支配が始まるまで続けました。クメール・ルージュの支配のもとで、多数の文化遺産が破壊され、遺跡の保護にたずさわっていた多くの人たちが犠牲になりました。その結果、遺跡や歴史的に重要な場所は危険な状態におかれました。1979年にクメール・ルージュの支配が終わった後、遺跡の維持と保護の活動がほぼそと始まりました。1989年まで、アンコール遺跡に対する新たな修復活動が複数の国によって行われました。その中にはインド、ポーランド、ソ連のチームが含まれていました。その後、日本の上智大学、フランスの EFEO (フランス極東学院)、アメリカの World Monuments Fund、それにドイツ、イタリア、インドネシア、中国などによって、アンコール遺跡群の保存修復が行われていました。

とくに上智大学のプロジェクトはアンコール遺跡の保存修復とカンボジア社会における人材養成の発展、その復興のよい事例を提供しています。このプロジェクトのリーダーは、カンボジアにおける遺跡保護についての最初の外国人専門家である上智大学の石澤教授でした。石澤教授はクメール・ルージュ時代が終わった直後の1980年にカンボジアを訪れました。その時、カンボジアは非常に困難で危険な状況にありました。

## 文化遺産教育における上智大学の貢献

内戦から20年を経た1989年に、クメール・ルージュの時代を生き延びたわずか4、5人の遺跡保存官や考古学者とともに王立芸術大学の考古学部と建築学部が再開されました。教官は Chuch Phoeurn 先生、Ang Choulean 先生、Pich Keo 先生、Hor Loat 先生、Uk Chea 先生などでした。考古学部の再開が可能になったのは、彼らが深くかわり、努力を重ねたからでした。考古学部再開



にあたっての目標は、彼らの責任において、カンボジアの文化遺産という領域で若いカンボジア人学生を促し訓練することでした。当時、教材や教官の不足のためにわずか30人の学生が選ばれました。

再開から3年後の1991年、石澤教授に率いられた多くの専門家や教授が考古学部と建築学部での教育プログラムを開始しました。その当時、私はthe foundation course（基礎コース）に在籍していました。学部は5年制です。基礎コースはフランス語でClass de Propédeutique（予備課程）と呼ばれ、1年生から4年生まではLicence I～Licence IVと呼ばれました。私が外国人の教授から学ぶのは初めてでした。私は感動しました。考古学部と建築学部を卒業した学生たちは皆、いまでもそのころをよく記憶しており、こういう機会を得たことを決して忘れないでしょう。現在の王立芸術大学で当時のような機会がないのはなぜなのか、と考えている者もいます。

ソフィア・ミッションについていえば、学部における教育プログラムはその後上智大学研修所（現 アジア人材養成研究センター）での実地教育に変更されました。研修所はシムリアップの人たちが学校を意味するSala Sofiaとしてよく知られています。シムリアップには多くの遺跡や歴史的な場所、そして独特の文化があります。そしてまたシムリアップでは理論と実践の双方を学ぶことができていました。それ以降、考古学部と建築学部の学生が選ばれてアンコール地域での教育プログラムに参加するようになりました。プログラムは当時、1年に3回行われ、それぞれ15名以上が実地教育を受けていました。私は1994年からアンコール遺跡国際調査団のスタッフになる1999年までの間、このプログラムに参加する機会を得ました。

私が上智大学研修所で教育を受けているとき、石澤先生は私たちを遺跡に連れて行き、遺跡の歴史と遺跡保存の方法論について説明しました。そして先生は私たちに意見を述べさせ、みなで議論するように言われたことを覚えています。私たちにとってそれは外国人の教授から直接に学ぶ貴重なチャンスです。石澤先生の哲学は私たちが知るのではなく、ものを理解すること、感じることに、そして尊重することです。それは古代の人々の歴史、社会、伝統文化を理解すること、その当時から現在まで残されたものを尊重することを意味します。ある対象に触れるとき、人は少なくとも学び、理解する可能性を持っているといえるでしょう。

最も重要な目的は、石澤先生とそのチームが日本から持ち込んだ技術によって私たちを教育したのではなく、遺跡における実地の活動から得た経験に基づく方法論を試みたことです。たとえばこのような例があります。アンコール・ワット西参道修復プロジェクトは古代カンボジアの技法を用いましたし、発掘によって発見された遺物には現地の伝統的な儀式を行いました。私たちはこういう考え方を心から感謝しており、尊敬します。

ソフィア・ミッションのプロジェクトは、私たちがアイデアを出しそれを実行するような環境を整えてくれました。たとえば1998年、私たちはアンコール遺跡群の中、とくにアンコール・ワットとアンコール・トムでの清掃プログラムを立ち上げました。その時、町から来た不敬な人々が大量のゴミ（とくにプラスチック類）を捨てていました。私たちはバンテアイ・クデイ寺院に近いロハール村に住んでいる人を10人ほど招き、ソフィア・ミッションが提供した小額のお礼を払ってゴミ拾いプロジェクトに参加してもらいました。われわれのねらいはゴミを拾うことだけでなく、

村人が遺跡の価値をもっと深く理解すること、プロジェクトによってカンボジア人の訪問者に遺跡について考え、遺跡を尊重するようアピールすることでした。

石澤先生の指導と推薦のもとで行われているシェムリアップの研修所での教育プログラムの一方で、1997年から現在に至るまで20人以上のカンボジア人学生が来日し、上智大学、東京芸術大学、日本大学、神奈川県研修センターなどで学びました。彼らは遺跡の保存と研究に役立つ考古学、カンボジア古代史、保存修復学、遺跡エンジニアリング、古代建築、博物館学などの異なった分野で修士号や博士号を取得することを期待されていました。彼らのすべてが博士号・修士号を取得し、帰国して文化芸術省やAPSARA機構（カンボジア政府機関のアンコール地域遺跡保存整備機構）、文化遺産の保存修復の分野で働いています。

## 結論

これまでに述べてきたように、ソフィア・ミッションの目標は文化遺産保存の長期的構想における重要な認識である人材養成に焦点をあわせています。ハードウェアとソフトウェアは同時に解決される必要があります。仮にプロジェクトが遺跡の修復作業だけを考慮しているとすれば、そのプロジェクトは短命に終わるでしょう。ある修復作業が終わったとしても、100年200年が経過すれば廃墟になるでしょう。しかし人々への教育は長期にわたって続くに違いありません。なぜなら教育を受けた人々は次の世代を教育するからです。

一方、カンボジアの場合、アンコールの文化遺産保存修復は有形と無形の両面にわたって行われるべきです。なぜならアンコール地域には寺院遺跡があるだけでなく、信仰、伝統、生活習慣といった現在も生きている文化があるからです。これらの生きている文化は寺院の近くに住んでいる人々によって実践されています。寺院は人々の信仰や伝統的習慣が残っている限り生き続けることができます。ですので、遺跡も遺跡に住んでいる人々も救うべきです。

さらに、上智大学21世紀COEプログラム「地域立脚型グローバル・スタディーズの構築」による4つの国際シンポジウムがシェムリアップのアジア人材養成研究センターで行われました。これらのシンポジウムでは、著名な専門家や教授をヨーロッパやアジア諸国から招いてグローバル化の中で起こるさまざまな問題を議論しています。またこれらのシンポジウムでは地域研究や国際関係論を含むさまざまな問題について、カンボジアと日本の若手研究者が研究成果を発表することができました。またカンボジアの学生にはこれらの国際的な議論を聞く機会が与えられています。

こうして、カンボジアにおける上智大学の文化遺産教育を通じた国際教育は、文化遺産保存修復に対する理解を深めることに貢献しています。異なった文化の相互関係は、互いに結びつくこと、平和に生きること、相互理解の世界に生きること、戦争のない世界に生きingことを表明しています。

## 【参考文献】

日本語文献：

石澤良昭

- 2001 「上智大学アンコール調査団の活動概要（2000年～2001年）」、『カンボジアの文化復興（18）』、上智大学アジア文化研究所、pp. 3-5

欧文文献：

Ang Choulean

- 2001 “La faculté d’archéologie”, Bulletin of the Students of the Department of Archaeology, Phnom Penh, November, p. 1 (in Khmer language) & p. 29 (in French).

Christophe Pottier

- 2000 “The contribution of the École Française d’Extrême Orient with respect to the Cultural Heritage of Angkor during the past 100 years”, *JSAS*, No. 18, pp. 253-262.

Nhim Sotheavin

- 2013 “Activities of the Sophia Mission and Cultural Heritage Education”, *Investigation of the Angkor Monuments*, Sophia Asia Center for Research and Human Development, pp. 25-53.

Ishizawa Yoshiaki, et all

- 1990 *Study on the preservation of historic cities and social cultural heritage development*, Cultural Heritage in Asia (5), Institute of Asian Culture, Sophia University, Tokyo.

Ishizawa Yoshiaki

- 1999 “Training projects 1991-1999: Project for training Cambodian specialists enters 9<sup>th</sup> year”, *Renaissance Culturelle du Cambodge* (16), Institute of Asian Cultures, Sophia University, Tokyo, pp. 283-287.

Ishizawa Yoshiaki

- 2006 “Setting a stage for Area-Based Global Studies: A report four International Symposia and a training session for young researchers sponsored by Sophia University’s COE Program”, *Asian Research Trends*, New Series, No. 1, The Toyo Bunko.



王立芸術大学の学生によるバンテアイ・クデイ発掘調査（現場実習）



出土遺物整理作業（上智大学アジア人材養成研究センター 於シムリアップにて）



バンテアイ・クデイ内清掃作業（写真：荒樋久雄、1999年6月）



第1回遺跡見学会（現地説明会）の様子（写真：荒樋久雄、1999年）



\*文化遺産にかかわる人材養成と教育とは、研究者・専門家養成にのみ寄与するものではない。それはまた、カンボジア人研修生を通じて知識・知恵を地域社会と共有するという活動も含む。

---

# カンボジア王立芸術大学における 「クメール美術史」集中講義から (2013年～2014年)

久保真紀子  
上智大学アジア人材養成研究センター研究員

## はじめに

2014年3月から2015年1月まで4回にわたって、筆者は、プノンペンのカンボジア王立芸術大学 (Royal University of Fine Arts, Cambodia、以下 RUFA とする) の考古学部において、特別講義を行った。この特別講義は、上智大学アジア人材養成研究センターの文化遺産教育プログラムの一環として実施された。上智大学関係者が RUFA のキャンパスにおいて講義を行うのは、1990年代後半以来のことである。本報告では、この特別講義の記録として、講義の実施に至るまでの経緯や、講義内容、および今後の展望を記したい。

## 1. 実施に至るまでの経緯

### (1) 企画の背景

この特別講義が企画された最初のきっかけは、RUFA 考古学部の教員からの提案であった。2013年12月上旬にシムリアップで開催された国際学会 (Siem Reap Conference) で、筆者は発表者として登壇した。この学会では、カンボジアのヴィジュアル・アートという大きなテーマのもとに、考古学や美術史の研究者や美術教師、現代アートの作家等、幅広い分野の人々が集まり、研究発表や作品発表を行った<sup>1)</sup>。筆者の発表内容は、12世紀末に建造されたクメール寺院建築、プレア・カンに施された浮彫装飾の図像表現や様式的特徴、およびその配置傾向と、寺院内で確認された碑文の記述内容から、建造者であるジャヤヴァルマン7世の宗教観や政治戦略について考察するというものであった。

この学会には RUFA 考古学部の教員や学生 (当時の3年生) が大勢参加しており、教員の1人である Ya Da 先生が筆者の研究に関心を示され、特別講師として RUFA 考古学部で講義をしてみませんか、と声をかけてくださったのである。考古学部の学生は、大学のカリキュラムとしてク

---

1) Siem Reap Conference on Special Topics in Khmer Studies, 4th Annual International Conference, 2013年12月、シムリアップにて開催。

メール美術史や美術史概論等の講義を受講する機会はある<sup>2)</sup>、個別具体的な研究内容や方法論について詳しく話を聞く機会があまりないので、筆者の博士論文の内容や方法論を学生たちに話してほしい、ということだった。その場は、少し考えてから返事をする伝えたのだが、その後、前考古学部長の Pheng Sytha 先生や、上智大学の石澤良明先生ならびに丸井雅子先生からのご推薦も頂戴し、特別講義を実施することになった。筆者は 2012 年に博士論文を提出した後、カンボジア、シェムリアップのアンコール保存事務所を拠点に留学し、遺跡の調査研究を継続していた。これまでに大学での講師経験はなく、学生に教えるのは、大学 4 年時に出身高校で教育実習を行って以来のことであった。経験のない自分に講師が務まるのだろうかと非常に不安を感じたものの、自分自身を成長させられる良い機会と考えて、挑戦することにした。

## (2) RUFA での打ち合わせ

2013 年 12 月中旬から 1 月下旬にかけて、RUFA 考古学部の Pheng Sytha 先生や Ya Da 先生とメールで連絡を取り合い、特別講義を実施したい旨を伝え、了解を得た。その後、2014 年 1 月 28 日(月)に、RUFA にて現・考古学部長の Mourn Sopheap 先生および Ya Da 先生と筆者の 3 人で、特別講義の日程や内容に関して打ち合わせを行った。その打ち合わせでは、考古学部 2 年生 34 名<sup>3)</sup>が受講することや、講義は 1 回 2 時間、全 4 回を行うこと、筆者の都合に合わせて実施日の希望を出すことができ、2～3 週間前に Sopheap 先生に希望日を伝えて、日程を調整してもらうこと、配布資料は事前にメールで大学に送付するとともに、講義で使用する機材(PC、プロジェクター、レーザーポインター等)を伝えること、講義内容は筆者の博士論文を題材としながら、クメール美術史の調査方法について教えること、学生たちが閲覧できるように、博士論文のコピーを 1 部 RUFA の付属図書館に寄贈すること、特別講師として正式に受け入れられるために、RUFA に履歴書を提出すること、そして、4 回の講義が完了した後に、RUFA から修了証を発行してもらうこと等を確認し合った。また、講義での使用言語について、RUFA の先生方からは、学生たちが理解しやすいよう、できる限りクメール語で行ってもらいたいとの要望が出された。しかし、筆者にとって、専門的な研究内容の説明すべてをクメール語で行うことは難しい。そのため、後日、講義では英語を中心に使用し、必要に応じてクメール語による補足説明を行いたい旨を伝えた。その場合は、当日の配布資料の中にクメール語のハンドアウトも添付してほしいと RUFA 側から要望が出され、英語のハンドアウトとともに、それをクメール語に翻訳したハンドアウトも添付することに

---

2) RUFA 考古学部の時間割表(2014～2015年)を見ると、美術史に関する科目としては、2 年次に「アンコール期のクメール美術」「インド美術史」、3 年次に「中世のクメール美術史」「美術史概論」「インドネシア美術史」があり、それぞれ通年で履修することになっている。さらに、3 年生および遺跡ガイドを対象とした「神話彫刻」「画像学」といった科目も設けられている。その他、2～4 年生対象に、サンスクリット語やパーリ語、古クメール語碑文、考古学、陶磁器研究、保存科学、文化人類学、博物館学、遺跡マネジメント等に関するさまざまな科目が設けられているが、それらの中でも、美術史に関する科目数は比較的多いようである。なお、この時間割表は考古学部長 Mourn Sopheap 先生からご提供いただいた。篤く御礼申し上げます。

3) 第 3 回講義以降は 3 年生に進級。

した。当初は講義では筆者の研究内容をよく理解しているカンボジア人に同席していただき、通訳や補足説明をお願いする方が良いのではないかと考えたが、最終的には筆者が1人ですべての説明を行うことにした。

また、RUFAでの打ち合わせの後に、講義準備の参考にするため何か講義を1つ見学したいとお願ひし、4年生を対象とした「博物館学」の講義（講師：Sam Thida先生）を見学させていただいた。その講義では、講師が説明するだけでなく、学生を次々に指名しながら回答させたり、意見を述べさせたりする方法が採られていた。指名された学生の話や、周りの学生もじっと興味深い様子で聞いている姿が印象的で、講師と学生たちが全員で一体となって講義を作り上げている雰囲気が感じられ、参考にしたいと思った。

### (3) 講義の準備

講義はパワーポイントで作成したスライドを中心に行うこととし、途中の休憩をはさんで1時間ずつ、毎回2本のスライドを準備した。学生には、講義内容をまとめたハンドアウト（英語・クメール語）や、講義で使用する専門用語を概説した用語集（英語・クメール語）、図版（寺院の平面図や概略図）、宿題やリアクションペーパーの用紙等を毎回準備し、あらかじめ印刷して学生に配布してほしいとRUFAの先生方をお願いした。

これら講義資料の準備においては、筆者の友人である数人のカンボジア人研究者が手伝ってくれた。まず、ハンドアウトと用語集のクメール語への翻訳は、アンコール国立博物館（Angkor National Museum）の考古学スタッフであるTuon Sorpheaさんをお願いした。最初に、筆者が英語で作成したもの（付属資料1、2）をメールで送り、彼女はそれを若い学生たちにも分かりやすい表現を用いて、クメール語に翻訳してくれた。筆者も英語版ハンドアウトを作る際には、学生たちが興味を持って勉強するきっかけとなることを願って、分かりやすい内容にするよう心掛けていたのだが、それでもやはり難しい用語や文章が多く含まれていたようだ。そういった部分を、Sorpheaさんは同僚のスタッフの方々（Thong Bunthoeunさん、Seng Kompheakさん）と相談して、平易な言葉を使って訳したり、難しい用語の注釈を入れたり、工夫してクメール語版のハンドアウトを作ってくれた（付属資料3、4）。

また、Kompheakさんには、講義内容を考える段階で相談に乗ってもらった。彼からは、毎回宿題を出すと学生たちにとって良い復習になるし、やる気も増すだろうから良いのでは、というアドバイスをもらい、やってみることにした（付属資料7）。

さらに、クメール語の用語や説明の仕方については、アプサラ機構（Authority for Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap）のスタッフであり、筆者と同じくクメール寺院建築に施された浮彫装飾について研究しているPhoeung Daraさんに詳しく教えてもらい、講義で活かすことができた。

準備を手伝ってくれた友人たちは全員RUFA考古学部の卒業生であり、母校の後輩のためにと、非常に親身になって手伝ってくれた。彼らの手助けのおかげで、講義の準備を順調に進めることができた。職場での業務で忙しいにもかかわらず、快く手伝いを引き受けていただき、心から感謝し

ている。

## 2. 講義概要

4回の講義日時や配布資料、講義内容、および講義中の様子について、以下に記す。

### 第1回講義

実施日時：2014年3月28日（金）9時30分～11時30分

配布資料：ハンドアウト（英語・クメール語、各A4用紙2枚）、用語集（英語・クメール語、各A4用紙3枚）、図版と宿題およびリアクションペーパー（A4用紙6枚）

内 容：

講義前半は、初回の導入として、筆者の自己紹介や研究テーマの紹介をした上で、この特別講義は筆者の博士論文の内容を分かりやすく紹介するものであり、毎回具体的な例を見て、全員で考えながら講義を進めていきたいということ話をした。また、議論の中心となるのはジャヤヴァルマン7世統治期（12世紀後半～13世紀初）であること、筆者の研究の目的は、当時の寺院伽藍に祀られた尊像の配置構成を考察し、その歴史的背景を明らかにすることであると説明した。そして、それを明らかにするための資料として、石柱に刻まれたサンスクリット語碑文、寺院内から発見され、かつては寺院内に安置されていたと思われる丸彫彫像、寺院を構成する幾つかの施設の出入口枠に刻まれた古クメール語碑文、各施設の出入口を構成する部材（ベディメント、リントル等）に刻まれた浮彫装飾があることを紹介した。

後半は、上記の資料のうち、丸彫彫像に焦点を当て、その資料的な有用性と限界を解説した。宿題は、クメール美術の本を見て、その中から自分の好きな彫像を選び、その彫像のスケッチや、様式的・図像的特徴を自分の言葉で記述すること（以下、ディスクリプションとする）、そして、本に記されている解釈や、その彫像に関する印象や感想などを、自由に記述するものであった。

講義中の様子：

講義の進め方において重視したのは、学生たちにできる限り分かりやすく内容を伝えることと、学生へ頻りに質問して答えてもらったり、ハンドアウトを音読してもらったりと、彼らが主体的に講義に参加できるような雰囲気作りをすることであった。そのため、あらかじめ準備していた原稿をただ読み上げるのではなく、学生の方を見て反応を確かめながら、時にはアドリブやジェスチャー、キーワードやイラストの板書を交えて、ゆっくりと大きな声で語りかけるように話すよう心掛けた（写真1）。



写真1 板書しながら説明する筆者



学生の中には、英語の堪能な学生もいれば、そうではない学生もおり、かなり個人差があるようであった。筆者の話を聞きながら聞く学生や、難しい顔で考え込む学生等、さまざまな反応が見られた。そうした問題はあったものの、多くの学生が筆者の話に対して一生懸命に考え、答えようとしてくれた。実を言えば、講義開始直後には、学生たちから少し戸惑った空気が感じられたのだが、次第に講義に集中して、身を乗り出して話を聞いたり、ノートを取ったり、自主的に質問をしたりと、積極的な姿勢を見せる学生が増えてきた。

## 第2回講義

実施日時：2014年5月29日（木）9時30分～11時30分

配布資料：ハンドアウト（英語・クメール語、各A4用紙2枚）、図版と宿題およびリアクションペーパー（各A4用紙6枚）

内 容：

この回は、寺院に祀られた尊像の配置構成を考察する2つ目の資料として、出入口枠に刻まれた古クメール語の碑文に焦点を当てた。ブレア・カンで見られる幾つかの例を紹介しながら、その資料的な有用性と限界について学んだ。

講義中の様子：

学生たちは、この特別講義以前にも、平常時のカリキュラムの中で古クメール語碑文の講義を受けているということで、すでにある程度の知識があり、質問に対する反応も速く、話を進めやすかった。

一方で問題もあった。学生たちはこの日、筆者の講義があることを事前に知らされておらず、第1回目講義での宿題を誰一人として持ってきていなかったのである。この特別講義が不定期に行われるものであることから、こういったハプニングは起こり得るものであろう。こうした事情から、講義前半に学生たちによる宿題発表会をしようと考えていた当初の計画を急遽変更し、万が一に備えてあらかじめ準備していた2枚の浮彫の写真のスライドで順番に見せて、スケッチとディスクリプションをしてもらうことにした（付属資料5、6）。その後、4人の学生に簡単に発表してもらった（写真2、3）。



写真2、3 学生たちによるプレゼンテーション

この発表会は非常に盛り上がった。予定通りにはいかなかったものの、結果的には良い雰囲気で講義を終えることができた。

しかしながら、せっかく計画して準備した講義なので、毎回想定外のことがばかり起きて困ってしまう。次回以降はできるだけ計画通りに進めたい、それに、宿題も提出してもらいたいという思いから、講義の前には、RUFAの先生方に日程の周知と宿題をやってくるように確認をしてもらうようお願いすることにした。

### 第3回講義

実施日時：2014年10月24日（木）7時30分～9時30分

配布資料：ハンドアウト（英語・クメール語、各A4用紙2枚）、宿題とリアクションペーパー（A4用紙2枚）

内 容：

この回は、寺院に祀られた尊像の配置構成を考察する3つ目の資料として、出入口構成部材に施された浮彫装飾に焦点を当てた。この浮彫装飾は、筆者の研究における主要な資料であり、4回の特別講義の中でとくに重要な部分として力を入れたい部分であった。前半は、出入口構成部材の呼称や装飾文様を紹介し、クメール建築史におけるこれら装飾の変遷について概説した。

後半は、第2回目の講義後半で行って回収していた2つの浮彫のスケッチとディスクリプションに筆者があらかじめ赤字でコメントやアドバイスを書きこんでおいたものを、学生1人1人に手渡しで返却した。その後、補足説明として、浮彫に表現された主題について学生たちがより深く理解できるよう、物語の場面を詳しく説明したとともに、同じ場面が表されているタイの壁画やインドの細密画の写真を用いて図像的特徴を解説した。

講義中の様子：

学生たちは3年生に進級し、それに伴い教室も変わった。当時、考古学部では校舎の改修工事が行われていたため、授業中にもその工事の音が鳴り響くことがあったが、音量を上げて乗り切った。今回は第2回講義の反省を踏まえて、講義日時や宿題についての事前確認を先生方をお願いしていたので、学生たちは落ち着いており、宿題を提出する学生も数人いた。その宿題の中には、かなり良い出来栄の意欲的なものもあった。

そうは言っても、学生の態度はさまざまで、講義中にあくびをしたり、ひそひそ声で話をしたりする学生もいた。その一方で、大変熱心な学生も数人おり、休憩時間等に次々と質問や感想を話しに来てくれた。彼らは、クメール美術史の調査研究について、これまで詳しい話を聞く機会があまりなかったということで、この講義を楽しみにしているという。この特別講義によって、若者たちがクメール美術史の研究を志すきっかけになればと願っているのだから、このような感想を聞くことができるととても嬉しく、手応えを感じた。

ただ依然として、言葉の壁に苦勞している学生や、前回の講義から時間が開いてしまったことから内容を忘れていたような学生も見受けられ、不規則な講義という点で難しさを感じた。英語で伝わってないと感じたときにはクメール語の説明も補うようにしたが、私の方もクメール語の語彙

力が十分ではないため簡単ではなく、時間がかかった。理解している学生や、理解しようと努める学生が何人もいることは確かで、彼らが良い反応を示してくれることは筆者にとって大きな励みになった。しかし、その他の学生に対しても、いかにわかりやすく的確に伝え、興味を持ってもらえるか、よりいっそうの工夫が必要だと思った。

また、準備段階において、前回の講義でのスケッチおよびディスクリプションへのコメントやアドバイスの記入には時間がかかったが、それぞれに個性が感じられて、とても楽しい作業であった。その返却時、受け取った学生たちは、驚きや照れ臭さを感じたのか、歓声や笑い声を上げながらコメントを読んでいた。

#### 第4回講義

実施日時：2015年1月30日（金）7時30分～9時30分

配布資料：ハンドアウト（英語・クメール語、各A4用紙2枚）、図版（A4用紙2枚）

内 容：

この日は最終回であり、これまで3回の講義内容を総括するための時間であった。はじめに、前回の講義で学んだ出入口構成部材に施された装飾の資料的な有用性について復習した後で、プレア・カンの伽藍の各区域に見られる幾つかの浮彫を順に見て観察しながら、それぞれに表現されている主題を全員で考えた。筆者からは、主題となっている神話や物語の場面について補足的に解説した。

次に、これまでの議論の総括として、以下の点を話した。1つ目に、出入口構成部材に施された浮彫、寺院から発見された丸彫彫像、および出入口枠に刻まれた碑文を照合させた結果、プレア・カンの伽藍を構成する各区域では、仏教やヒンドゥー教が王に対する個人崇拜や祖先崇拜と密接に関連しながら信仰されていた可能性があること、2つ目に、出入口構成部材に刻まれた装飾は、単なる建築を飾るものであるだけでなく、施設内部に祀られた尊像を施設外部に表象するという重要な役割も担っており、それらは歴史を考える上で重要な資料の1つであることを説明した。

そして、この特別講義の締めくくりとして、美術史の研究で大事なことは、対象作品をよく観察して、何がどのような形でどのような状況の中で表現されているのか、作品全体としてはどのような場面が表されているのか等を考え、自分の言葉で表現すること、そして、作者や施主の意図や思想、その作品が作られた当時の歴史的背景について、碑文史料や考古資料および建築等、周辺のさまざまな資料から得られる情報と比較検討しながら考えを巡らせていくことであると話した。こうした点を忘れずに、カンボジアの歴史をより深く理解することを目指して、今後もクメール美術史を学んでいってほしいと伝えた。

講義中の様子：

この回では、かなり多くの学生が宿題を提出した（付属資料7）。さらに、そのほとんどが「宿題やってきました！ 出していいですか？」と自ら主体的に提出しに来た。その様子から、彼らが楽しんで一生懸命宿題に取り組んでいることが伝わってきて、嬉しさが胸がいっぱいになった。

講義内容は、筆者の博士論文の結論部に該当する話だったため、内容がやや複雑で抽象的であっ

たと思う。説明する際には、分かりやすい言葉を用いてできる限り噛み砕いて話したが、すぐには理解できない学生もいたようだった。最後に設けた質問の時間には、4人ほどの学生が次々と質問をした(写真4)。「……の部分がよく分からなかったので、もう一度説明をお願いします」といった要望や、重要な点について鋭く問いかける質問が幾つもあり、難しさを感じながらも深く理解しようと努めている様子が見られた。自分が何を理解できていないのかを明確化することや、自分の理解したことを言葉で説明しようと努力することは、何かを学ぶプロセスの中で、非常に大切なことである。学生たちのこうした様子を見て、回を重ねるごとに、彼らの態度の中に真剣さと集中力が増してきたように感じた。

講義終了後には全員で集合写真を撮り、笑顔で楽しく終えることができた(写真5)。



写真4 質問する学生



写真5 講義終了後の記念撮影

### 3. 学生たちの印象

4回の講義をとおして、筆者が学生たちから受けた印象として、以下に3点指摘したい。1つ目は、個人差はあるにせよ、学生たちの多くは、アンコール期の彫像や浮彫の主題となったヒンドゥー教や仏教の神々や物語、およびそれらを表現した図像について、ある程度の知識を持っているということである。ただ、その知識は断片的であることが多く、浮彫の主題となった物語の一部始終を説明できる学生は僅かだった。中には、僅かな知識をもとに、想像力で繋ぎ合わせて、新たに物語を創作して説明する学生もいた。しかしながら、本等から得た情報だけに頼って自分で考えることを疎かにするよりも、まず、目の前にあるものを見て、それが何を表したのかを想像してみるの方が重要であると、筆者は考える。学生たちには、自分自身でそれがどのような場面かを考えた上で、本を開き、自分の考えは正しいのかどうか、物語の詳細を確認し知識を増やすように勉強を進めてもらいたい。

2つ目として、学生たちは、作品をじっくりと観察して、その様式的特徴や図像的特徴を自らの言葉で記述するディスクリプションを練習したことはなく、今回の特別講義が初めての経験だったようである。特徴を細かく観察して言語化できる学生がいた一方で、あらかじめ持っていた知識、例えば浮彫の主題となった物語の題名や、神像の名前等を挙げるだけで満足してしまう学生も多く見られた。美術を学ぶことにおいて、知識を暗記することはもちろん大切な勉強である。しかし、それよりもまず、事前の知識や先入観のない状態で、自分の見たものや理解したことを言葉で表現してみることが大切である。講義でも、このことを繰り返し強調したのだが、若い学生たちがその重要性を理解するにはもう少し時間や経験が必要なのかもしれない。

3つ目は、人前で発言することを嫌がらず、むしろ進んでやろうとする学生が多いということ、そして、彼らは一旦話し出すと、比較的長く、多くのことを語ってくれるということだ。発言者の話を、周囲の学生もしっかりと聞いており、クラスに一体感が感じられた。カンボジア人は話好きの人が多く、家族や親戚や友人等が集まって賑やかにおしゃべりを楽しむ光景がよく見られるが、そういった日頃からの慣習やカンボジア人独特のコミュニケーションの取り方が影響しているのかもしれない。

### おわりに—今後の展望

約1年の間に4回の特別講義を無事に終えることができた今は、ただただ安堵の気持ちでいっぱいである。このような貴重な機会を提供してくださったRUFUの先生方や、経験が少ない故に不安を感じる筆者の背中を押し、応援してくださった石澤先生と丸井先生はじめ、上智大学アジア人材養成研究センターの皆様、準備を手伝ってくれた友人たち、そして、受講した学生たちには、心から感謝している。

1度きりの講義ではなく、継続して講義を行う形を採ったことで、学生とともに筆者自身も回を重ねるごとに成長できたと実感している。準備段階では、若い学生たちに対して自分の考えを伝え理解してもらうにはどのようにして伝えと良いか、悩み、試行錯誤を重ね、毎回講義直前までイメージトレーニングや練習を繰り返した。しかし、実際の講義では、必ずしもすべてが練習通りに

いくとは限らない。本番ではむしろ、用意した原稿を見るのは必要最低限にとどめ、ただひたすら学生たちと向き合っ、一緒に楽しみ考えながら講義を進めるよう努めた。今回の経験によって、講義とは、講師と学生とのコミュニケーションの場であり、教員も共に学んでいく場であることを強く認識した。

講義を行う前、もしかすると学生や先生方の中には、外国人である筆者がクメール美術史を教えることに抵抗を感じる人もいるかもしれない、と不安を感じていたのだが、実際には大変温かく受け入れていただき、本当に感謝している。筆者がこれまで従事してきた研究の成果をカンボジアの若い学生たちに伝えることで、彼らにどのような影響を与えることができたのかは、現時点ではまだわからない。しかし、彼らが今後どのようなことに関心を持って勉強し、成長していくのか、その将来は本当に楽しみであり、いずれは共に調査研究を行い、議論するような仲間になってほしいと願っている。彼ら自身は、カンボジア人として、幼い頃から身に付いたクメール伝統の慣習や価値観、日常生活に密接に関わっている仏教の教えに基づいて思考し、行動していると思われる。日本人である筆者にとって、まだまだ未知の部分も多いが、そういったものを理解するには、何度も交流を重ねて一緒に時間を過ごし、対話を重ねる必要がある。今回のような交流の機会を1つ1つ大切に、筆者自身も、彼らの慣習や価値観をより深く理解していきたいと思った。

筆者は2015年2月をもって、2年4カ月に及ぶカンボジア留学を終え帰国する。そのため、この特別講義はここでいったん区切りをつけることになった。RUFA 考古学部長からは、今後もぜひこのような講義を行ってほしい、また、上智大学の先生方や他の研究者の方々にもぜひお願いしたい、という言葉をかけていただいた。筆者も、可能な限りこうした機会を作り、学生たちとの交流や意見交換を続けたい。そして、研究者として、また教育者として、自分自身がさらに成長できるよう、日々精進したいと考えている。

### 【謝辞】

特別講義の企画、および事前の準備において、以下の方々からご支援・ご助言を賜った。ここに記して感謝申し上げます。カンボジア王立芸術大学学長 Bong Sovath 先生、考古学部長 Mourn Sopheap 先生、副学部長 Seng Sonetra 先生、Pheng Sytha 先生、Ya Da 先生、プノンペン国立博物館副館長兼王立芸術大学講師の Sam Thida 先生、アンコール国立博物館の Thong Bunthoeun さん、Seng Kompheak さん、Tuon Sorpheha さん、アプサラ機構の Phoeung Dara さん、上智大学の石澤良昭先生、丸井雅子先生、三輪悟さん、Lao Kim Leang さん、Nhim Sotheavin さん。

(2015年2月執筆)

**Which deities were enshrined in the temple? : A case study of Preah Khan in Angkor**

**Review**

What have we studied in the last 2 classes?

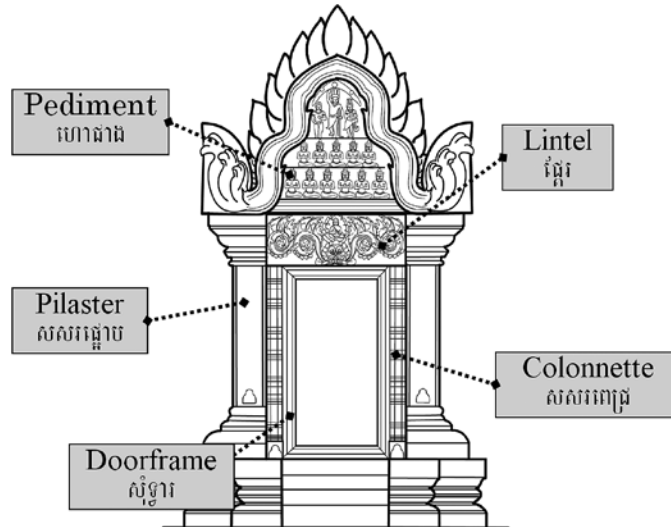
- Main theme is the arrangement of deities in Preah Khan in Angkor.
- What materials can we use to know which deities were dedicated in the temple?
- What possibilities and limitations do each material have?

**Presentations of homework by students**

Please introduce your homework to everyone!

**Today's main topic**

- We will focus on bas-relief around doorway, that is, "Doorway decoration"



- Components of structural members of doorway and their decoration.
- Looking at these structural members, we can find various kinds of bas-reliefs. They can be divided into 2 groups.
  - 1) Plant motifs like leaves (ត្រី), lotus petals (ផ្កាឈូកក្រូច), buds (ផ្កាដុំ), beads motifs (គាត្រី), lozange motifs (ច័ក្កច័ន), etc. →They don't suggest specific images or narrative scenes.
  - 2) Images of deities and narrative scenes, such as Buddha, Vishnu, Shiva, etc... They are related to specific stories or deities or beliefs.  
→By observing these images, we can estimate what kind of deities were enshrined in the

temple.

- Comparing with statues or short inscriptions on doorjamb, what do you think the strong points of doorway decoration as material to know the arrangement of deities?
- We have seen various motifs on each structural member. →Which part is the most important?
- According to my research, we could find the fact that specific images or narrative scenes were mostly carved on pediment or lintel. →Why?
- How about in the older style temples before Bayon style?  
i.g.) Sambor Prei Kuk (7th century) / Preah Ko (9th century) / Banteay Srei(10th century) / Angkor Wat (1st half of 12th century) / Preah Khan(Late 12th century)
- We could find the most important and standing part was shifted with the times, together with the change of materials, like brick or sandstone, and the changes architectural styles.

#### Authenticity

In the temple which we can see, not all structure is original stone or original carving. We need to take care of repaired parts or replaced stone during the restoration works before. We call it as “authenticity”. This word means that the quality or condition of being authentic, trustworthy, or genuine, especially aesthetic value or historical value in preservation, conservation and restoration of historic buildings. Observing each stones and carvings closely, we have to judge whether they are keeping original materials and condition or not.

#### Preview of next class

- We have studied various materials found at Preah Khan, such as statue, inscription on doorjamb, and doorway decoration and discussed about the possibilities and limitations to know the arrangements of deities.
- In the next lecture (last lecture), we will compare these multiple arrangements from these different materials, with the arrangement described in the Preah Khan’s stele inscription (K.908).
- Then we will take a general view of the arrangement of deities in this temple, and think about historical background when Preah Khan was constructed.
- Announcement of today’s homework

**\*Please never forget what you have studied today and bring your homework to the next lecture!**

**\*Text written in Khmer following 2 pages were translated by Ms.Tuon Sorphea, archaeological staff of Angkor National Museum.**



### តើទេវរូបណាខ្លះ ដែលត្រូវបានតម្កល់នៅក្នុងប្រាសាទ?

#### ករណីសិក្សាពីប្រាសាទព្រះខ័ននៅអង្គរ

#### ការរំលឹកឡើងវិញ

តើកាលពីវត្តមុនយើងបានសិក្សាពីអ្វីខ្លះ?

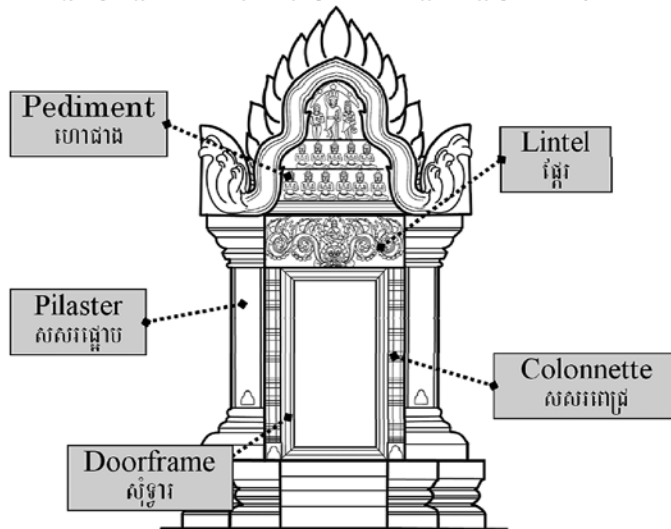
- ខ្លឹមសារគោលគឺការតម្កល់ទេវរូបនៅប្រាសាទព្រះខ័ននៅអង្គរ
- តើមានវត្ថុអ្វីខ្លះដែលអាចឲ្យយើងដឹងថា ទេវរូបមួយណាដែលត្រូវបានឧទ្ទិសនៅក្នុងប្រាសាទ?
- តើអ្វីទៅជាលទ្ធភាព និងដែនកំណត់ដែលវត្ថុទាំងនោះមាន?

#### ការធ្វើបទបង្ហាញរបស់សិស្ស

សូមធ្វើបទបង្ហាញរបស់អ្នកទៅកាន់អ្នកទាំងអស់គ្នា!

#### ប្រធានបទគោលសម្រាប់ថ្ងៃនេះ

- យើងនឹងផ្ដោតទៅលើក្បាច់ក្រឡាតទាបនៅជុំវិញស៊ីមទ្វារ វាគឺជា "ក្បាច់លម្អ ច្រកចេញចូល"



- សមាសភាពនៃចនាសម្ព័ន្ធនៃច្រកចេញចូល និងការគុបតែងលម្អរបស់វា។
- បើក្រឡេកមើលទៅលើចនាសម្ព័ន្ធទាំងនេះ យើងឃើញមានក្បាច់ក្រឡាតទាបជាច្រើនប្រភេទ ក្បាច់ទាំងនោះត្រូវបានបែងចែកជាពីរក្រុម៖
  - ១- ក្បាច់ភ្នំវិល្លី ក្បាច់ត្របកឈូក ក្បាច់ផ្កាឈូកក្រពុំ ក្បាច់ពងត្រី ក្បាច់ចក្ខុច័ន្ទ។ល។ → ក្បាច់ទាំងនេះមិនមែនជារូបចម្លាក់ ឬក៏ជាឈូករឿងនិទាននោះទេ។

មេរៀនទី៣

តុលា ២០១៤

គុប ម៉ាតីកុ, សាកលវិទ្យាល័យសូហ្វីយ៉ា

មជ្ឈមណ្ឌលស្រាវជ្រាវ និងអភិវឌ្ឍន៍ធនធានមនុស្សនៃអាស៊ីសូហ្វីយ៉ា

២-រូបភាពនៃទេវរូប ឬឈុតរឿងនិទាន ដូចជា: ព្រះពុទ្ធ ព្រះវិស្ណុ ព្រះសិវៈ។ល។ វាមានទំនាក់ទំនងជាក់លាក់ ទៅនឹងរឿងព្រេងនិទាន ទេវរូប ឬក៏ជំនឿ។

→ តាមរយៈការសង្កេតនូវរូបភាពទាំងនេះ យើងអាចស្មានបានថាទេវរូបប្រភេទណាខ្លះដែលត្រូវបាន ដាក់តម្កល់នៅក្នុងប្រាសាទ។

- ការប្រៀបធៀបរូបរូបដីមា ឬសិលាចារឹកខ្លីៗលើមេទ្វារ តើអ្នកគិតយ៉ាងដូចម្តេចដែរ ពីចំណុចសំខាន់នៃក្បាច់លម្អ ច្រក ចេញចូល ដែលជាធាតុ ដើម្បីដឹងពីការរៀបចំនៃទេវរូប ?
- យើងបានឃើញក្បាច់ជាច្រើននៅលើរចនាសម្ព័ន្ធច្រកចេញចូល។ → តើផ្នែកមួយណាដែលសំខាន់ជាងគេ ?
- តាមរយៈការស្រាវជ្រាវរបស់ខ្ញុំ បញ្ជាក់យ៉ាងច្បាស់ថា រូបភាព ឬឈុតនៃរឿងនិទាន ភាគច្រើនត្រូវបានធ្លាក់នៅ លើហោជាង ឬផ្តែរ។ → តើហេតុអ្វី ?
- តើចុះប្រាសាទផ្សេងទៀត ដែលកើតឡើងមុនរចនាបថបាយ័នវិញ ?  
ឧទាហរណ៍: សំបូរព្រៃគុក(ស.វទី៧) ព្រះគោ(ស.វទី៩) បន្ទាយស្រី(ស.វទី១០) អង្គរវត្ត(ដើមស.វទី១២)  
ព្រះខ័ន(ចុងស.វទី១២)
- យើងគួររកឲ្យឃើញពីចំណុចសំខាន់ និងការវិវត្តន៍របស់វាដែលបានប្តូរទៅតាមពេលវេលា រួមទាំងការផ្លាស់ប្តូរសម្ភារៈ សំណង់ ដូចជា: ឥដ្ឋ ឬថ្មភក់ និងការផ្លាស់ប្តូររចនាបថស្ថាបត្យកម្ម។

**យថាហេតុ**

នៅក្នុងប្រាសាទ យើងឃើញមានរចនាសម្ព័ន្ធទាំងអស់មិនមែនសុទ្ធតែថ្ម ឬការធ្លាក់ដើមនោះទេ។ យើងត្រូវ តែថែរក្សាផ្នែកណាដែលត្រូវជួសជុល ឬជំនួសដោយថ្មថ្មី ក្នុងការងារជួសជុលពីមុន។ យើងហៅថា “យថាហេតុ”។ ពាក្យនេះមានន័យថា គុណភាព ឬលក្ខខណ្ឌដែលក្លាយជាការពិត គួរឲ្យទុកចិត្ត ឬឥតក្លែងក្លាយ ជាពិសេសតម្លៃ សោភ័ណ ឬតម្លៃប្រវត្តិសាស្ត្រនៅក្នុងការថែរក្សា ការអភិរក្ស និងការជួសជុលនៃសំណង់ប្រវត្តិសាស្ត្រ។ តាមការ សង្កេតទៅលើថ្ម ឬការធ្លាក់ឲ្យមែនទែនទៅ យើងអាចសន្និដ្ឋានបានថាសម្ភារៈទាំងនោះជាប់សំដីម ឬក៏មិនមែន។

**គម្រោងសម្រាប់មេរៀនពេលក្រោយ:**

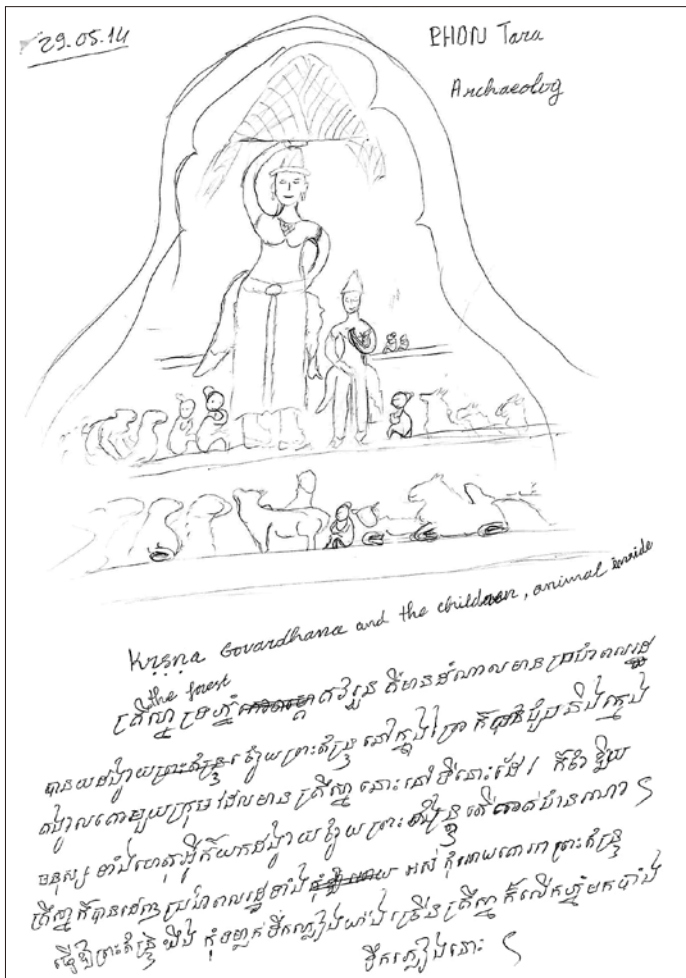
- យើងបានសិក្សានូវវត្ថុសិល្បៈជាច្រើនដែលបានរកឃើញនៅប្រាសាទព្រះខ័ន ដូចជា: រូបរូបដីមា សិលាចារឹកចារលើ មេទ្វារ និង ក្បាច់លម្អ ច្រកចេញចូល និងបានពិភាក្សាពីលទ្ធភាព និងដែនកំណត់ ដើម្បីដឹងពីការរៀបចំទេវរូប។
- មេរៀនបន្ទាប់(ជាមេរៀនចុងក្រោយ) យើងនឹងធ្វើការប្រៀបធៀបនូវការរៀបចំនូវវត្ថុសិល្បៈជាច្រើនដែលខុសៗគ្នា រួមទាំងការពណ៌នានៅក្នុងសិលាចារឹក(K.៩០៨)នៃប្រាសាទព្រះខ័ន។
- បន្ទាប់មកទៀត យើងនឹងដឹងពីទស្សនៈទូទៅនៃការរៀបចំទេវរូបនៅក្នុងប្រាសាទនេះ និងសិក្សាពីព្រឹត្តិការណ៍ ប្រវត្តិសាស្ត្រ ពីសម័យកាលដែលប្រាសាទព្រះខ័នត្រូវបានសាងសង់។
- កិច្ចការសម្រាប់ធ្វើនៅផ្ទះ:

**សូមចងចាំនូវអ្វីដែលយើងបានសិក្សានៅថ្ងៃនេះ និងនាំមកនូវបទបង្ហាញរបស់អ្នកសម្រាប់វគ្គក្រោយ។**



Vessantara Jataka


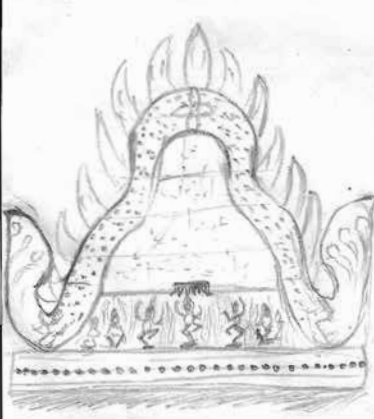
附属資料 5  
 学生によるスケッチ (第 2 回講義)  
 (作成者：Cheng Sokchenda)



附属資料 6  
 学生によるスケッチとディスクリプション (第 2 回講義)  
 (作成者：Phon Tara)

Lecture 3 Homework

Date	Name
30.1.2015	SEANG SOPHEAK

<b>Stick photo</b> *You can use photo which you took, or photo which you copied from book.	<b>Sketch the relief in the photo</b> *You can draw all of it, or you can select just some parts which you like.		
			
<b>Description</b> *Observe the bas-relief closely and write and explain the features in your own words.			
<p>ប្រាសាទនេះ គឺជាប្រាសាទស្ថិតនៅក្នុង រាជធានីភ្នំពេញ ខេត្តក្រចេះ ដែលមាន រចនាសម្ព័ន្ធ ដ៏ល្អ និងមាន តម្លៃ ប្រាសាទនេះ គឺជាប្រាសាទ ដែលមាន រចនាសម្ព័ន្ធ ដ៏ល្អ និងមាន តម្លៃ ប្រាសាទនេះ គឺជាប្រាសាទ ដែលមាន រចនាសម្ព័ន្ធ ដ៏ល្អ និងមាន តម្លៃ</p>			
<b>Remarks</b> *Look at some books and take notes of other information about the relief.			
<p>ប្រាសាទនេះ គឺជាប្រាសាទស្ថិតនៅក្នុង រាជធានីភ្នំពេញ ខេត្តក្រចេះ ដែលមាន រចនាសម្ព័ន្ធ ដ៏ល្អ និងមាន តម្លៃ ប្រាសាទនេះ គឺជាប្រាសាទ ដែលមាន រចនាសម្ព័ន្ធ ដ៏ល្អ និងមាន តម្លៃ ប្រាសាទនេះ គឺជាប្រាសាទ ដែលមាន រចនាសម្ព័ន្ធ ដ៏ល្អ និងមាន តម្លៃ</p>			
Name of book which you used	Author	Year	Page
UDAYA Number 3	ប្រសិទ្ធភាព ប្រាសាទ	2002	37

មានត្រឹមត្រូវ ត្រូវបាន គ្រប់គ្រង

# Conservation and Restoration Project of the Western Causeway of Angkor Wat Phase II (APSARA and Sophia University)

Satoru MIWA  
Sophia University, Tokyo

## **1) Holding the committee on technical exchange and training and implementing on-site survey (fig. 1)**

In cooperation with APSARA Authority, Sophia University Angkor International Mission is preparing to begin restoration work on the unrestored areas of the Western Causeway of Angkor Wat. In March 2015, experts from Cambodia and Japan held mutual study tours to their respective countries, and the persons in charge from each country have held meetings to discuss technical issues and start their studies (fig. 2).

Firstly, from March 11 through 15, 2015, seven Japanese specialists studied various archaeological sites in Siem Reap, exchanging opinions with the APSARA technical team (fig. 3). The study focused in detail on the current state of the Western Causeway itself. In addition, the team also exchanged opinions with personnels in charge when they visited the site of collapsed the wall of Angkor Thom, which are being restored by APSARA Authority, as well as West Mebon, where restoration work is carried out by EFEO in cooperation with APSARA Authority (fig. 4). The Japanese technical team studied various issues including masonry, soil and sand, ground condition, as well as equipment being used for restoration, new materials in use, and consolidation methods.

Secondly, from March 22-27, 2015, seven experts from the Department of Conservation of the Monuments in the Angkor Park and Preventive Archaeology (DCMA) including the Director-General visited Japan. Their invitations were extended by the Ministry of Foreign Affairs of Japan, the Japan Foundation, Sophia University and other organizations. They exchanged views with Japanese experts to further discuss technical issues. Subsequently, in order to inspect major ongoing restoration work of cultural properties in Japan, they visited three temples in Kyoto, where they received explanations from personnels responsible for the protection of these cultural properties. They studied various issues including approaches to the protection of architectural and cultural properties, methods of guiding tourists around such sites, and safety measures for construction sites (fig. 5).

## **2) Equipment provided by Japanese ODA**

At the recommendation of the ICC plenary session on December 6, 2012, Sophia University and APSARA Authority were requested to deal with the unrestored areas of the Western Causeway (Area 2 and Area 3) (fig. 6).

On December 15, 2013, the Japanese government signed an exchange of notes setting an upper limit of ¥94.70 million (=Nearly one million US dollars) on “the Project for the Improvement of the Equipment for the Restoration of the Western Causeway of Angkor Wat” (the documents were signed on behalf of Japan by His Excellency Ambassador Kumamaru). The project aims to “raise the value of Angkor Wat as a tourist resource while securing the safety of visitors”.

The actual equipment donated by the Japanese government to APSARA Authority will be one tower crane, one wheel crane, two small cranes, two generators, two trucks, and various stone processing tools (fig. 7). The equipment is expected to arrive at the field in Angkor Wat in November this year.

## **3) Preparations for the restoration of the Area 2 and Area 3 of the Causeway**

Looking back, it was in 1993 that Sophia University received a request from the Government of the Kingdom of Cambodia to participate in the restoration of the Western Causeway of Angkor Wat.

Sophia University and APSARA Authority agreed on an approach of “*the restoration of Angkor Wat by Cambodians for Cambodians*” and between 1996 and 2007, restoration work on the first phase was carried out with the concurrent aim of training staff (human resources development). The scientific data collected from this restoration project is practical and effective and will perform a useful role when work to restore the second phase (Area 2 and Area 3) is implemented (fig. 8).

The Area 2 is a straight section of approximately 90 meters in length and the Area 3 is an area around the terrace (fig. 9). The restoration work will be completed over around six years. Currently experts are investigating the various technical issues.

## **4) Follow-up on the recommendations**

Our responses to the recommendations of the ICC Technical Committee meeting on June 5, 2014, are as described below:

Note that Sophia University carried out ground-level survey in approximately 1000 points of the stone-pavement along the entire 200-meter length of the Western Causeway before the start of work on the first phase in 1996, after the completion of the first phase in 2007, and in 2012. As a result, no major changes were observed with regard to the second phase where restoration work is to be carried out.

On the recommendation a.: Boring survey was conducted in August 2014 in three stations around the Western Causeway. (fig. 10, 11)

- On the recommendation b.: This is currently under discussion by experts
- On the recommendation c.: This is currently under discussion by experts
- On the recommendation d.: This is currently under discussion by experts
- On the recommendation e.: In order to ensure safety, Sophia University is considering the construction of a temporary detour. (APSARA Authority is to look into one-way tourist flow) (fig. 12)
- On the recommendation f.: Adequate archaeological investigations should be held before and after the dismantling work.

**5) Future six-month plan** (fig. 13)

1. Required equipment is expected to arrive from Japan in around November this year.
2. Supporting base and other preparations for installing the cranes will be done in advance.
3. After the arrival of the equipment, training sessions on equipment usage will be held.
4. Training for stonemasons will begin.
5. Discussions will continue with regard to the technical issues. A report on this matter will be presented at the next ICC meeting.

Thank you for your attention. (fig. 14)



fig. 1

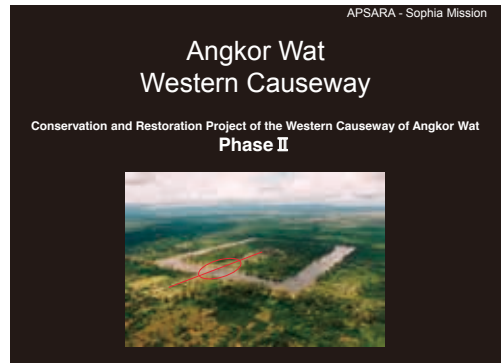


fig. 2



fig. 3



fig. 4



fig. 5



fig. 6



fig. 7



fig. 8





fig. 9



fig. 10

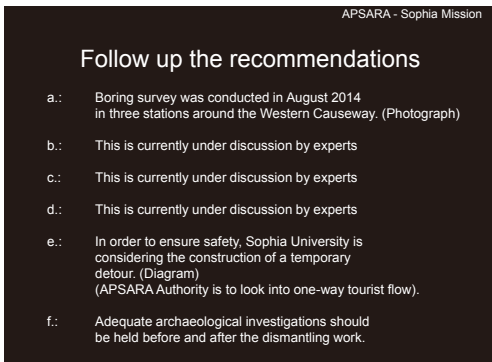


fig. 11

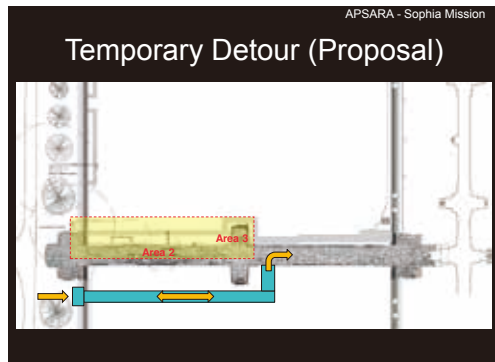


fig. 12



fig. 13

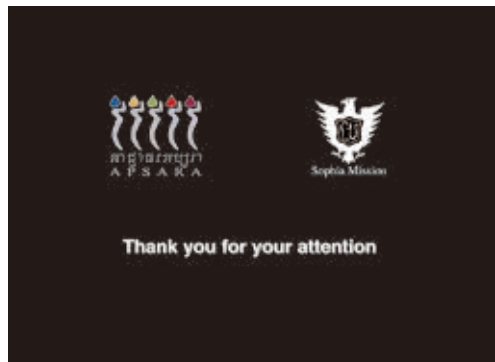


fig. 14



---

# アンコール・ワット西参道技術交流研修委員会 ：日本委員のカンボジア現場視察調査報告

三輪 悟  
上智大学アジア人材養成研究センター研究員

## 1. 出張事業名：

第一回アンコール・ワット西参道技術交流研修委員会（日本委員）

## 2. 出張目的：

カンボジアのシェムリアップにあるアンコール・ワットを始めとするアンコール遺跡群を視察し、アンコール・ワット西参道の修復工事のための調査を行う。

## 3. 出張先：

カンボジア（シェムリアップ）

## 4. 出張者名：以下7名

- ①石澤良昭（上智大学教授）
- ②平山善吉（日本大学名誉教授）
- ③清水五郎（元日本大学教授）
- ④柿崎正義（元鹿島建設、株式会社スマート建築研究所代表取締役）
- ⑤竹田哲夫（元鹿島建設、リテックエンジニアリング技術本部顧問）
- ⑥腰塚達郎（元清水建設）
- ⑦小島陽子（日本大学非常勤講師（当時））

\*現地では、上記以外に三輪悟、ラオ・キム・リアンがほぼ全行程に同行した。

## 5. 出張期日・期間：

平成27年3月11日（水）～平成27年3月15日（日）

## 6. 旅程概要：

3月11日（水）REP 着、打ち合わせ

3月12日（木）西参道、西メボン遺跡、打ち合わせ（上智センター）

3月13日（金）アプサラ総裁面会、トム城壁、技術会議、タ・プロム遺跡

3月14日（土）朝日、ラテライト物性試験（上智センター）、アンコール・ワット、REP 発

## 7. 出張報告書

### (1) 遺跡調査の内容

#### a. アンコール・ワット西参道

【調査項目】 遺跡の構造や破損の現状、観光客の通行状況等

【調査日時】 3月12日（木）08:30～09:30、17:00～18:00

【相手方情報】 上智大学による独自調査

【現状】 アンコール・ワット西参道の修復現場であり、今回の調査のメインとなる場所。

【所見】 朝5時より視察・調査の準備として排水作業を行った。西参道第2工区の土手内側の濠の水がない状態で、西参道の壁面の上から下まで視察することができた。また現場周辺の地形等を確認することができた。イタリア隊の実施する護岸修復工事では、石積みと客土の方法を目前で調査することができた。朝から大勢の観光客が通行する西参道の混雑状況を確認することができた。

#### b. 西メボン

【調査項目】 メボンの止水と排水、タワークレーンの設置方法、客土と構造補強、協働の形態

【調査日時】 3月12日（木）10:00～11:00

【相手方情報】 Ms. Maric Beaufeist（故パスカル後任のEFEO建築家）

【現状】 西メボンでは、アプサラとフランス極東学院が共同で修復工事を進めている。具体的には、アプサラ水管理局が土手構築他止水を担当し、フランス極東学院は修復工事そのものを行う。現在は遺跡の解体が進み、一部再構築の試験を行っている。

【所見】 止水土手と土手を通じて水が染み出る様子とその対策を具体的に調査できた。EFEOがRCを用いないで土手を補強する方法をその検討途中の試験施工の様子について担当者の説明を聞いたことは非常に参考になった。またタワークレーン設置のための準備や、設置後の安全管理方法について担当者の話を聞くことができた。アプサラが土手と止水を担当し遺跡修復そのものは極東学院が負うという明確な役割分担も参考になった。

#### c. アンコール・トム城壁

【調査項目】 アプサラ独自チームの構成、修復技法、新材料

【調査日時】 3月13日（金）10:00～11:00

- 【相手方情報】 リ・ヴァンナ（アプサラ機構 DCMA 局長）  
マオ・ソックニー（アプサラ機構 DCMA 技術スタッフ）
- 【現状】 2011 年 10 月アンコール・トムの城壁が 4 カ所に渡って崩壊した。現在アプサラは独自のチームによって修復工事に取り組んでいる。そのうちのひとつ南大門西の現場でアプサラ担当者の説明を受けた。
- 【所見】 アプサラが独自に行う修復現場としては最大規模の現場である。ラテライト目地を埋める材料や鉄筋のサイズについて質疑応答があった。排水に対する担当者の考えを聞くなど、具体的な手法について知見を得た。

#### d. タ・プロム

- 【調査項目】 インド隊の修復、観光客の誘導（一方通行、仮設橋）
- 【調査日時】 3 月 13 日（金）16:30 ～ 17:30
- 【現状】 2003 年よりインド隊はタ・プロム遺跡の修復に取り組む。アンコール・ワットやバイヨンに次ぐ超人気遺跡として大勢の観光客が連日訪れる中での作業である。
- 【所見】 最近新たに一方通行のルールを適用した様子で、新しい看板も見られた。観光客の誘導については試行錯誤をしているようである。遺跡内各所に仮設の通路を設けて観光客を上手に誘導している。ただし、通路の幅は 2 - 3 m 程度と小さいため、比較的通路の構造も簡素で間に合っている。その点、2 倍以上の幅と極端な通行量が見込まれる西参道とは事情を異にする。

#### e. アンコール・ワット

- 【調査項目】 朝日観光の西参道周辺事情、西参道周辺の護岸破損状況、各チームの修復事例
- 【調査日時】 3 月 14 日（土）05:00 ～ 07:00、11:00 ～ 12:45
- 【現状】 アンコール・ワットでは例外的に複数の外国隊がそれぞれの現場で作業を同時進行させている。また過去に工事を終えている箇所も多い。各チームによる修復事例を豊富に観察できる。
- 【所見】 1960 年代のアンコール保存事務所と EFEO による修復箇所に設けられた排水溝周囲の土が流出し、破損の結果を生んでいる事例を観察できたことは大変に参考になった。西参道脇の土手を歩き壁面の様子も仔細に観察することができた。イタリア隊の十字テラス修復も参考事例となった。

#### f. バイヨン

- 【調査項目】 日本政府 JASA による修復ほか
- 【調査日時】 3 月 14 日（土）14:30 ～ 15:30
- 【現状】 1994 年より日本国政府アンコール遺跡救済チームが調査・修復を行っている。
- 【所見】 アンコール・トムの中心においての観光と修復の状況を理解できた。

(2) 面会・打ち合わせ等

a. 内部打ち合わせ 於：上智センター

- 【項目】 総裁面会前の方針確認  
【日時】 3月12日（木）14:30～17:00  
【所見】 上智組織内部において意見の調整を行った。とくに候補となる新素材について実物が提示されて説明がなされた。

b. アプサラ総裁面会 於：アプサラ事務所

- 【項目】 技術委員会と総裁の挨拶・顔合わせ  
【日時】 3月13日（金）09:00～09:30  
【相手方情報】 ブン・ナリット（アプサラ機構総裁）  
【現状】 技術委員会のメンバーがアプサラ総裁と面会するのは今回が初。  
【所見】 日本の専門家集団がアプサラを訪問し総裁と挨拶することで、日本側の体制を先方へ伝え、日本側の技術陣の体制を理解していただけた。

c. アプサラ総裁との技術談話 於：アプサラ事務所

- 【項目】 アプサラとの技術課題の打ち合わせ  
【日時】 3月13日（金）09:30～10:00  
【相手方情報】 ブン・ナリット（アプサラ機構総裁）  
リ・ヴァンナ（アプサラ機構 DCMA 局長）

d. 上智 - アプサラ技術者交流研修 於：上智センター

- 【項目】 技術者同士の意見交換  
【日時】 3月13日（金）14:30～16:00  
【相手方情報】 リ・ヴァンナ（アプサラ機構 DCMA 局長）  
タン・ソパル（アプサラ機構 DCMA 副局長）  
マオ・ソクニー（アプサラ機構 DCMA 建築専門家）  
キウ・モニー（アプサラ機構 DCMA 建築専門家）  
リー・ブンセエ（アプサラ機構 DCMA 建築専門家）  
ロス・ヴィソット（アプサラ機構 DCMA 考古専門家）  
ほか計7名  
【現状】 実質的に技術論を交わすのはこれが最初であった。  
【所見】 アプサラ機構からアンコール・トム城壁の修復を事例として詳細なプレゼンを行った。これについて日本側と質疑応答を交わした。またリ・ヴァンナ局長からはアンコール憲章についての言及があった。対して平山先生ほかからは午前の現場視察を踏まえた所感が述べられた。

(3) 写真・図版

7-(1)-a アンコール・ワット西参道



排水の様子



作業周知の看板設置



排水後（入口からテラス方向見る）



西参道脇のイタリア隊現場

7-(1)-b 西メボン



西メボン全景（バライ護岸より見る）



担当者による説明



タワークレーン配置状況



客土試験の様子



タワークレーン設置の準備



タワークレーン足元

7-(1)-c アンコール・トム城壁



担当者による説明

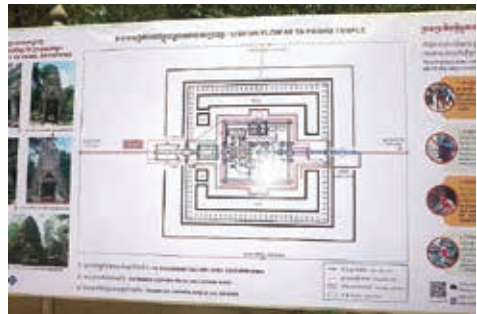


全景

7-(1)-d タ・プロム



修復の進行状況



一方通行のルールへの掲示



仮設の通路とその構造



仮設の通路を歩く観光客



7-(1)-e アンコール・ワット



イタリアによる十字テラスの修復



技術委員会メンバー

7-(2)-a 内部打ち合わせ 於：上智センター



センター1Fでの打ち合わせ



詳細な説明

7-(2)-b+c アプサラ総裁面会 於：アプサラ事務所



総裁との面会



総裁と局長との打ち合わせ

7-(2)-d 上智-アプサラ技術者交流研修 於：上智センター



意見交換



参加メンバー

その他



朝日



聖池前で朝日を見る観光客



朝日観光から帰る観光客 (07:00)



ラテライトの摩擦係数の測定

(4) 旅程

月 日	訪問先名称・訪問内容	宿泊場所
2015年 3月11日 (水)	成田発、ホーチミン着、16:30 ホーチミン発、17:30 カンボジア (シェムリアップ) 着 (VN813)、19:00 夕食、21:00 打ち合わせ	シェムリアップ泊
3月12日 (木)	08:00 ホテル発、08:30 - 09:30 西参道調査、10:00 - 11:00 西メボン調査、12:00 - 13:00 昼食、14:30 - 17:00 打合せ (上智センター)、17:00 - 18:00 西参道、19:00 - 20:30 夕食	シェムリアップ泊
3月13日 (金)	08:30 ホテル発、09:00 - 09:30 アプサラ総裁面会 (アプサラ事務所)、10:00 - 11:00 アンコール・トム修復現場視察 (マオ・ソックニー案内)、12:00 昼食、14:30 - 16:00 上智-アプサラ技術会議 (上智センター)、16:30 タ・プロム遺跡調査、17:30 ホテル帰着、19:00 夕食	シェムリアップ泊
3月14日 (土)	05:00 ホテル発、朝日見学 (アンコール・ワット)、08:30 - 09:00 ラテライト物性試験 (上智センター)、09:15 - 11:00 アンコール・ワット調査、13:00 昼食、14:30 バイヨン遺跡調査、17:30 ホテル発、18:00 夕食、19:45 空港着、カンボジア (シェムリアップ) 発 21:10、22:10 ホーチミン着 (VN814)、ホーチミン発	機内1泊
3月15日 (日)	成田着	(3泊5日)

宿泊先 (シェムリアップ) : ルメリディアン アンコール  
 Vithei Charles de Gaulle, Khum Svay Dang Kum, Siem Reap, Cambodia  
 Phone: +855 63 963 900 Fax: +855 63 963 901

◎アジア・文化創造協働助成「アンコール・ワット修復人材養成プロジェクト」による



---

# アンコール・ワット西参道技術交流研修委員会 ：カンボジア委員の日本現場視察調査報告

三輪 悟  
上智大学アジア人材養成研究センター研究員

## 1. 出張事業名：

第二回アンコール・ワット西参道技術交流研修委員会（カンボジア委員）

## 2. 出張目的：

アプサラ機構総裁と遺跡保存局の局長以下技術者を日本へ招聘し、日本においてカンボジア王国アプサラ機構のアンコール遺跡の保存管理努力につき報告し、その活動を周知・広報する。また京都の世界文化遺産木造建造物群の保全状況を視察し、修復理念、現場設営・管理、公開状況につき学び、今後のアンコール遺跡群の管理と保存修復に資することを企図する。

## 3. 出張先：

日本（東京、京都）

## 4. 出張者名：以下8名（内訳：アプサラ機構6名、上智大学2名）

- ① H.E.Mr. Bun Narith ブン・ナリット（アプサラ機構総裁）
- ② H.E. Mr. Ros Borath ロス・ボラット（アプサラ機構副総裁）
- ③ Mr. Ly Vanna リ・ヴァンナ（アプサラ機構 DCMA 局長）
- ④ Mr. Tann Sopal タン・ソパル（アプサラ機構 DCMA 副局長）
- ⑤ Mr. Mao Sokny マオ・ソックニー（アプサラ機構 DCMA 職員）
- ⑥ Mr. An Sopheap アン・ソピアプ（アプサラ機構 DCMA 職員）
- ⑦ 三輪 悟（上智大学研究員、引率責任者）
- ⑧ ラオ・キム・リアン（上智大学研究員、通訳担当）

## 5. 出張期日・期間：

平成 27 年 3 月 22 日（日）～平成 27 年 3 月 27 日（金）

## 6. 旅程概要：

- 3月22日（日）カンボジア（シェムリアップ）発  
3月23日（月）成田着、上智学院理事長表敬、国際交流基金理事長表敬、外務省表敬、技術交流会、歓迎会  
3月24日（火）東京→京都移動、仁和寺、金閣寺、梨木神社  
3月25日（水）清水寺、知恩院、奥谷組資料館、東寺  
3月26日（木）京都→東京移動、新宿、虎ノ門ヒルズ  
3月27日（金）東京→成田、成田→カンボジア（シェムリアップ）着

## 7. 出張報告書

### (1) 視察・研修の内容

#### ①東京

##### a. 上智大学表敬訪問

【日時】 3月23日（月）11:30～12:00

【相手方情報】 高祖敏明（学校法人上智学院理事長）  
山岡三治（上智大学国際交流担当理事）

【表敬】 石澤良昭が同行し挨拶。高祖敏明上智学院理事長がブン・ナリットアプサラ総裁一行を歓迎する挨拶。アプサラ総裁からはこれまでの上智大学による人材育成他遺跡保護の協力へのお礼が述べられ、今後の西参道修復工事着手に向けてMOU調印を急ぎたい旨、前向きな話があった。

##### b. 国際交流基金表敬訪問

【日時】 3月23日（月）14:00～14:30

【相手方情報】 安藤裕康（国際交流基金理事長）  
下山雅也（国際交流基金アジアセンター部長）

【表敬】 石澤良昭が同行し挨拶。アプサラ総裁からは国際交流基金の支援協力に対するお礼が述べられた。国際交流基金理事長からは今後カンボジアに基金の事務所を開設する旨、話があった。

##### c. 外務省表敬訪問

【日時】 3月23日（月）15:00～15:15

【相手方情報】 岡庭 健（外務副報道官、審議官（報道・広報・文化交流担当））

【表敬】 石澤良昭が同行し挨拶。本年10月頃にODA機材がカンボジアに到着する件に触れ、アプサラ総裁より日本政府の協力に対してお礼が述べられた。審議官からはカンボジア人による遺跡保存修復が行われることに対して、人材が育っている環境に対して賛辞が述べられた。

d. 技術交流研修委員会プログラム

【日時】 3月23日（月）17:00～18:00

【相手方情報】 西参道技術交流研修委員会（平山善吉日本大学名誉教授ほか、日本側）

【交流】 アプサラ機構総裁以下全員より発表を行った。その後平山善吉、三輪悟が発表を行い、その後意見を取り交わした。

e. 歓迎会

【日時】 3月23日（月）18:00～19:30

【出席者情報】 高祖敏明上智学院理事長、今川幸雄元カンボジア大使、高橋文明元カンボジア大使、小川郷太郎元カンボジア大使ほか30余名。

f. 虎ノ門ヒルズ

【視察項目】 再開発の跡地の状況

【視察日時】 3月26日（木）18:30～20:00

【所見】 2014年6月にオープンした虎ノ門ヒルズ（地上274m）は官民連携による開発で、道路事業と再開発事業が一体化したもの。都内の最新の開発事例の一つとして視察した。人々が集まる多様な場として、2Fに地域の核となる広場を設けている。1964年東京オリンピックでは日本橋の上に高架道路を掛けたが、2020年東京オリンピックを前に、ここでは道路を地下に収納した。

②京都

a. 仁和寺

【視察項目】 修復工事・理念、現場管理、観光客の安全

【視察日時】 3月24日（火）13:30～15:30

【視察先名】 仁和寺：真言宗御室派総本山。仁和2年（886）に寺の建立が始められた。

観音堂：寛永18年～正保元年（1641-44）にかけて建立。半解体修理を実施中。

御影堂：<sup>みえどう</sup> 桧皮葺きの屋根の修復

土堀：版築工法で工事中

\*仁和寺は平成6年「古都京都の文化財」として世界文化遺産に登録された。

【相手方情報】 吉田 理（京都府教育庁指導部文化財保護課 主査）により二棟案内

榊谷貴史（株式会社上宗建設 建築課長）により土堀案内

\*千田真由美（奥谷組）同行

【現状】 素屋根の下で修復工事が続く。御影堂は屋根もほぼ葺き終えており完成が近い。

【所見】 日中英韓の看板表記とその背景の話などは興味深かった。御影堂では桧皮葺き構造を目前で見ることができた。土堀の版築工事は日本の現場でもなかなか見ることのできない希少な作業であった。道具や工法の知見は西参道の現場で直接的に

役立つと思われる。

b. 金閣寺

- 【視察項目】 最も人気のある世界遺産建造物の観光のマネジメント、見学手法
- 【視察日時】 3月24日（火）15:50～16:45
- 【視察先名】 臨濟宗相国寺派鹿苑寺 舍利殿（金閣）  
\*金閣寺は平成6年「古都京都の文化財」として世界文化遺産に登録された。
- 【相手方情報】 千田真由美（奥谷組）同行・解説
- 【現状】 人気観光地であり、多くの観光客が訪問している。近年拝観は一方通行のルールが設けられている。舍利殿の内部は拝観不可。
- 【所見】 駐車場の整備状況始め、観光客の誘導（一方通行規制）など、超有名観光地におけるマネジメントの事例を観察することができた。

c. 梨木神社

- 【視察項目】 京都御所との位置関係、景観配慮、マンション建設の背景と工事の進捗
- 【視察日時】 3月24日（火）16:55～17:10
- 【視察先名】 梨木神社
- 【相手方情報】 千田真由美（奥谷組）同行・解説
- 【現状】 梨木神社は施設の管理費に困り、京都御苑の東隣にある境内にマンション建設を進めている。工事に際して神社本庁の承認が得られず、本庁を離脱して工事に着手した。ただし開発業者への土地の貸し出しは60年間の期限付き。
- 【所見】 文化遺産建造物の保護に際し、日本においても資金難に苦しみ苦汁の判断を迫られている事例を視察できた。

d. 清水寺

- 【視察項目】 修復工事・理念、現場管理、観光客の安全、仮設観光通路の建設
- 【視察日時】 3月25日（水）09:30～11:45
- 【視察先名】 音羽山清水寺：本堂は寛永10年（1633）の再建。  
轟門：全解体修理、耐震対策の構造補強（島田豊）  
阿弥陀堂：屋根の修理（小宮睦）  
奥院：半解体修理（小宮睦）  
\*清水寺は平成6年「古都京都の文化財」として世界文化遺産に登録された。
- 【相手方情報】 小宮 睦（京都府教育庁指導部文化財保護課建造物担当副課長）  
島田 豊（京都府教育庁指導部文化財保護課主査（技術職員・建築））  
\*千田真由美（奥谷組）同行
- 【現状】 轟門は全解体を行っており、現在基礎部分の発掘調査の最中。



【所見】 木造建造物の部材修理手法、建物の当初配置への復元についての考え方、地震を念頭においた構造補強の方法と判断、観光客の安全な誘導のための迂回路建設、など多角的に参考になる点が多く、多くを学ぶことができた。

#### e. 知恩院

【視察項目】 修復工事・理念、現場管理、観光客の安全、素屋根

【視察日時】 3月25日（水）14:00～16:00

【視察先名】 知恩院国宝御影堂<sup>みえいどう</sup> 平成大修理現場

【相手方情報】 浅井健一（京都府教育庁指導部文化財保護課）

【現状】 素屋根の下で解体の工程を終えて、再構築を行っている。

\*筆者は2013年10月22日にも同現場にて浅井健一による説明を受けている。

【所見】 大規模構造物に対して全体を覆う素屋根を構築している。その場合においても地中埋設構造物に対する配慮として、杭を打たないなど慎重な配慮を行っている態度に、文化財建造物に対する細心の配慮の事例を学ぶことができた。

#### f. 奥谷組社屋（奥谷組資料館を含む）

【視察項目】 社寺建設の専門工務店、奥谷組資料館

【視察日時】 3月25日（水）16:30～18:00

【視察先名】 株式会社奥谷組 奥谷組一級建築士事務所

【相手方情報】 千田日出雄（株式会社奥谷組代表取締役）より社屋と資料館を案内

\*千田真由美（奥谷組）同行

【現状】 奥谷組社長が自らご説明くださった。

【所見】 日本の伝統的な木造建築の知恵やそこに見られる面白さを、実物大の模型を目の前にして学ぶことができた。とくにスケール1:1の実寸図を描いて作業する様子などは、今後の西参道工事においても必要に応じて取り入れたい手法と思われた。

#### g. 東寺

【視察項目】 世界遺産寺院の夜間ライトアップ観光の事例

【視察日時】 3月25日（水）18:30～19:00

【視察先名】 真言宗総本山教王護国寺（東寺）

\*東寺は平成6年「古都京都の文化財」として世界文化遺産に登録された。

【相手方情報】 一般参観（案内人はとくになし）

【現状】 夜間のライトアップ観光

【所見】 駐車場の管理や人員配置、安全のための対策など参考になった。日本一高い五重塔のライトアップは壮観であった。夜間は見学範囲を限定するなど、アンコールの今後の観光にも参考になると思われる。

## (2) 今後

石造建造物であるアンコール遺跡群の管理責任者が木造建築を主とする京都の寺院群の保存修復事例から何を学ぶのか、これは大きなテーマであるが、事前の想定以上に多くを学ぶことができたと考えている。以下に事例を挙げる。

- ①カンボジアを代表する観光地アンコールと日本一の人気観光地京都の多面的な比較
- ②石と木の素材を越え、文化財建造物への慎重な姿勢と保存修復への取り組みから学ぶ
- ③文化財建造物群を「観光」という側面の中で活かしながら護る方法の事例として
- ④文化遺産を護る際の「予算面」における諸事例を学ぶ
- ⑤「オーセンティシティー」の認識と木造建築での実際の取り組み事例について

カンボジアにおけるアンコール（シェムリアップ市）、日本における京都市は共に古都であり、各国を代表する観光地となっている。双方とも世界遺産指定を受けた多くの文化遺産建造物群を抱える。その価値は今更説明が要らないほどである。

具体的には、カンボジアは年間450万人（2014年実績）の外国人が訪れ、内約半数の250万人がアンコール遺跡群を訪問している。一方日本は年間1,340万人（2014年実績）の外国人が訪れ、うち183万人の外国人が京都に宿泊している。京都を訪問する観光客（日本人含めた総数）は年間5,560万人（2014年実績）にのぼり、圧倒的な人気を誇る日本有数の観光地となっている。

今後もカンボジアの遺跡保護に携わる関係者が京都を視察することで学ぶことは多い。継続的に

研修・視察を実施することで、その理解を深めて行きたいと考えている。そのことでアンコール遺跡群の保護政策の質の向上に大いに寄与することができるといえる。



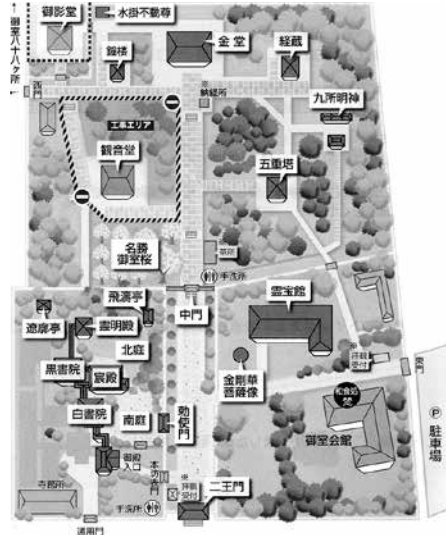
## (3) 写真・図版

京都視察先地図

7-(1)-②-a 仁和寺



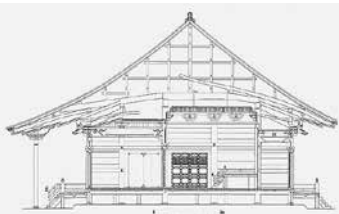
寄付金募集の案内



仁和寺配置



京都府教育委員会発行の資料



修理前の観音堂全景と断面図



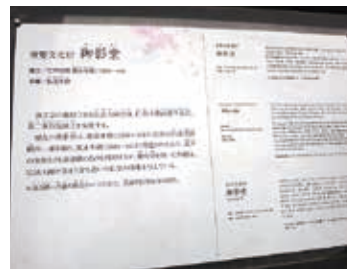
観音堂覆い屋



観音堂



御影堂 (みえどう)



御影堂 日中英韓の各国語説明



築地塀 榎谷貴史による版築説明



築地塀 版築作業



築地塀 版築道具



築地塀 版築道具

7-(1)-②-b 金閣寺



金閣寺 配置図



金閣寺 リーフレット



金閣寺 (舎利殿)

7-(1)-②-c 梨木神社



神社敷地内マンション建設工事現場



視察風景

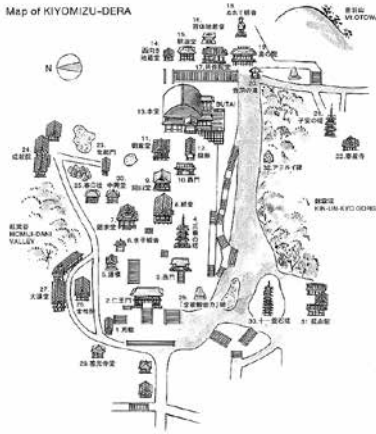


マンション (左) と神社 (右) の位置関係

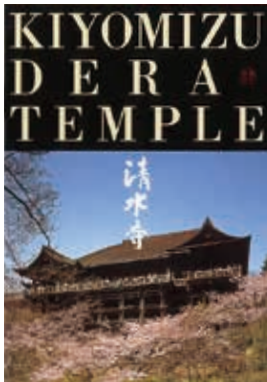


マンションの広告

7-(1)-②-d 清水寺



清水寺配置図



英文リーフレット



轟門を解説する島田豊



本殿左手の轟門覆い屋



轟門 全解体修理現場



轟門 柱の根継ぎ



阿弥陀堂 修理前の外観



阿弥陀堂 構造補強についての説明



阿弥陀堂 屋根全景



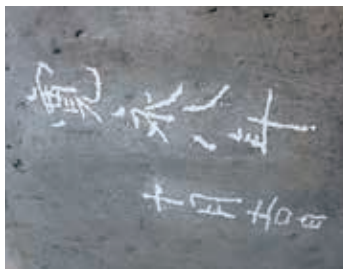
阿弥陀堂 解説する小宮睦



阿弥陀堂 桧皮葺き



阿弥陀堂 鬼瓦

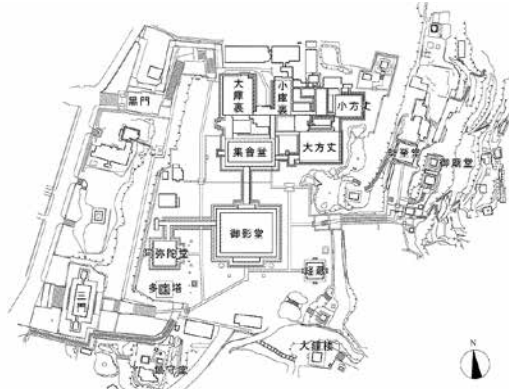


阿弥陀堂 鬼瓦の年号は寛永8年

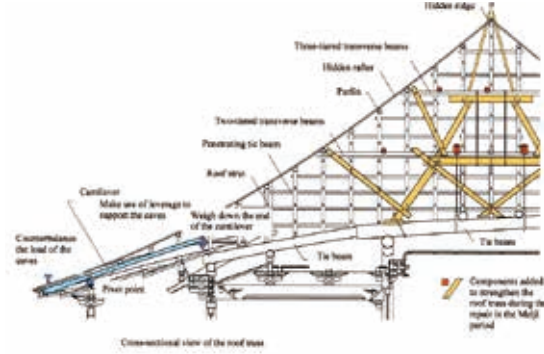


奥院

7-(1)-②-e 知恩院



境内配置図  
知恩院 配置図



御影堂 (みえいどう)  
配布資料 (屋根構造: はね木の説明図)



御影堂 修理前の外観



御影堂 覆い屋



御影堂 屋根



御影堂 解説する浅井健一



御影堂

7-(1)-②-f 奥谷組



千田日出雄社長



工場



工場 原寸図



資料館



資料館 日本建築の屋根構造解説



資料館 儀式道具

7-(1)-②-g 東寺



世界遺産建築のライトアップ



日本一の高さの五重塔

参考資料

京都府教育委員会『京都 保存修理の現場から』（2014、京都府教育委員会）

知恩院御影堂リーフレット（2014、京都府教育委員会）

金閣寺リーフレット

英文小冊子「KOYOMIZU DERA TAMPLE」（清水寺）

『新建築 Hello Mirai Tokyo』90巻3号、2015年2月別冊（2015、新建築社）

カンボジア観光統計報告（2015年8月、観光省）

[http://www.tourismcambodia.org/images/mot/statistic\\_reports/tourism\\_statistics\\_august\\_2015.pdf](http://www.tourismcambodia.org/images/mot/statistic_reports/tourism_statistics_august_2015.pdf)

京都観光総合調査（平成26年、京都市）

[https://kanko.city.kyoto.lg.jp/chosa/image/kanko\\_chosa26.pdf](https://kanko.city.kyoto.lg.jp/chosa/image/kanko_chosa26.pdf)

訪日外国人消費動向調査2014年年間値（2015年3月、国土交通省観光庁）

<http://www.mlit.go.jp/common/001107177.pdf>

## (4) 旅程

月 日	訪問先名称・訪問内容	宿泊場所
2015年		
3月22日(日)	21:35 カンボジア(シェムリアップ)発、22:35 ホーチミン着(VN3822)	機内泊
3月23日(月)	00:30 ホーチミン発、07:45 成田着(VN300)、08:50 成田空港発→09:53 東京駅着(成田エクスプレス) 10:20 上智大学着、11:30 上智学院理事長面会、14:00 国際交流基金表敬訪問、15:00 外務省表敬訪問、17:00 技術研修交流会、18:00 歓迎会 20:00 ホテル着	東京泊
3月24日(火)	07:30 ホテル発、08:30 東京駅発→10:50 京都駅着(新幹線のぞみ17号)、13:30 仁和寺、15:50 金閣寺、16:55 梨木神社、17:30 ホテル着	京都泊
3月25日(水)	09:00 ホテル発、09:30 清水寺、14:00 知恩院、16:30 奥谷組、18:30 東寺、19:00 ホテル帰着	京都泊
3月26日(木)	08:30 ホテル発、10:05 京都駅発→12:23 東京駅着(新幹線のぞみ122号)、新宿・虎ノ門視察、20:00 ホテル着	東京泊
3月27日(金)	05:20 ホテル発、06:18 東京駅発→07:15 成田空港着(成田エクスプレス)、09:30 成田発、14:30 ホーチミン着(VN301)、16:30 ホーチミン発、17:30 カンボジア(シェムリアップ)着(VN813)	(4泊6日)

宿泊先(東京): 東急ステイ四谷  
〒160-0004 東京都新宿区四谷2-1  
Tel 03-3354-0109 Fax 03-3354-0191

宿泊先(京都): アパホテル【京都駅前】  
〒600-8234 京都市下京区西洞院通塩小路下ル南不動堂町806  
Tel 075-365-4111 Fax 075-365-8720

◎アジア・文化創造協働助成「アンコール・ワット修復人材養成プロジェクト」による



# カンボジアにおけるソフィア・ミッション

—保存官養成のためのアンコール遺跡現場実習プログラム—  
(1991～2015)



# カンボジアにおけるソフィア・ミッション

(旧称：カンボジアにおける人材養成)

—保存官養成のためのアンコール遺跡現場実習プログラム—

(Human Development Project in Cambodia)

(1991～2015)

第1回	学生25名	集中講義：3月12日～3月17日（シェムリアップ、バンテアイ・クテイ）
1991年3月12日 ～3月25日	建築学部 15 考古学部 10	科目：〔歴史学〕—アンコールの歴史 石澤良昭 〔文化財保存科学〕—保存科学入門および保存科学 ジョン・サンデー (W.M.F.) 調査およびインベントリー概論 河野 靖 〔建築学〕—遺跡の測量 藤木良明 〔考古学〕—遺跡の考古学的発掘 上野邦一 〔地質学〕—遺跡の地質学的調査 盛合禧夫
	学生30名	現場実習：3月18日～3月25日（シェムリアップ、バンテアイ・クテイ）
	A班 8 B班 9 C班 7 D班 6	科目：〔建築学〕—A. 建築構造班（アンコール・ワットなど） ジョン・サンデー B. 建築総合班（バンテアイ・クテイ） 藤木良明 〔考古学〕—C. 考古班（バンテアイ・クテイ） 上野邦一 R. エンゲルハルト (UNESCO) 〔地質学〕—D. 地質班（バイヨン、プリヤカーン） 盛合禧夫
第2回	学生160名	集中講義：8月13日～8月14日、8月28日（プノンペン王立芸術大学）
1991年8月13日 ～8月28日	建築学部 60 絵画学部 50 考古学部 50	科目：〔歴史学〕—アンコールの歴史 石澤良昭 〔建築学〕—文化財保存の理念と実務 遺跡保存学— 伊藤延男 クメール帝国近隣の建築文化とチャンパ王国の建築 重枝 豊 〔考古学〕—考古学調査の基礎 中尾芳治 〔環境工学〕—アンコール地域の社会文化発展と環境保全 ラオ・キム・リアン 〔土木工学〕—史跡公園としてのアンコール遺跡群・構造力学序論 馬場俊介 〔水利水文学〕—開発途上国の環境問題と開発プロジェクトのあり方 宮川朝一 〔遺跡エンジニアリング〕—遺跡エンジニアリングの概念と方法について 遠藤宣雄 〔文化史学〕—文化関係論 坪井善明 〔植物学〕—植物分類学とアンコールの森林 長谷部光泰
	学生10名	現場実習：8月19日～8月26日（シェムリアップ、バンテアイ・クテイ）
	建築学部 5 考古学部 5 他2名自主参加	科目：〔建築〕 石澤良昭、馬場俊介、中尾芳治、重枝 豊、遠藤宣雄、 〔考古〕 ラオ・キム・リアン、長谷部光泰、谷本ボラ、松井生子
第3回	学生332名	集中講義：3月10日～3月14日（プノンペン王立芸術大学）
1992年3月10日 ～3月21日	建築学部 (2年生) 108 考古学部 (2年生) 38 考古・建築学部 (1年生) 186	科目：〔歴史学〕—カンボジア古代史 石澤良昭 カンボジア前近代史 アラン・フォレスト (EPHE) カンボジア碑文学 クロード・ジャック (EPHE) カンボジア碑文学概論 クロード・ジャック 〔建築学〕—保存修復学 重枝 豊 建築学基礎 重枝 豊 〔考古学〕—博物館学 中尾芳治 博物館学概論 中尾芳治 考古学 上野邦一 考古学(専門) 上野邦一 〔地質学〕—地質学 盛合禧夫 地質学特講 盛合禧夫 〔環境工学〕—環境工学 ラオ・キム・リアン

1992年3月10日 ～3月21日		〔遺跡エンジニアリング〕—遺跡エンジニアリング 〔社会文化学〕—文化環境論 文化財保護法 文化政策概論 〔植物学〕—植物学	遠藤宣雄 坪井善明 酒井 幸 R. エンゲルハルト 横山 潤
	学生20名	現場実習：3月16日～3月21日（シェムリアップ、バンテアイ・クダイ）	
	建築学部 10 考古学部 10	科目：〔建築〕重枝 豊 〔考古〕中尾芳治、上野邦一 〔地質〕盛合禱夫	
第4回	学生332名	集中講義：8月10日～8月14日（プノンベン王立芸術大学）	
1992年8月10日 ～8月26日	建築学部 181 考古学部 151	科目：〔歴史学〕—カンボジア史 I アンコール碑刻文学 〔文化財保存科学〕—文化財保存の理論と実践 文化財保存学 I 文化財と技術 I、II ユネスコの勧告 〔建築学〕—建築学 製図学入門 製図実習 〔考古学〕—考古学 I、II 〔地質学〕—地質学 I、II 〔文化史学〕—インドシナ文化論 I、II 〔遺跡エンジニアリング〕—遺跡エンジニアリング I、II 〔環境学〕—カンボジアの自然と環境 開発と環境アセスメント	石澤良昭 石澤良昭 伊藤延男 伊藤延男 木村 勉 R. エンゲルハルト 重枝 豊 成田 剛 重枝 豊、成田 剛 杉山 洋 塚脇真二 坪井善明 遠藤宣雄 ラオ・キム・リアン ラオ・キム・リアン
	学生20名	現場実習：8月15日～8月26日（シェムリアップ、バンテアイ・クダイ）	
	建築学部 10 考古学部 10	科目：〔建築〕重枝 豊 〔考古〕杉山 洋	
	第5回	学生150名	集中講義：3月1日～3月5日（プノンベン王立芸術大学）
1993年3月1日 ～3月5日	建築学部 80 考古学部 70	科目：〔歴史学〕石澤良昭 〔考古学〕中尾芳治、杉山 洋 〔建築学〕重枝 豊	
第6回	学生20名	第1回ワーク・ショップ（プノンベン王立芸術大学）	
1993年10月18日 ～10月28日	考古学部 20	〔遺跡エンジニアリングにもとづくアンコール地域の社会文化発展に関する計画づくり〕 ・特別講義および指導 遠藤宣雄	
第7回	学生20名	第2回ワーク・ショップ（プノンベン王立芸術大学）	
1994年2月14日 ～2月18日	考古学部 20	〔遺跡エンジニアリングにもとづくアンコール地域の社会文化発展に関する計画づくり〕 ・特別講義および指導 遠藤宣雄	
第8回	学生76名	集中講義：3月7日～3月12日（プノンベン王立芸術大学）	
1994年3月7日 ～3月22日	考古学部 76	科目：〔歴史学〕—歴史学特講 アンコール史 〔考古学〕—考古学概論 博物館学特講 考古学特講 考古学実習（講義） 〔地質学〕—一般地質学 〔文化史学〕—インドシナ文化論	石澤良昭 石澤良昭 中尾芳治 中尾芳治 上野邦一 上野邦一 塚脇真二 坪井善明
	学生10名	現場実習：3月13日～3月22日（シェムリアップ、バンテアイ・クダイ）	
	考古学部 10	科目：〔考古〕上野邦一、杉山 洋、中尾芳治、藤田幸夫	

第9回	学生7名	現場実習：7月31日～8月22日（シムリアップ、バンテアイ・クデイ）
1994年7月31日 ～8月22日	考古学部 7	科目：〔歴史〕石澤良昭 〔考古〕藤田幸夫、丸井雅子、杉山 洋
第10回	学生12名	現場実習：12月19日～12月29日（シムリアップ、バンテアイ・クデイ）
1994年12月19日 ～12月29日	考古学部 6 建築学部 6	科目：〔歴史〕石澤良昭 〔建築〕片桐正夫、古山康行 〔考古〕上野邦一、丸井雅子
第11回	学生190名	集中講義：2月10日～3月9日（プノンペン王立芸術大学）
1995年2月10日 ～3月31日	考古学部 70 建築学部 120	科目：〔建築〕重枝 豊 〔建築概括〕重枝 豊
	学生22名	現場実習：3月10日～3月31日（シムリアップ、バンテアイ・クデイ）
	考古学部 10 建築学部 12	科目：〔歴史〕石澤良昭 〔建築〕片桐正夫、重枝 豊、古山康行 〔考古〕中尾芳治、松尾信裕、丸井雅子
第12回	学生10名	現場実習（シムリアップ、バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット）
1995年8月1日 ～8月17日	建築学部 5 考古学部 5	科目：〔歴史〕石澤良昭 〔建築〕片桐正夫、重枝 豊、古山康行、神宮 太 〔考古〕上野邦一、松尾信裕、丸井雅子、花谷 浩
第13回	学生10名	現場実習（シムリアップ、バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット）
1996年3月20日 ～3月23日	建築学部 5 考古学部 5	科目：〔歴史〕石澤良昭 〔建築〕片桐正夫、重枝 豊、古山康行、崔 炳夏 〔考古〕中尾芳治、宮本康治、丸井雅子、花谷 浩
第14回	学生62名	集中講義（プノンペン王立芸術大学）
1996年3月2日 ～5月23日	考古学部 L1 36 L4 26	科目：〔遺跡エンジニアリング〕遠藤宣雄、丸井雅子
第15回	学生10名	現場実習（シムリアップ、バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット）
1996年7月15日 ～8月31日	建築学部 5 考古学部 5	科目：〔歴史〕石澤良昭 〔建築〕片桐正夫、重枝 豊、古山康行、崔 炳夏 〔考古〕上野邦一、宮本康治、古屋谷知浩、隅田登紀子
第16回	学生10名	現場実習（シムリアップ、バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット）
1996年11月17日 ～12月29日	建築学部 5 考古学部 5	科目：〔歴史〕石澤良昭 〔建築〕片桐正夫、重枝 豊、古山康行、崔 炳夏 〔考古〕上野邦一、丸井雅子
第17回	学生11名	現場実習（シムリアップ、バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット）
1997年2月28日 ～3月30日	建築学部 5 考古学部 6	科目：〔歴史〕石澤良昭 〔建築〕片桐正夫、重枝 豊、崔 炳夏 〔考古〕中尾芳治、宮本康治、花谷 浩
第18回	学生133名	集中講義・テスト（プノンペン王立芸術大学）
1997年2月25日 ～5月23日	建築学部 97 考古学部 36	科目：〔文化遺構管理〕遠藤宣雄、丸井雅子
第19回	学生9名	現場実習（シムリアップ、バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット）
1997年11月15日 ～12月30日	建築学部 5 考古学部 4	科目：〔歴史〕石澤良昭 〔建築〕片桐正夫、崔 炳夏 〔インベントリー〕上野邦一、丸井雅子
第20回	学生9名	現場実習（シムリアップ、バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット）
1998年2月20日 ～4月10日	建築学部 5 考古学部 4	科目：〔歴史〕石澤良昭 〔建築〕片桐正夫、崔 炳夏 〔考古〕中尾芳治、菱田哲郎、宮本康治

第21回	研修生 9 名	現場実習 (シムリアップ、バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット、タニ)
1998年 8 月20日 ～ 9 月16日	建築学部 5 考古学部 4	科目：〔建築〕片桐正夫、崔 炳夏 〔考古〕上野邦一、丸井雅子 〔窯跡調査〕青柳洋治、佐々木達夫、野上建紀、田中和彦、丸井雅子、 隅田登紀子
第22回	研修生 7 名	現場実習 (シムリアップ、バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット、タニ)
1998年10月20日 ～12月30日	建築学部 3 考古学部 4	科目：〔歴史〕石澤良昭 〔建築〕片桐正夫、崔 炳夏、三輪 悟 〔考古〕上野邦一、丸井雅子、荒樋久雄
第23回	研修生 7 名	現場実習 (シムリアップ、バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット、タニ)
1999年 1 月10日 ～ 3 月31日	建築学部 3 考古学部 4	科目：〔建築〕片桐正夫、崔 炳夏、三輪 悟 〔考古〕中尾芳治、丸井雅子、荒樋久雄、宮本康治 〔窯跡調査〕青柳洋治、佐々木達夫、野上建紀、田中和彦、隅田登紀子 文化遺産教育分野：丸井雅子、荒樋久雄、ニム・ソテイーヴン、ケオ・キナル、 ソム・ヴィソット 発掘現場説明会 (ロハール村住民122名参加。バンテアイ・クデイ遺跡)
第24回	研修生 6 名	現場実習 (シムリアップ、バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット、タニ)
1999年 6 月20日 ～ 9 月10日	建築学部 3 考古学部 3	科目：〔歴史〕石澤良昭 〔建築〕片桐正夫、崔 炳夏、三輪 悟 〔考古〕上野邦一、丸井雅子、荒樋久雄 〔窯跡調査〕青柳洋治、佐々木達夫、野上建紀、田中和彦、丸井雅子、 隅田登紀子
第25回	研修生 9 名	現場実習 (シムリアップ、バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット)
1999年12月15日 ～12月31日	建築学部 4 考古学部 5	科目：〔歴史〕石澤良昭 〔建築〕片桐正夫、三輪 悟 〔考古〕宮本康治、菱田哲郎、丸井雅子、荒樋久雄
第26回	研修生 8 名	現場実習 (シムリアップ、バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット)
2000年 3 月10日 ～ 3 月25日	建築学部 4 考古学部 4	科目：〔歴史〕石澤良昭 〔建築〕片桐正夫、三輪 悟 〔考古〕上野邦一、宮本康治、丸井雅子、荒樋久雄
第27回	研修生 9 名	現場実習 (シムリアップ、バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット、タニ)
2000年 8 月10日 ～ 8 月25日	建築学部 4 考古学部 5	科目：〔歴史〕石澤良昭 〔建築〕片桐正夫、三輪 悟 〔窯跡調査〕青柳洋治、佐々木達夫、野上建紀、田中和彦、丸井雅子、 田畑幸嗣 〔考古〕宮本康治、菱田哲郎、丸井雅子、荒樋久雄 (廃仏1体の発掘)
第28回	研修生 9 名	現場実習 (シムリアップ、バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット)
2000年12月10日 ～12月25日	建築学部 4 考古学部 5	科目：〔歴史〕石澤良昭 〔建築〕片桐正夫、三輪 悟、高橋正時 〔考古〕上野邦一、宮本康治、丸井雅子、荒樋久雄
第29回	研修生15名	現場実習 (シムリアップ、バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット)
2001年 3 月 5 日 ～ 3 月25日	建築学部 10 考古学部 5	科目：〔建築〕片桐正夫、三輪 悟、高橋正時 〔考古〕上野邦一、宮本康治、丸井雅子、荒樋久雄 (廃仏106体の発掘)
第30回	研修生12名	現場実習 (シムリアップ、バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット、タニ)
2001年 8 月 1 日 ～ 9 月 7 日	建築学部 5 考古学部 7	科目：〔建築〕片桐正夫、三輪 悟、小島陽子 〔窯跡調査〕青柳洋治、佐々木達夫、野上建紀、田中和彦、丸井雅子、 田畑幸嗣 〔考古〕上野邦一、菱田哲郎、宮本康治、丸井雅子、荒樋久雄 (廃仏167体 の発掘)

第31回	研修生 7名	現場実習 (シェムリアップ、バンテアイ・クデイ)
2001年12月1日 ～12月15日	考古学部 7	科目：〔考古〕 菱田哲郎、丸井雅子 (廃仏周辺補充調査 (1))
第32回	研修生13名	現場実習 (シェムリアップ、バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット、タニ)
2002年 8月1日 ～9月7日	建築学部 6 考古学部 7	科目：〔建築〕 片桐正夫、三輪 悟、小島陽子 〔窯跡調査〕 青柳洋治、佐々木達夫、野上建紀、田中和彦、丸井雅子、 田畑幸嗣、隅田登紀子 〔考古〕 上野邦一、菱田哲郎、宮本康治、丸井雅子、荒樋久雄 (廃仏周辺補 充調査 (2))
第33回	研修生 3名	現場実習 (シェムリアップ、バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット)
2002年11月10日 ～2003年1月10日	考古学部 3	科目：〔建築〕 片桐正夫、三輪 悟、小島陽子 〔考古〕 菱田哲郎、宮本康治、丸井雅子、田畑幸嗣 (廃仏周辺補充調査 (3))
第34回	研修生14名	現場実習 (シェムリアップ、バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット)
2003年 8月10日 ～8月30日	建築学部 6 考古学部 8	科目：〔建築〕 片桐正夫、三輪 悟 〔考古〕 上野邦一、菱田哲郎、宮本康治、丸井雅子、田畑幸嗣、荒樋久雄 (廃仏周辺補充調査 (4))
第35回	研修生 3名	現場実習 (シェムリアップ、バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット)
2003年12月18日 ～12月29日	考古学部 3	科目：〔考古〕 上野邦一、丸井雅子 (考古学生 2名、スタッフ 1名)
第36回	研修生 9名	現場実習 (シェムリアップ、バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット)
2004年 8月16日 ～8月31日	建築学部 5 考古学部 4	科目：〔建築〕 片桐正夫、三輪 悟 〔考古〕 上野邦一、菱田哲郎、宮本康治、田畑幸嗣、丸井雅子 (考古学生 3 名、スタッフ 1名) 特別講義：How to consider the lost buildings from archaeological evidences (上野 邦一、8月28日、於プノンペン王立芸術大学)
第37回	研修生15名	現場実習 (シェムリアップ、バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット)
2005年 8月13日 ～9月13日	建築学部 5 考古学部 10	科目：〔建築〕 片桐正夫、三輪 悟 〔考古〕 上野邦一、菱田哲郎、宮本康治、田畑幸嗣、丸井雅子 (考古学生 3 名、スタッフ 1名)
第38回	研修生15名	現場実習 (バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット)
2006年 8月16日 ～9月4日	建築学部 5 考古学部 10	科目：〔カンボジア研究〕 石澤良昭、リー・ヴァンナ、ケオ・キナル 〔文化遺産研究〕 石澤良昭、丸井雅子、エク・プンタ 〔建築学〕 三輪 悟、マオ・ソックニー 〔考古学〕 上野邦一、菱田哲郎、宮本康治、丸井雅子、田畑幸嗣、チュエン・ プティ 〔植物学〕 横山 潤
第39回	研修生15名	現場実習 (バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット)
2007年 2月21日 ～3月7日	建築学部 5 考古学部 10	科目：〔文化遺産研究〕 石澤良昭、青木繁夫、田代亜紀子、塚脇真二 〔建築学〕 三輪 悟、マオ・ソックニー 〔考古学〕 丸井雅子、田畑幸嗣、チュエン・プティ 〔植物学〕 横山 潤
第40回	研修生21名	現場実習 (バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット)
2007年 8月13日 ～9月9日	建築学部 5 考古学部 10 上智大学大学院 6	科目：〔カンボジア研究〕 石澤良昭、ティン・ティナ、ケオ・キナル 〔文化遺産研究〕 石澤良昭、青木繁夫、田代亜紀子、ティン・ティナ、タラ ン・サクーン、後藤 昇 〔建築学〕 三輪 悟、マオ・ソックニー 〔考古学〕 上野邦一、菱田哲郎、宮本康治、丸井雅子、田畑幸嗣、ティン・ ティナ、チュエン・プティ 〔植物学〕 横山 潤

第41回	研修生15名	現場実習（バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット）
2008年8月10日 ～9月15日	建築学部 5 考古学部 10 上智大学大学院5	科目：〔カンボジア研究〕石澤良昭、丸井雅子、後藤 昇 〔文化遺産研究〕丸井雅子、遠藤宣雄、清水真一、田代亜紀子 〔建築学〕三輪 悟、マオ・ソックニー 〔考古学〕上野邦一、菱田哲郎、宮本康治、丸井雅子、田畑幸嗣、ティン・ティナ、チュエン・プティ、ピン・パクダイ 〔植物学〕横山 潤 文化遺産教育分野：丸井雅子、久保真紀子 第1回「アンコール地域住民の文化遺産教育」 （ロハール村住民140名参加。バンテアイ・クデイ遺跡、アンコール・ワット西参道、シハヌーク・イオン博物館を見学、2月26日）。 第2回「アンコール地域住民の文化遺産教育」 （チリウ村住民60名参加。バンテアイ・クデイ遺跡、アンコール・ワット西参道、シハヌーク・イオン博物館を見学、8月30日）
第42回	研修生8名	博物館実習（プレア・ノロドム・シハヌーク＝アンコール博物館）
2009年3月14日 ～3月24日	プレア・ノロドム・シハヌーク＝アンコール博物館 考古学芸員8	科目：〔拓本実習〕中尾芳治
第43回	研修生23名	現場実習（バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット）
2009年8月9日 ～9月5日	建築学部 5 考古学部 15 上智大学大学院3	科目：〔カンボジア研究〕石澤良昭、丸井雅子、後藤 昇、ケオ・キナル 〔文化遺産研究〕丸井雅子、青木繁夫、田代亜紀子 〔建築学〕三輪 悟、マオ・ソックニー 〔考古学〕上野邦一、菱田哲郎、宮本康治、丸井雅子、田畑幸嗣、ティン・ティナ、ソム・ヴィソット、チュエン・プティ 〔植物学〕横山 潤 文化遺産教育分野： 第3回「アンコール地域住民の文化遺産教育」 （サマキ・サハコム小学校、生徒100名参加、バンテアイ・クデイ遺跡とシハヌーク・イオン博物館見学、8月29日に実施）
第44回	研修生6名	現場実習（バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット）
2010年8月12日 ～9月11日	建築学部 2 考古学部 4	科目：〔建築学〕三輪 悟、マオ・ソックニー 〔考古学〕田畑幸嗣、エク・ブンタ、セン・チャンタ、ソム・ヴィソット、チュエン・プティ 〔文化遺産教育〕阿部千依 文化遺産教育分野：阿部千依 「アジア文化遺産啓蒙教育プログラム」（初年度） （クラバン小学校、生徒412名参加、教員34名参加、バンテアイ・クデイ遺跡とシハヌーク・イオン博物館見学、8月14日、21日、28日、9月4日に実施） （国内） 第1回「積み木でつくるアンコール・ワット」3万個のエコ積み木でアンコール・ワットを作り、文化遺産について学ぶ国際文化理解の出張講座（福岡県上智福岡中学高等学校・文化祭にて9月12日に実施）
第45回	研修生6名	現場実習（バンテアイ・クデイ）
2010年12月22日 ～12月31日	建築学部 2 考古学部 4	科目：〔建築学〕三輪 悟、マオ・ソックニー、チン・チョン・モニー 〔考古学〕田畑幸嗣、エク・ブンタ、ベン・シタ、セン・チャンタ、ソム・ヴィソット、チュエン・プティ
第46回	研修生11名	現場実習（バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット）
2011年8月8日 ～9月10日	建築学部 5 考古学部 6	科目：〔建築学〕三輪 悟、マオ・ソックニー、サン・ベウ、チン・チョン・モニー



2011年8月8日 ～9月10日		<p>〔考古学〕 田畑幸嗣、エク・ブンタ、リー・ヴァンナ、ベン・シタ、チュエン・ブティエ</p> <p>〔文化遺産教育〕 阿部千依</p> <p>〔リモート・センシング〕 亀井宏行</p> <p>文化遺産教育分野：阿部千依</p> <p>「アジア文化遺産啓蒙教育プログラム」(第2年度)</p> <p>(バンテアイ・スレイ郡、ワット・ルン地区の小学校11校、生徒596名、教員31名、日本人学生・教職員50名参加、バンテアイ・クデイ遺跡とシハヌーク・イオン博物館見学、8月13日、20日、27日、9月3日、10日に実施)</p> <p>「アンコール地域の小学生に対する環境教育出張授業」</p> <p>(9月13日に実施、JQAとの共催)</p> <p>(国内)</p> <p>第2回「積み木でつくるアンコール・ワット」ワークショップ</p> <p>(神奈川県逗子市沼間中学校「地域講師を招いての地域ふれあいデー」にて6月25日に実施)</p> <p>第3回「積み木でつくるアンコール・ワット」ワークショップ</p> <p>(東京都杉並区高井戸中学校文化祭にて10月29日に実施)</p>
第47回	研修生11名	現場実習 (バンテアイ・クデイ)
2011年12月24日 ～12月30日	建築学部 5 考古学部 6	<p>科目：〔建築学〕 三輪 悟、マオ・ソックニー、サン・ペウ</p> <p>〔考古学〕 田畑幸嗣、エク・ブンタ、リー・ヴァンナ、チュエン・ブティエ</p>
第48回	研修生19名	現場実習 (バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット)
2012年8月3日 ～9月8日	建築学部 6 考古学部 13	<p>科目：〔建築学〕 三輪 悟、チン・チョン・モニー、マオ・ソックニー、サン・ペウ、チェン・ラター</p> <p>〔考古学〕 田畑幸嗣、ベン・シタ、エク・ブンタ、リー・ヴァンナ、ニム・ソテイーヴン、チュエン・ブティエ</p> <p>〔文化遺産教育〕 阿部千依</p> <p>文化遺産教育分野：阿部千依</p> <p>「アジア文化遺産啓蒙教育プログラム」(第3年度)</p> <p>(バンテアイ・スレイ郡、バンテアイ・スレイ地区およびプラダック地区の小学校5校、生徒383名、引率教諭36名、日本人学生・教員71名参加、バンテアイ・クデイ遺跡とシハヌーク・イオン博物館見学、アンコール・ワット遺跡見学)</p> <p>(国内)</p> <p>第4回「三万個の積み木で1923年の上智大学を再現しよう」</p> <p>(オールソフィアンズフェスティバルにて5月27日に実施)</p> <p>第5回「積み木でつくるアンコール・ワット」</p> <p>(新潟清心女子中学高等学校にて10月12日に実施)</p> <p>第6回「積み木でつくりようアンコール・ワット in 東北—上智大学の国際教育を被災地の子供たちへ」上智大学創立100周年プレ企画 (学生センター)</p> <p>(岩手県陸前高田市下矢作コミュニティーセンターにて11月18日に実施)</p>
第49回	研修生23名	現場実習 (バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット)
2013年8月3日 ～9月15日	建築学部 9 考古学部 14	<p>科目：〔建築学〕 三輪 悟、チン・チョン・モニー、マオ・ソックニー、サン・ペウ、チェン・ラター</p> <p>〔考古学〕 田畑幸嗣、丸井雅子、ベン・シタ、エク・ブンタ、リー・ヴァンナ、ニム・ソテイーヴン、チュエン・ブティエ</p> <p>〔文化遺産教育〕 阿部千依</p> <p>文化遺産教育分野：</p> <p>(カンボジア) 三輪 悟、田中沙織</p> <p>「文化遺産教育プログラム」</p> <p>(プレア・エンコセイ小学校、スラ・スラン小学校、生徒372名、引率教諭15名、4月22日、27日、5月2日、4日、9日、11日に実施)</p>

2013年8月3日 ～9月15日		(国内) 阿部千依 環境・文化遺産教育ワークショップ「カンボジアの文化遺産を積み木でつ くろう」 (国連大学GEOC地球環境パートナーシッププラザにて8月13日～24日に実施)
2014年3月28日、 5月29日、 10月25日	集中講義 (クメール美術 史概論)	プノンペン王立芸術大学 担当者 久保真紀子
第50回	学生16名	現場実習 (バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット)
2014年8月9日 ～9月10日	建築学部 8 考古学部 8	科目: [建築学] 三輪 悟、小島陽子、コン・コーサル、マオ・ソックニー、 チェン・ラター [考古学] 丸井雅子、ニム・ソテイーヴン、ピン・パクダイ、チュエン・ プティー、ボン・ソヴァット、ムウン・ソピアプ、チャイ・ ラチャナ、ヘン・タン、ティン・ティナ、キム・サムナン、 松浦史明、久保真紀子、佐藤恵子 文化遺産教育分野: 「文化遺産教育プログラム」 (ワット・チュー中学校、110名、8月4日にアンコール・ワットにて実 施、上智大学 STP と共催) (ロハール村住民、90名、8月29日にバンテアイ・クデイにおいて実施)
平成26年度 (2014年) 文化庁拠点交流 事業  2014年8月13日 ～20日(8日間)  会場: アジア人 材センター (カンボジア、 シエムリアップ)	各国遺跡現場 担当官 10名	「東南アジア五ヵ国における文化遺産保存のための拠点交流事業」 国際ワークショップ(第1回): 英語名称 Mekong Cultural Heritage Workshop  協力機関: SPAFA(東南アジア文部大臣機構・芸術文化事業)、カンボジア文化芸 術省、アプサラ機構 事 務 局: 石澤良昭、阿部千依 コーディネーター: ウー・ニユン・ハン、アン・チュリアン、石澤良昭 出 席 者: [カンボジア] チェン・ラター、リー・ヴァンナ [ラオス] パンタヴォン・オーラニ、ピマセン・シボウンヘン [ミャンマー] タン・ハティク、ティン・フット・アン [タイ] ポシヤナンダナ・ヴァス [ベトナム] グエン・ホアンバイ・リン、グエン・ニュット・ブオン、 グエン・ブオン・タオ
平成26年度 (2015年) 文化庁拠点交流 事業  2015年2月8日 ～14日(7日間)  会場: アジア人 材センター (カンボジア、 シエムリアップ)	各国遺跡現場 担当官 10名	「東南アジア五ヵ国における文化遺産保存のための拠点交流事業」 国際ワークショップ(第2回): 英語名称 Mekong Cultural Heritage International Workshop  協力機関: SPAFA(東南アジア文部大臣機構・芸術文化事業)、カンボジア文化芸 術省、アプサラ機構 事 務 局: 石澤良昭、阿部千依、ラオ・キム・リアン(現地調整) コーディネーター: ウー・ニユン・ハン、アン・チュリアン、石澤良昭 出 席 者: [カンボジア] チェン・ラター、リー・ヴァンナ [ラオス] パンタヴォン・オーラニ、カムセン・ヴォンシー [ミャンマー] タン・ハティク、ティン・フット・アウン [タイ] ポシヤナンダナ・ヴァス [ベトナム] グエン・ホアンバイ・リン、グエン・カン・トラン・ キエン、グエン・ブオン・タオ
2015年2月25日	講義: 文化遺 産保存保存論 建築学部 20	プノンペン王立芸術大学建築学部 担当者 三輪 悟
第51回	学生14名	現場実習 (バンテアイ・クデイ、アンコール・ワット)
2015年7月30日 ～9月13日	建築学部 7 考古学部 7	科目: [建築学] 三輪 悟、マオ・ソックニー

<p>2015年7月30日 ～9月13日</p>		<p>〔考古学〕 丸井雅子、ニム・ソテイーヴン、ピン・パクダイ、チュエン・ブティエー</p> <p>〔RUFA〕 ボン・ソヴァット（学長）、コン・コーサル（建築学部長）、ムウン・ソピアップ（考古学部長）</p> <p>〈合同講義〉 上野邦一、ティン・ティナ、チャイ・ラチャナ、チェン・ラター、ハウ・トイほか</p> <p>文化遺産教育分野： 「文化遺産教育プログラム」 丸井雅子、三輪 悟、ラオ・キム・リアン、チュエン・ブティエー、ニム・ソテイーヴン、ピン・パクダイ （ワット・チュー中学校、130名、8月4日にバイヨンにて実施、上智大学STPと共催） （エンコセイ小学校、60名、8月27日にワット・ブリア・エンコセイ、バンテアイ・クデイ、シハヌーク・イオン博物館にて実施）</p>
<p>平成27年度 (2015年) 文化庁拠点交流 事業</p> <p>2015年8月14日 ～20日（8日間）</p> <p>会場：アジア人 材センター (カンボジア、 シエムリアップ)</p>	<p>各国遺跡現場 担当官 12名</p>	<p>「東南アジア五カ国における文化遺産保存のための拠点交流事業」 国際ワークショップ（第3回）：英語名称 Mekong Cultural Heritage International Workshop</p> <p>協力機関：SPAFA（東南アジア文部大臣機構・芸術文化事業）、カンボジア文化芸術省、アプサラ機構</p> <p>事務局：石澤良昭、久保真紀子、ラオ・キム・リアン（現地調整） コーディネーター：ウー・ニユン・ハン、アン・チュリアン、石澤良昭</p> <p>出席者：〔カンボジア〕 チェン・ラター、ティン・ティナ、マオ・ソックニー 〔ラオス〕 カンポーミー・マニラ、プートン・ボンシャイボン、シリボーム・ソムヌーク、カムルアン・アバイヤヴォン 〔ミャンマー〕 アーカー・エー、ヤン・アウン 〔タイ〕 スラユット・ウィリヤダムロン、ヒエンカエウ・ポントーン 〔ベトナム〕 グエン・ホアンバイ・リン</p>

注1：1996年より講義・出土品整理作業・水洗いは上智大学アジア人材養成研究センター（2002年10月上智大学アンコール研修所を改名）で実施。

注2：プノンペン王立芸術大学における集中講義：1991年3月から1997年5月まで7年間に16科目につき延べ11回実施。動員講師延べ59名、受講生延べ1,500名。2014年3月から2015年1月まで、1科目、全4回実施。受講生延べ136名。

注3：遺跡現場における実習：1991年3月から2015年9月まで24年間に51回実施。動員講師延べ380名、受講生延べ529名。

Sophia Mission in Cambodia  
On-Site Training Program for Development Preservation Officers of Angkor  
(1991~2015)

Date	Number of Students and Trainers	Sophia Mission
1 <sup>st</sup> Mission	25 students	Intensive Course: March 12 – March 17 (Siem Reap, Banteay Kdei)
March 12 – March 25, 1991	Faculty of Architecture 15	Subject: [History] -History of Angkor Yoshiaki Ishizawa
	Faculty of Archaeology 10	[Conservation Science for Cultural Properties] John Sanday (W.M.F) -Introduction to Conservation_Science -Surveys and Overview on Inventory Yasushi Kono [Architecture] -Historical Site Survey Yoshiaki Fujiki [Archaeology] -Archaeological Excavation of Historical Sites Kunikazu Ueno [Geology] -Geological Survey of Historical Sites Tomio Moriai
	Students: 30	March 18 -March 25 (Siem Reap, Banteay Kdei)
	Team A 8	Subject: [Architecture] -A. Architecture and Structure Team (Angkor Wat) John Sanday
	Team B 9	B. General Architecture Team (Banteay Kdei) Yoshiaki Fujiki
	Team C 7	[Archaeology]-C. Archaeology Team (Banteay Kdei) Kunikazu Ueno
	Team D 6	Richard Engelhardt (UNESCO) Tomio Moriai [Geology] -D. Geology Team (Bayon, Preah Khan)
2 <sup>nd</sup> Mission	Students: 160	Intensive Course August 13- 14, (Royal University of Fine Arts)
August 13 – August 28, 1991	Faculty of Architecture 60	Subject: [History] –History of Angkor Yoshiaki Ishizawa
	Faculty of Art Plastic 50	[Architecture] – Principles and Practices on Conservation Science for Cultural Properties Nobuo Ito
	Faculty of Archaeology 50	Architectural Culture of Neighboring Khmer Empire and Architecture of Champa Kingdom Yutaka Shigeeda [Archaeology]-Archaeological Survey Basics Yoshiharu Nakao [Environmental Engineering] –Socio-Anthropological Development and Environmental Preservation of Angkor Region Lao Kim Leang [Civil Engineering] – Angkor Historical Sites as a Historic Spot and Park / Introduction to Structural Mechanics Shunsuke Baba [Irrigation and Hydrology] -Environmental Problems in Developing Countries and the State of Development Projects Asaichi Miyakawa [Historical Site Engineering] - Historical Site Engineering Concepts and Methods Nobuo Endo [Cultural History] -Cultural Relations Theory Yoshiharu Tsuboi [Botany] -Systematic Botany and the Forests of Angkor Mitsuyasu Hasebe
	Students: 10	August 19 - August 26 (Siem Reap, Banteay Kdei)
	Faculty of Architecture 5	Subject:
	Faculty of Archaeology 5	[Architecture] Yoshiaki Ishizawa, Shunsuke Baba, Yoshiharu Nakao, Yutaka Shigeeda, Nobuo Endo
	Plus two other voluntary participants	[Archaeology] Lao Kim Leang, Mitsuyasu Hasebe, Bora Tanimoto, Naruko Matsui
3 <sup>rd</sup> Mission	Students: 332	Intensive Course: March 10 – March 14 (Royal University of Fine Arts)
March 10 – March 21, 1992	Faculty of Architecture	Subject:
	(2nd years students) 108	[History] -Ancient History of Cambodia Yoshiaki Ishizawa -Pre-modern History of Cambodia Alain Forest (EPHE) -Cambodian Epigraphy Claude Jacques (EPHE)
	Faculty of Archaeology	-Introduction to Epigraphy of Cambodia Claude Jacques
(2 <sup>nd</sup> year students) 38	[Architecture] -Conservation Science Yutaka Shigeeda Architecture Basics Yutaka Shigeeda	
Faculty of Architecture and Archaeology	[Archaeology] - Museology Yoshiharu Nakao - Introduction to Museology Yoshiharu Nakao -Archaeology Kunikazu Ueno	
(1st year students) 186	Archaeology (major) Kunikazu Ueno [Geology] -Geology Tomio Moriai	

Date	Number of Students and Trainers	Sophia Mission	
		Special Lecture on Geology [Environmental Engineering]- Environmental Engineering	Tomio Moriai Lao Kim Leang
March 10 – March 21, 1992		[Historical Site Engineering] –Historical Site Engineering [Socio-anthropology] –Culture and Environment Theory Law for the Protection of Cultural Properties Introduction to Cultural Policy [Botany] –Botany	Nobuo Endo Yoshiharu Tsuboi Miyuki Sakai Richard Engelhardt Jun Yokoyama
	Students: 20	Field Training: March 16 – March 21 (Siem Reap, Banteay Kdei)	
	Faculty of Architecture 10	Subject:	
	Faculty of Archaeology 10	[Architecture] Yutaka Shigeeda [Archaeology] Yoshiharu Nakao, Kunikazu Ueno [Geology] Tomio Moriai	
4 <sup>th</sup> Mission	Students: 332	Intensive Course: August 10 – August 14 (Royal University of Fine Arts)	
August 10 – August 26, 1992	Faculty of Architecture 181 Faculty of Archaeology 151	Subject: [History] -History of Cambodia I -Angkor Epigraphy [Conservation Science for Cultural Properties] - Conservation Science for Cultural Properties Theory and Practice Conservation Science for Cultural Properties I Conservation Science for Cultural Properties I, II UNESCO recommendations [Architecture] - Architecture Introduction to Drafting Drafting Practice  [Archaeology] - Archaeology I, II [Geology] - Geology I, II [Cultural History] -Culture of Indo-china I, II [Historical Site Engineering] –Historical Site Engineering I,II [Environmental Science] -Nature and Environment of Cambodia Development and Environmental Assessments	Yoshiaki Ishizawa Yoshiaki Ishizawa  Nobuo Ito  Nobuo Ito Tsutomu Kimura Richard Engelhardt Yutaka Shigeeda Tsuyoshi Narita Yutaka Shigeeda, Tsuyoshi Narita Hiroshi Sugiyama Shinji Tukawaki Yoshiharu Tsuboi Nobuo Endo  Lao Kim Leang Lao Kim Leang
	Students: 20	Field Training: August 15 – August 26 (Siem Reap, Banteay Kdei)	
	Faculty of Architecture 10	Subject:	
	Faculty of Archaeology 10	[Architecture] Yutaka Shigeeda [Archaeology] Hiroshi Sugiyama	
5 <sup>th</sup> Mission	Students: 150	Intensive Course: March 1 – March 5 (Royal University of Fine Arts)	
March 1 – March 5, 1993	Faculty of Architecture 80 Faculty of Archaeology 70	Subject: [History] Yoshiaki Ishizawa [Archaeology] Yoshiharu Nakao, Hiroshi Sugiyama [Architecture] Yutaka Shigeeda	
6 <sup>th</sup> Mission	Students: 20	1 <sup>st</sup> Workshop (Royal University of Fine Arts)	
October 18 – October 28, 1993	Faculty of Archaeology 20	[Creating Socio-Anthropological Development Plans for the Angkor Region Based on Historical Site Engineering] -Special Lecture and Instruction Nobuo Endo	
7 <sup>th</sup> Mission	Students: 20	2 <sup>nd</sup> Workshop (Royal University of Fine Arts)	
February 14 –February 18, 1994		[Creating Socio-Anthropological Development Plans for the Angkor Region Based on Historical Site Engineering] -Special Lecture and Instruction Nobuo Endo	
8 <sup>th</sup> Mission	Students: 76	Intensive Course: March 7 – March 12 (Royal University of Fine Arts)	
March 7 – March 22, 1994	Faculty of Archaeology 76	Subject: [History] -Special Lecture on History History of Angkor [Archaeology] -Introduction to Archaeology Special Lecture on Museology Special Lecture on Archaeology Training Course on Archeology [Geology] -General Geology [Cultural History] -Culture of Indochina	Yoshiaki Ishizawa Yoshiaki Ishizawa Yoshiharu Nakao Yoshiharu Nakao Kunikazu Ueno Kunikazu Ueno Tsukawaki Shinji Yoshiharu Tsuboi
	Students: 10	Field Training: March 13 – March 22 (Siem Reap, Banteay Kdei)	
	Faculty of Archaeology 10	Subject: [Archaeology] Kunikazu Ueno, Hiroshi Sugiyama, Yoshiharu Nakao, Yukio Fujita	

Date	Number of Students and Trainers	Sophia Mission
July 31 – August 22, 1994	Faculty of Archaeology 7	Subject: [History] Yoshiaki Ishizawa [Archaeology] Yukio Fujita, Masako Marui
10 <sup>th</sup> Mission December 19 – December 29, 1994	Students: 12 Faculty of Archaeology 6 Faculty of Architecture 6	Field Training December 19 – December 29 (Siem Reap, Banteay Kdei) Subject: [History] Yoshiaki Ishizawa [Architecture] Masao Katagiri, Yasuyuki Furuyama [Archaeology] Kunikazu Ueno, Masako Marui
11 <sup>th</sup> Mission February 10 – March 31, 1995	Students: 190 Faculty of Archaeology 70 Faculty of Architecture 120 Students: 22 Faculty of Archaeology 10 Faculty of Architecture 12	Intensive Courses February 10 – March 9 (Royal University of Fine Arts) Subject: [Architecture] Yutaka Shigeeda [Summary of Architecture] Yutaka Shigeeda Field Training March 10 – March 31 (Siem Reap, Banteay Kdei) Subject: [History] Yoshiaki Ishizawa [Architecture] Masao Katagiri, Yutaka Shigeeda, Yasuyuki Furuyama [Archaeology] Yoshiharu Nakao, Nobuhiro Matsuo, Masako Marui
12 <sup>th</sup> Mission August 1 – August 17, 1995	Students: 10 Faculty of Architecture 5 Faculty of Archaeology 5	Field Training (Siem Reap, Banteay Kdei, Angkor Wat) Subject: [History] Yoshiaki Ishizawa [Architecture] Masao Katagiri, Yutaka Shigeeda, Yasuyuki Furuyama, Futoshi Jingu [Archaeology] Kunikazu Ueno, Nobuhiro Matsuo, Masako Marui, Hiroshi Hanatani
13 <sup>th</sup> Mission March 20 – March 23, 1996	Students: 10 Faculty of Architecture 5 Faculty of Archaeology 5	Field Training (Siem Reap, Banteay Kdei, Angkor Wat) Subject: [History] Yoshiaki Ishizawa [Architecture] Masao Katagiri, Yutaka Shigeeda, Yasuyuki Furuyama, Byungha Choi [Archaeology] Yoshiharu Nakao, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Hiroshi Hanatani
14 <sup>th</sup> Mission March 2 – May 23, 1996	Students: 62 Faculty of Archaeology L1 36 L4 26	Intensive Courses (Royal University of Fine Arts) Subject: [Historical Site Engineering] Nobuo Endo, Masako Marui
15 <sup>th</sup> Mission July 15 – August 31, 1996	Students: 10 Faculty of Architecture 5 Faculty of Archaeology 5	Field Training (Siem Reap, Banteay Kdei, Angkor Wat) Subject: [History] Yoshiaki Ishizawa [Architecture] Masao Katagiri, Yutaka Shigeeda, Yasuyuki Furuyama, Byungha Choi [Archaeology] Kunikazu Ueno, Yasuharu Miyamoto, Tomohiro Furuoya, Tokiko Sumida
16 <sup>th</sup> Mission November 17 – December 29, 1996	Students: 10 Faculty of Architecture 5 Faculty of Archaeology 5	Field Training (Siem Reap, Banteay Kdei, Angkor Wat) Subject: [History] Yoshiaki Ishizawa [Architecture] Masao Katagiri, Yutaka Shigeeda, Yasuyuki Furuyama, Byungha Choi [Archaeology] Kunikazu Ueno, Masako Marui
17 <sup>th</sup> Mission February 28 – March 30, 1997	Students: 11 Faculty of Architecture 5 Faculty of Archaeology 6	Field Training (Siem Reap, Banteay Kdei, Angkor Wat) Subject: [History] Yoshiaki Ishizawa [Architecture] Masao Katagiri, Yutaka Shigeeda, Byungha Choi [Archaeology] Yoshiharu Nakao, Yasuharu Miyamoto, Hiroshi Hanatani
18 <sup>th</sup> Mission February 25 – May 23, 1997	Students: 133 Faculty of Architecture 97 Faculty of Archaeology 36	Intensive Courses / Tests (Royal University of Fine Arts) Subject: [Cultural Site Management] Nobuo Endo, Masako Marui
19 <sup>th</sup> Mission November 15 – December 30, 1997	Students: 9 Faculty of Architecture 5 Faculty of Archaeology 4	Field Training (Siem Reap, Banteay Kdei, Angkor Wat) Subject: [History] Yoshiaki Ishizawa [Architecture] Masao Katagiri, Byungha Choi [Inventory] Kunikazu Ueno, Masako Marui
20 <sup>th</sup> Mission February 20 – April 10, 1998	Students: 9 Faculty of Architecture 5 Faculty of Archaeology 4	Field Training (Siem Reap, Banteay Kdei, Angkor Wat) Subject: [History] Yoshiaki Ishizawa [Architecture] Masao Katagiri, Byungha Choi [Archaeology] Yoshiharu Nakao, Tetsuo Hishida, Yasuharu Miyamoto

Date	Number of Students and Trainers	Sophia Mission
21 <sup>st</sup> Mission	Trainees: 9	Field Training (Siem Reap, Banteay Kdei, Angkor Wat, Tani Kiln Site)
August 20 – September 16, 1998	Faculty of Architecture 5 Faculty of Archaeology 4	Subject: [Architecture] Masao Katagiri, Byungha Choi [Archaeology] Kunikazu Ueno, Masako Marui [Kiln Site Survey] Yoji Aoyagi, Tatsuo Sasaki, Takenori Nogami, Kazuhiko Tanaka, Masako Marui, Tokiko Sumida
22 <sup>nd</sup> Mission	Trainees: 7	Field Survey (Siem Reap, Banteay Kdei, Angkor Wat)
October 20 – December 30, 1998	Faculty of Architecture 3 Faculty of Archaeology 4	Subject: [History] Yoshiaki Ishizawa [Architecture] Masao Katagiri, Byungha Choi, Satoru Miwa [Archaeology] Kunikazu Ueno, Masako Marui, Hisao Arahi
23 <sup>rd</sup> Mission	Trainees: 7	Field Survey (Siem Reap, Banteay Kdei, Angkor Wat, Tani Kiln Site)
January 10 – March 31, 1999	Faculty of Architecture 3 Faculty of Archaeology 4	Subject: [Architecture] Masao Katagiri, Byungha Choi, Satoru Miwa [Archaeology] Yoshiharu Nakao, Masako Marui, Hisao Arahi, Yasuharu Miyamoto [Kiln Site Survey] Yoji Aoyagi, Tatsuo Sasaki, Takenori Nogami, Kazuhiko Tanaka, Tokiko Sumida
24 <sup>th</sup> Mission	Trainees: 6	Field Training (Siem Reap, Banteay Kdei, Angkor Wat, Tani Kiln Site)
June 20 – September 10, 1999	Faculty of Architecture 3 Faculty of Archaeology 3	Subject: [History] Yoshiaki Ishizawa [Architecture] Masao Katagiri, Byungha Choi, Satoru Miwa [Archaeology] Kunikazu Ueno, Masako Marui, Hisao Arahi [Kiln site survey] Yoji Aoyagi, Tatsuo Sasaki, Takenori Nogami, Kazuhiko Tanaka, Masako Marui, Tokiko Sumida
25 <sup>th</sup> Mission	Trainees: 9	Field Training (Siem Reap, Banteay Kdei, Angkor Wat)
December 15 – December 31, 1999	Faculty of Architecture 4 Faculty of Archaeology 5	Subject: [History] Yoshiaki Ishizawa [Architecture] Masao Katagiri, Satoru Miwa [Archaeology] Yasuharu Miyamoto, Tetsuo Hishida, Masako Marui, Hisao Arahi
26 <sup>th</sup> Mission	Trainees: 8	Field Training (Siem Reap, Banteay Kdei, Angkor Wat)
March 10 – March 25, 2000	Faculty of Architecture 4 Faculty of Archaeology 4	Subject: [History] Yoshiaki Ishizawa [Architecture] Masao Katagiri, Satoru Miwa [Archaeology] Kunikazu Ueno, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Hisao Arahi
27 <sup>th</sup> Mission	Trainees: 9	Field Training (Siem Reap, Banteay Kdei, Angkor Wat, Tani Kiln Site)
August 10 – August 25, 2000	Faculty of Architecture 4 Faculty of Archaeology 5	Subject: [History] Yoshiaki Ishizawa [Architecture] Masao Katagiri, Satoru Miwa [Kiln site survey] Yoji Aoyagi, Tatsuo Sasaki, Takenori Nogami, Kazuhiko Tanaka, Masako Marui, Yukitsugu Tabata [Archaeology] Yasuharu Miyamoto, Tetsuo Hishida, Masako Marui, Hisao Arahi (Excavation of a discarded Buddhist statue)
28 <sup>th</sup> Mission	Trainees: 9	Field Training (Siem Reap, Banteay Kdei, Angkor Wat)
December 10 – December 25, 2000	Faculty of Architecture 4 Faculty of Archaeology 5	Subject: [History] Yoshiaki Ishizawa [Architecture] Masao Katagiri, Satoru Miwa, Masatoki Takahashi [Archaeology] Kunikazu Ueno, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Hisao Arahi
29 <sup>th</sup> Mission	Trainees: 15	Field Training (Siem Reap, Banteay Kdei, Angkor Wat)
March 5 – March 25, 2001	Faculty of Architecture 10 Faculty of Archaeology 5	Subject: [Architecture] Masao Katagiri, Satoru Miwa, Masatoki Takahashi [Archaeology] Kunikazu Ueno, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Hisao Arahi (Excavation of 106 discarded Buddhist statues)
30 <sup>th</sup> Mission	Trainees: 12	Field Training (Siem Reap, Banteay Kdei, Angkor Wat, Tani Kiln Site)
August 1 – September 7, 2001	Faculty of Architecture 5 Faculty of Archaeology 7	Subject: [Architecture] Masao Katagiri, Satoru Miwa, Yoko Kojima [Kiln Site Survey] Yoji Aoyagi, Tatsuo Sasaki, Takenori Nogami, Kazuhiko Tanaka, Masako Marui, Yukitsugu Tabata [Archaeology] Kunikazu Ueno, Tetsuo Hishida, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Hisao Arahi (Excavation of 167 discarded Buddhist statues)

Date	Number of Students and Trainers	Sophia Mission
31 <sup>st</sup> Mission	Trainees: 7	Field Training (Siem Reap, Banteay Kdei)
December 1 –December 15, 2001	Faculty of Archaeology 7	Subject: [Archaeology] Tetsuo Hishida, Masako Marui (Additional survey around discarded Buddhist statues (1))
32 <sup>nd</sup> Mission	Trainees: 13	Field Training (Siem Reap, Banteay Kdei, Angkor Wat, Tani Kiln Site)
August 1 – September 7, 2002	Faculty of Architecture 6 Faculty of Archaeology 7	Subject: [Architecture] Masao Katagiri, Satoru Miwa, Yoko Kojima [Kiln Site Survey] Yoji Aoyagi, Tatsuo Sasaki, Takenori Nogami, Kazuhiko Tanaka, Masako Marui, Yukitsugu Tabata, Tokiko Sumida [Archaeology] Kunikazu Ueno, Tetsuo Hishida, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Hisao Arah (Additional survey around discarded Buddhist statues (2))
33 <sup>rd</sup> Mission	Trainees: 3	Field Training (Siem Reap, Banteay Kdei, Angkor Wat)
November 10, 2002 – January 10, 2003	Faculty of Archaeology 3	Subject: [Architecture] Masao Katagiri, Satoru Miwa, Yoko Kojima [Archaeology] Tetsuo Hishida, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Yukitsugu Tabata Additional survey around discarded Buddhist statues (3)
34 <sup>th</sup> Mission	Trainees: 14	Field Training (Siem Reap, Banteay Kdei, Angkor Wat)
August 10 – August 30, 2003	Faculty of Architecture 6 Faculty of Archaeology 8	Subject: [Architecture] Masao Katagiri, Satoru Miwa [Archaeology] Kunikazu Ueno, Tetsuo Hishida, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Yukitsugu Tabata, Hisao Arah (Supplemental survey around ancient Buddhist statues (4))
35 <sup>th</sup> Mission	Trainees: 3	Field Training (Siem Reap, Banteay Kdei, Angkor Wat)
December 18 –December 29, 2003	Faculty of Archaeology 3	Subject: [Archaeology] Kunikazu Ueno, Masako Marui (two archaeology students, one staff member)
36 <sup>th</sup> Mission	Trainees: 9	Field Training (Siem Reap, Banteay Kdei, Angkor Wat)
August 16 – August 31, 2004	Faculty of Architecture 5 Faculty of Archaeology 4	Subject: [Architecture] Masao Katagiri, Satoru Miwa [Archaeology] Kunikazu Ueno, Tetsuo Hishida, Yasuharu Miyamoto, Yukitsugu Tabata, Masako Marui (Three archaeology students and a member of staffs) Special Lecture: How to Consider the Lost Buildings from Archaeological Evidences (Kunikazu Ueno, August 28, Royal University of Fine Arts)
37 <sup>th</sup> Mission	Trainees: 15	Field Training (Siem Reap, Banteay Kdei, Angkor Wat)
August 13 – September 13, 2005	Faculty of Architecture 5 Faculty of Archaeology 10	Subject: [Architecture] Masao Katagiri, Satoru Miwa [Archaeology] Kunikazu Ueno, Tetsuo Hishida, Yasuharu Miyamoto, Yukitsugu Tabata, Masako Marui (Three archaeology students and a staff of members)
38 <sup>th</sup> Mission	Trainees: 15	Field Training (Banteay Kdei, Angkor Wat)
August 16 – September 4, 2006	Faculty of Architecture 5 Faculty of Archaeology 10	Subject: [Research on Cambodia] Yoshiaki Ishizawa, Ly Vanna, Keo Kinal [Cultural Heritage Investigation ] Yoshiaki Ishizawa, Masako Marui, Ek Buntha [Architecture] Satoru Miwa, Mao Sokny [Archaeology] Kunikazu Ueno, Tetsuo Hishida, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Yukitsugu Tabata, Choeun Vuthy [Botany] Jun Yokoyama
39 <sup>th</sup> Mission	Trainees: 15	Field Training (Banteay Kdei, Angkor Wat)
February 21 – March 7, 2007	Faculty of Architecture 5 Faculty of Archaeology 10	Subject: [Cultural Heritage Investigation] Yoshiaki Ishizawa, Shigeo Aoki, Akiko Tashiro, Shinji Tsukawaki [Architecture] Satoru Miwa, Mao Sokny [Archaeology] Masako Marui, Yukitsugu Tabata, Choeun Vuthy [Botany] Jun Yokoyama
40 <sup>th</sup> Mission	Trainees: 21	Field Training (Banteay Kdei, Angkor Wat)
August 13 – September 9, 2007	Faculty of Architecture 5 Faculty of Archaeology 10 Sophia University Graduate School 6	Subject: [Research on Cambodia] Yoshiaki Ishizawa, Tin Tina, Keo Kinal [Cultural Heritage Investigation ] Yoshiaki Ishizawa, Shigeo Aoki, Akiko Tashiro, Tin Tina, Thlang Sakhoeun, Noboru Goto [Architecture] Satoru Miwa, Mao Sokny [Archaeology] Kunikazu Ueno, Tetsuo Hishida, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Yukitsugu Tabata, Tin Tina, Choeun Vuthy [Botany] Jun Yokoyama



Date	Number of Students and Trainers	Sophia Mission
41 <sup>st</sup> Mission	Trainees: 15	Field Training (Banteay Kdei, Angkor Wat)
August 10 – September 15, 2008	Faculty of Architecture 5 Faculty of Archaeology 10 Sophia University Graduate School 5	Subject: [Research on Cambodia] Yoshiaki Ishizawa, Masako Marui, Noboru Goto [Cultural Heritage Investigation] Masako Marui, Nobuo Endo, Shimizu Shinichi, Akiko Tashiro [Architecture] Satoru Miwa, Mao Sokny [Archaeology] Kunikazu Ueno, Tetsuo Hishida, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Yukitsugu Tabata, Tin Tina, Choeun Vuthy, Phin Phakdey [Botany] Jun Yokoyama Field of Cultural Heritage Education: Masako Marui, Makiko Kubo 1st time “Cultural Heritage Education for the Local Community of in Angkor Region” (140 villagers from Rohal Village participated in the program. Participants visited Banteay Kdei, Angkor Wat West Causeway, and Preah Norodom Sihanouk-Angkor Museum on February 26) 2nd time “Cultural Heritage Education for the Local Community in Angkor Region” (60 villagers of Chriev village participated. Participants visited Banteay Kdei, Angkor Wat West Causeway, and Preah Norodom Sihanouk-Angkor Museum on August 30)
42 <sup>nd</sup> Mission	Trainees: 8	Museum Training (Preah Norodom Sihanouk-Angkor Museum)
March 14 – March 24, 2009	Preah Norodom Sihanouk-Angkor Museum 8	Subject: [Practical Training of Rubbing] Yoshiharu Nakao
43 <sup>rd</sup> Mission	Trainees: 23	Field Training (Banteay Kdei, Angkor Wat)
August 9 – September 5, 2009	Faculty of Architecture 5 Faculty of Archaeology 15 Sophia University Graduate School 3	Subject: [Research on Cambodia] Yoshiaki Ishizawa, Masako Marui, Goto Noboru, Keo Kinal [Cultural Heritage Investigation] Masako Marui, Aoki Shigeo, Akiko Tashiro [Architecture] Satoru Miwa, Mao Sokny [Archaeology] Kunikazu Ueno, Tetsuo Hishida, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Yukitsugu Tabata, Tin Tina, Som Visoth, Choeun Vuthy [Botany] Jun Yokoyama Field of Cultural Heritage Education: 3rd time “Cultural Heritage Education for the Local Community in Angkor Region” (412 students and 34 teachers from Samaki Sahakum Primary School participated. Participants visited Banteay Kdei, and Preah Norodom Sihanouk-Angkor Museum on February 26)
44 <sup>th</sup> Mission	Trainees: 6	Field Training (Banteay Kdei, Angkor Wat)
August 12 - September 11, 2010	Faculty of Architecture 2 Faculty of Archaeology 4	Subject: [Architecture] Satoru Miwa, Mao Sokny [Archaeology] Yukitsugu Tabata, Ek Buntha, Seng Chantha, Som Visoth, Choeun Vuthy [Cultural Heritage Education] Chie Abe Field of Cultural Heritage Education: Chie Abe “Asian Cultural Heritage Enlightenment Education Program” (1 <sup>st</sup> year) (412 students and 34 teachers from Kravan Primary School participated. Participants visited Banteay Kdei, and Preah Norodom Sihanouk-Angkor Museum on August 14, 21, 28, and September 4) (Domestic) 1st time “Let’s Compose Angkor Wat with Wooden Blocks” Cultural understanding event designed to learn about cultural heritage sites during which 30,000 recycled wooden blocks were used to compose Angkor Wat. (Held at the school festival in Sophia Fukuoka Junior-Senior High School, Fukuoka Prefecture on September 12)
45 <sup>th</sup> Mission	Trainees: 6	Field Training (Banteay Kdei)
December 22 – December 31, 2010	Faculty of Architecture 2 Faculty of Archaeology 4	Subject: [Architecture] Satoru Miwa, Mao Sokny, Chin Chhong Mony [Archaeology] Yukitsugu Tabata, Ek Buntha, Pheng Sytha, Seng Chantha, Som Visoth, Choeun Vuthy
46 <sup>th</sup> Mission	Trainees: 11	Field Training (Banteay Kdei, Angkor Wat)
August 8 – September 10, 2011	Faculty of Architecture 5 Faculty of Archaeology 6	Subject: [Architecture] Satoru Miwa, Mao Sokny, Sam Peou, Chin Chhong Mony

Date	Number of Students and Trainers	Sophia Mission
August 8 – September 10, 2011		[Archaeology] Yukitsugu Tabata, Ek Buntha, Ly Vanna, Pheng Sytha, Choeun Vuthy [Cultural Heritage Education] Chie Abe [Remote-Sensing] Hiroyuki Kamei Field of Cultural Heritage Education: Chie Abe "Asian Cultural Heritage Enlightenment Education Program" (2 <sup>nd</sup> year) (596 students and 31 teachers from 11 elementary schools in the Wat Run of Banteay Srei district county participated with 50 Japanese students and teachers in a visit to Banteay Kdei, and Preah Norodom Sihanouk-Angkor Museum on August 13, 20, 27 and September 3 and 10) "Visiting Lecture on Environmental Education Given to Elementary School Students in the Angkor Region" (September 13, held in conjunction with JQA) (Domestic) 2 <sup>nd</sup> time Workshop "Let's Compose Angkor Wat with Wooden Blocks" (held at Numama Junior High School's "Regional Exchange Day with Regional Instructors", Zushi City, Kanagawa Prefecture on June 25) 3 <sup>rd</sup> time Workshop "Let's Compose Angkor Wat with Wooden Blocks" (held at the school festival in Takaido Junior High School, Sugunami Ward, Tokyo on October 29)
47 <sup>th</sup> Mission	Trainees: 11	Field Training: (Banteay Kdei)
December 24 – December 30, 2011	Faculty of Architecture 5 Faculty of Archaeology 6	Subject: [Architecture] Satoru Miwa, Mao Sokny, Sam Peou [Archaeology] Yukitsugu Tabata, Ek Buntha, Ly Vanna, Choeun Vuthy
48 <sup>th</sup> Mission	Trainees: 19	Field Training: (Banteay Kdei, Angkor Wat)
August 3 – September 8, 2012	Faculty of Architecture 6 Faculty of Archaeology 13	Subject: [Architecture] Satoru Miwa, Chin Chhong Mony, Mao Sokny, Sam Peou, Chean Ratha [Archaeology] Yukitsugu Tabata, Pheng Sytha, Ek Buntha, Ly Vanna, Nhim Sotheavin, Choeun Vuthy [Cultural Heritage Education] Chie Abe Field of Cultural Heritage Education: Chie Abe "Asian Cultural Heritage Enlightenment Education Program" (3 <sup>rd</sup> year) (383 students and 36 teachers from 5 elementary schools and Pradak village in Banteay Srei district participated the program with 71 Japanese students and teachers in a visit to Banteay Kdei, Preah Norodom Sihanouk-Angkor Museum and Angkor Wat) (Domestic) 4 <sup>th</sup> time Workshop "Let's Compose Sophia University as it was in 1923 with Wooden Blocks" (held at All Sophian's Festival on May 27) 5 <sup>th</sup> time Workshop "Let's Compose Angkor Wat with Wooden Blocks" (held at Niigata Seishin Girl's Junior and High School on October 12) 6 <sup>th</sup> time Workshop "Let's Compose Angkor Wat with Wooden Blocks in Tohoku: Bringing the International Education of Sophia University to the Children of the Disaster Region" Sophia University 100th Anniversary Event (held by the student center of Sophia University) (held at the Shimo-Yahagi Community Center, Rikuzentakata City, Iwate Prefecture on November 18)
49 <sup>th</sup> Mission	Trainees: 23	Field Training (Banteay Kdei, Angkor Wat)
August 3 – September 15, 2013	Faculty of Architecture 9 Faculty of Archaeology 14	Subject: [Architecture] Satoru Miwa, Chin Chhong Mony, Mao Sokny, Sam Peou, Chhean Ratha [Archaeology] Yukitsugu Tabata, Masako Marui, Peng Sitha, Ek Buntha, Ly Vanna, Nhim Sotheavin, Choeun Vuthy [Cultural Heritage Education] Chie Abe Field of Cultural Heritage Education: (Cambodia) Satoru Miwa, Saori Tanaka "Cultural Heritage Education Program" (372 students and 15 teachers from Preah Enkosei Primary School and Srah Srang Primary School, held on April 22, 27, May 2, 4, 9, 11)

Date	Number of Students and Trainers	Sophia Mission
August 3 – September 15, 2013		(Domestic) Chie Abe Environment and Cultural Heritage Education Workshop “Let’s Compose Cambodian Cultural Heritage Sites with Wooden Blocks” (held from August 13 -24 at United Nations University GEOC Global Environment Partnership Plaza)
March 28, May 29, October 25, 2014, January 30, 2015	Intensive Course (Introduction to History of Khmer Art)	Royal University of Fine Arts Instructor: Makiko Kubo
50 <sup>th</sup> Mission	Students: 16	Field Training (Banteay Kdei, Angkor Wat)
August 9 – September 10, 2014	Faculty of Architecture 8 Faculty of Archaeology 8	Subject: [Architecture] Satoru Miwa, Yoko Kojima, Kong Kosal, Mao Sokny <Joint Lecture> Chhean Ratha [Archaeology] Masako Marui, Nhim Sotheavin, Phin Phakdey, Choeun Vuthy, Bong Sovath, Mourn Sopheap, Chay Rachana, Heng Than, Tin Tina, Kim Samnang, Bong Sovath, Fumiaki Matsuura, Makiko Kubo, Keiko Sato Field of Cultural Heritage Education: “Cultural Heritage Education Program” Masako Marui, Satoru Miwa, Lao Kim Leang, Choeun Vuthy, Nhim Sotheavin, Phin Phakdey (110 participants from Wat Chak Secondary High School. Held at Angkor Wat on August 4 in conjunction with Sophia University STP) (90 villagers from Rohal Village participated. Held at Banteay Kdei on August 29)
	Participants: 10	“Activities for Exchange in International Cooperation for the Conservation of Cultural Heritage within Five Nations of Southeast Asia”
August 13 –20, 2014	Cambodia 2 Laos 2 Myanmar 2 Thailand 1 Vietnam 3	International Workshop (1 <sup>st</sup> time): Mekong Cultural Heritage International Workshop Event Space: Sophia Asia Center for Research and Human Development (Cambodia, Siem Reap) Cooperating Organizations: Regional Centre for Archaeology and Fine Arts (SEAMEO SPAFA), Ministry of Culture and Fine Arts, Cambodia, National Authority for Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap (APSARA) Office: Yoshiaki Ishizawa, Chie Abe, Lao Kim Leang Coordinators: U Nyunt Han, Ang Choulean, Yoshiaki Ishizawa Participants: [Cambodia] Chhean Ratha, Ly Vanna [Laos] Phanthavong Orlany, Phimmsehnh Sybounhevang [Myanmar] Than Htike, Tin Htut Aung [Thailand] Poshyanandana Vasu [Vietnam] Nguyen Hoangbach Linh, Nguyen Nhut Phuong, Nguyen Phuong Thao
	Participants: 11	“Activities for Exchange in International Cooperation for the Conservation of Cultural Heritage within Five Nations of Southeast Asia”
February 8 –14, 2015	Cambodia 3 Laos 2 Myanmar 2 Thailand 1 Vietnam 3	International Workshop (2 <sup>nd</sup> time): Mekong Cultural Heritage International Workshop Event Space: Sophia Asia Center for Research and Human Development (Cambodia, Siem Reap) Cooperating Organizations: Regional Centre for Archaeology and Fine Arts (SEAMEO SPAFA), Ministry of Culture and Fine Arts, Cambodia, Authority for Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap (APSARA) Office: Yoshiaki Ishizawa, Chie Abe, Lao Kim Leang Coordinators: U Nyunt Han, Ang Choulean, Yoshiaki Ishizawa Participants: [Cambodia] Chhean Ratha, Ly Vanna, Mao Sokny [Laos] Phanthavong Orlany, Khamseng Vongsy [Myanmar] Than Htike, Tin Htut Aung [Thailand] Poshyanandana Vasu [Vietnam] Nguyen Hoangbach Linh, Nguyen Khanh Trung Kien, Nguyen Phuong Thao
February 25, 2015	Lecture: Conservation for Cultural Heritage Faculty of Architecture 20	Royal University of Fine Arts, Faculty of Architecture Instructor: Satoru Miwa

Date	Number of Students and Trainers	Sophia Mission
51 <sup>st</sup> Mission July 30 – September 13, 2015	Students: 14 Faculty of Architecture 7 Faculty of Archaeology 7	Field Training (Banteay Kdei, Angkor Wat) Subject: [Architecture] Satoru Miwa, Mao Sokny [Archaeology] Masako Marui, Nhim Sotheavin, Phin Phakdey, Choeun Vuthy, Kunikazu Ueno, Leng Satya, Phin Samnang, Vitou Phiom, Moung Chanraksme [RUFA] Bong Sovath (Rector of RUFA), Kong Kosal (Dean of Faculty of Architecture), Mourn Sopheap (Dean of Faculty of Archaeology) <Joint Lecture> Tin Tina, Chhay Rachna, Chhean Ratha, Tho Thong "Cultural Heritage Education Program" Masako Marui, Satoru Miwa, Lao Kim Leang, Choeun Vuthy, Nhim Sotheavin, Phin Phakdey (130 participants from Wat Chak Secondary High School. Held at Bayon on August 4 in conjunction with STP, Summer Teaching Program) (60 participants from Preah Enkosei Primary School. Held at Banteay Kdei and Preah Norodom Sihanouk-Angkor Museum on August 27)
	Participants: 12	"Activities for Exchange in International Cooperation for the Conservation of Cultural Heritage within Five Nations of Southeast Asia"
August 13 –20, 2015	Cambodia 3 Laos 4 Myanmar 2 Thailand 2 Vietnam 1	International Workshop (3 <sup>rd</sup> time): Mekong Cultural Heritage International Workshop Cooperating Organizations: Regional Centre for Archaeology and Fine Arts (SEAMEO SPAFA), Ministry of Culture and Fine Arts, Cambodia, Authority for Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap (APSARA) Event Space: Sophia Asia Center for Research and Human Development (Cambodia, Siem Reap) Cooperating Organizations: Regional Centre for Archaeology and Fine Arts (SEAMEO SPAFA), Ministry of Culture and Fine Arts, Cambodia, Authority for Protection and Management of Angkor and the Region of Siem Reap (APSARA)  Office: Yoshiaki Ishizawa, Makiko Kubo, Lao Kim Leang Coordinators: U Nyunt Han, Ang Choulean, Yoshiaki Ishizawa Participants: [Cambodia] Chhean Ratha, Tin Tina, Mao Sokny [Laos] Khamphoumy Manla, Phouthong Phongxayphonh, Siliphoum Somnuek, Khamleuan Aphaiyavong [Myanmar] Arkar Aye, Yan Aung [Thailand] Surayoot Wiriyadamrong, Hiengkaew Pongthorn [Vietnam] Nguyen Hoangbach Linh

Note 1: Lectures, arrangement and cleaning of artifacts have been done at the Sophia Asia Center for Research and Human Development from 1996 (The name was renamed from "Angkor Study Office" in October 2002).

Note 2: Intensive Courses at the Royal University of Fine Arts were held for approximately 11 times (total number of times) on 16 subjects in seven years from March 1991 to May 1997. Approximately 59 instructors (total number of people) gave lectures to approximately 1500 students (total number of people). Additionally an instructor gave 4 lectures on 1 subject to 136 students (total number of people) from March 2014 to January 2015.

Note 3: Field Trainings at Angkor Historical Sites have been held for 51 times in 24 years from March 1991 to September 2015 by 380 instructors (total number of people) to 529 students (total number of people).

**កិច្ចការរបស់បេសកកម្មសុហ្វីយ៉ា នៅប្រទេសកម្ពុជា  
ចាប់ពីឆ្នាំ១៩៩១ ដល់ឆ្នាំ២០១៥**

កាលបរិច្ឆេទ	ចំនួននិស្សិត	បេសកកម្មសុហ្វីយ៉ា
<b>លើកទី១</b>	<b>២៥នាក់</b>	<b>ផ្អាកបង្រៀន៖ ១២-១៧ ខែមីនា ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី)</b>
១២-២៥ ខែមីនា ឆ្នាំ១៩៩១	ស្ថាបត្យកម្ម ១៥ បុរាណវិទ្យា ១០	[ប្រវត្តិសាស្ត្រ]- ប្រវត្តិសាស្ត្រអង្គរ Yoshiaki Ishizawa [អភិរក្សបេតិកភណ្ឌ]- មូលដ្ឋាននៃការសិក្សាលើ John Sanday (W.M.F) វិជ្ជាអភិរក្ស - ការសិក្សាអំពីរបៀបចុះបញ្ជី Yasushi Kono [ស្ថាបត្យកម្ម]- ស្រាវជ្រាវប្រាសាទ Yoshiaki Fujiki [បុរាណវិទ្យា] - កំណាយបុរាណវិទ្យា Kunikazu Ueno [ភូគម្ភសាស្ត្រ]- ស្រាវជ្រាវភូគម្ភសាស្ត្រនៃប្រាសាទ Tomio Moriai
	<b>៣០នាក់</b>	<b>១៨-២៥ ខែមីនា ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី)</b>
	ក្រុម ក ៨នាក់ ក្រុម ខ ៩នាក់ ក្រុម គ ៧នាក់ ក្រុម ឃ ៦នាក់	[ស្ថាបត្យកម្ម] - ក្រុមគ្រឹះនិងស្ថាបត្យកម្ម ( អង្គរវត្ត) John Sanday ក្រុមស្ថាបត្យកម្មទូទៅ ( បន្ទាយក្តី) Yoshiaki Fujiki [បុរាណវិទ្យា] - ក្រុមបុរាណវិទ្យា ( បន្ទាយក្តី) Kunikazu Ueno [ភូគម្ភសាស្ត្រ] - ក្រុមភូគម្ភសាស្ត្រ ( បាយ័ន, ព្រះខ័ន) Tomio Moriai Richard Engelhard (UNESCO)
<b>លើកទី២</b>	<b>១៦០នាក់</b>	<b>ផ្អាកបង្រៀន៖ ១៣,១៤, ២៨ ខែសីហា ( សាកលវិទ្យាល័យភូមិន្ទវិចិត្រសិល្បៈ)</b>
១៣-២៨ ខែសីហា ឆ្នាំ១៩៩១	ស្ថាបត្យកម្ម ៦០ សូន្យរូប ៥០ បុរាណវិទ្យា ៥០	[ប្រវត្តិសាស្ត្រ]- ប្រវត្តិសាស្ត្រអង្គរ Yoshiaki Ishizawa [ស្ថាបត្យកម្ម] - គោលការណ៍ថែរក្សាសម្បត្តិវប្បធម៌ Nobuo Ito និងការថែរក្សាប្រាសាទ - ស្ថាបត្យកម្មនៃប្រទេសជិតខាងអាណាចក្រខ្មែរ Yutaka Shigeeda និងស្ថាបត្យកម្មអាណាចក្រចម្ប៉ា [បុរាណវិទ្យា] - មូលដ្ឋានស្រាវជ្រាវបុរាណវិទ្យា Yoshiharu Nakao [បរិស្ថាន] - ការវិវឌ្ឍន៍នៃសង្គមវប្បធម៌ ឡាវ គីមលាង និងការថែរក្សាបរិស្ថាននៅតំបន់អង្គរ [សំណង់ស៊ីវិល] - ប្រាសាទអង្គរជាមួយវិធានប្រវត្តិសាស្ត្រ Shunsuke Baba និងឧទ្យាន/ រំណាស់អំពីយន្តការសំណង់ [ធារាសាស្ត្រ និងធនធានទឹក] - បញ្ហាបរិស្ថាននៅក្នុងប្រទេស Asaichi Miyakawa កំពុងអភិវឌ្ឍន៍និងគម្រោងអភិវឌ្ឍន៍របស់រដ្ឋ [សំណង់ប្រាសាទ] - ទស្សនៈនិងវិធីសាស្ត្រសិក្សាសំណង់ប្រាសាទ Nobuo Endo [ប្រវត្តិវប្បធម៌] - ទ្រឹស្តីទំនាក់ទំនងវប្បធម៌ Yoshiharu Tsuboi [វត្តវិទ្យា] - ប្រព័ន្ធរូបវិទ្យា និងព្រៃអង្គរ Mitsuyasu Hasebe
	<b>១០នាក់</b>	<b>១៩-២៦ ខែសីហា ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី)</b>
	ស្ថាបត្យកម្ម ៥ បុរាណវិទ្យា ៥ អ្នកស្ម័គ្រចិត្ត ២	[ស្ថាបត្យកម្ម] - Yoshiaki Ishizawa, Shunsuke Baba, Yoshiharu Nakao, Yutaka Shigeeda, Nobuo Endo [បុរាណវិទ្យា] - ឡាវ គីមលាង, Mitsuyasu Hasebe, Bora Tamimoto,

		Naruko Matsui
<b>លើកទី៣</b>	<b>៣៣២នាក់</b>	<b>ថ្នាក់បង្រៀន៖ ១០-១៤ ខែមីនា ( សាកលវិទ្យាល័យភូមិន្ទវិចិត្រសិល្បៈ)</b>
១០-២១ ខែមីនា ឆ្នាំ១៩៩២		<p>[ប្រវត្តិសាស្ត្រ] - ប្រវត្តិសាស្ត្របុរាណនៃប្រទេសកម្ពុជា Yoshiaki Ishizawa          - ប្រវត្តិសាស្ត្រមុនសម័យទំនើបនៃប្រទេសកម្ពុជា Alain Forest          - សិលាចារឹកខ្មែរ Claude Jacques (EPHE)          - មូលដ្ឋានរៀនសិលាចារឹកខ្មែរ Claude Jacques</p> <p>[ស្ថាបត្យកម្ម] - ការថែរក្សានិងជួសជុលជាលក្ខណៈវិទ្យាសាស្ត្រ Yutaka Shigeeda          - មូលដ្ឋានស្ថាបត្យកម្ម Yutaka Shigeeda</p> <p>[បុរាណវិទ្យា] - សារមន្ទីរវិទ្យា Yoshiharu Nakao          - មូលដ្ឋានរៀនសារមន្ទីរវិទ្យា Yoshiharu Nakao          - បុរាណវិទ្យា Kunikazu Ueno</p> <p>[ភូតម្ភសាស្ត្រ] - ភូតម្ភសាស្ត្រ TomioMoriai          - មេរៀនពិសេសអំពីភូតម្ភសាស្ត្រ TomioMoriai</p> <p>[បរិស្ថាន] - វិស្វកម្មបរិស្ថាន ឡាវ គីមលាង</p> <p>[វិស្វកម្មនៃរមណីយដ្ឋានប្រវត្តិសាស្ត្រ] - Nobuo Endo</p> <p>[សង្គមវិទ្យា] - ទ្រឹស្តីបរិស្ថានវប្បធម៌ Yoshiharu Tsuboi          - វិធីសាស្ត្រថែរក្សាបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌ Miyuki Sakai          - មូលដ្ឋាននៃគោលនយោបាយវប្បធម៌ Richard Engelhard</p> <p>[រុក្ខវិទ្យា] - រុក្ខវិទ្យា Jun Yokoyama</p>
	<b>២០នាក់</b>	<b>កម្មសិក្សា៖ ១៦-២១ ខែមីនា ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី)</b>
	ស្ថាបត្យកម្ម ១០ បុរាណវិទ្យា ១០	<p>[ស្ថាបត្យកម្ម] Yutaka Shigeeda          [បុរាណវិទ្យា] Yoshiharu Nakao, Kunikazu Ueno          [ភូតម្ភសាស្ត្រ] Tomio Moriai</p>
<b>លើកទី៤</b>	<b>៣៣២នាក់</b>	<b>ថ្នាក់បង្រៀន៖ ១០-១៤ ខែសីហា ( សាកលវិទ្យាល័យភូមិន្ទវិចិត្រសិល្បៈ)</b>
១០-២៦ ខែសីហា ឆ្នាំ១៩៩២	ស្ថាបត្យកម្ម ១៨១ បុរាណវិទ្យា ១៥១	<p>[ប្រវត្តិសាស្ត្រ] - ប្រវត្តិសាស្ត្រខ្មែរ Yoshiaki Ishizawa          - សិលាចារឹកអង្គរ Yoshiaki Ishizawa</p> <p>[ការថែរក្សាវប្បធម៌បេតិកភណ្ឌជាលក្ខណៈវិទ្យាសាស្ត្រ]          - ទ្រឹស្តីនិងការអនុវត្តនៃការថែរក្សាបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌ Nobuo Ito          - ការថែរក្សាវប្បធម៌បេតិកភណ្ឌជាលក្ខណៈវិទ្យាសាស្ត្រ ១ Nobuo Ito          - បេតិកភណ្ឌវប្បធម៌និងបច្ចេកវិទ្យា ១-២ Tsutomu Kimura          - អនុសាសន៍របស់យូណេស្កូ Richard Engelhard</p> <p>[ស្ថាបត្យកម្ម] - ស្ថាបត្យកម្ម Yutaka Shigeeda          - មូលដ្ឋាននៃគំនូរព្រាង Tsuyoshi Narita          - អនុវត្តគំនូរព្រាង Yutaka Shigeeda, Tsuyoshi Narita</p> <p>[បុរាណវិទ្យា] - បុរាណវិទ្យា ១-២ Hiroshi Sugiyama</p> <p>[ភូតម្ភសាស្ត្រ] - ភូតម្ភសាស្ត្រ ១-២ Shinji Tukawaki</p> <p>[ប្រវត្តិសាស្ត្រវប្បធម៌] - វប្បធម៌ឥណ្ឌូចិន ១-២ Yoshiharu Tsuboi</p> <p>[វិស្វកម្មនៃរមណីយដ្ឋានប្រវត្តិសាស្ត្រ ១-២] Nobuo Endo</p> <p>[វិទ្យាសាស្ត្របរិស្ថាន]</p>

		<ul style="list-style-type: none"> <li>- ធម្មជាតិនិងបរិស្ថាននៅប្រទេសកម្ពុជា</li> <li>- ការវាយតម្លៃលើការអភិវឌ្ឍន៍និងបរិស្ថាន</li> </ul>	<p>ឡាវ គីមលាង</p> <p>ឡាវ គីមលាង</p>
	២០នាក់	កម្មសិក្សា៖ ១៥-២៦ ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី)	
	ស្ថាបត្យកម្ម ១០ បុរាណវិទ្យា ១០	[ស្ថាបត្យកម្ម] [បុរាណវិទ្យា]	Yutaka Shigeeda Hiroshi Sugiyama
<b>លើកទី៥</b>	១៥០នាក់	ថ្នាក់បង្រៀន៖ ១៥ ខែមីនា ( សាកលវិទ្យាល័យភូមិន្ទវិចិត្រសិល្បៈ)	
១-៥ ខែមីនា ឆ្នាំ១៩៩៣	ស្ថាបត្យកម្ម ៨០ បុរាណវិទ្យា ៧០	[ប្រវត្តិសាស្ត្រ] - [បុរាណវិទ្យា] [ស្ថាបត្យកម្ម]	Yoshiaki Ishizawa Kunikazu Ueno Yutaka Shigeeda
<b>លើកទី៦</b>	២០នាក់	សិក្ខាសាលាលើកទី១៖ សាកលវិទ្យាល័យភូមិន្ទវិចិត្រសិល្បៈ	
១៨-២៨ ខែតុលា ឆ្នាំ១៩៩៣	បុរាណវិទ្យា ២០	[បង្កើតគម្រោងអភិវឌ្ឍន៍សង្គមសម្រាប់តំបន់អង្គរតាមរយៈវិស្វកម្មនៃរដ្ឋឈើដ្ឋាន ប្រវត្តិសាស្ត្រ] -	Nobuo Endo
<b>លើកទី៧</b>	២០នាក់	សិក្ខាសាលាលើកទី២៖ សាកលវិទ្យាល័យភូមិន្ទវិចិត្រសិល្បៈ	
១៤-១៨ ខែកម្ភុៈ ឆ្នាំ១៩៩៤	បុរាណវិទ្យា ២០	[បង្កើតគម្រោងអភិវឌ្ឍន៍សង្គមសម្រាប់តំបន់អង្គរតាមរយៈវិស្វកម្មនៃរដ្ឋឈើដ្ឋាន ប្រវត្តិសាស្ត្រ] -	Nobuo Endo
<b>លើកទី៨</b>	៧៦នាក់	ថ្នាក់បង្រៀន៖ ៧-១២ ខែមីនា ( សាកលវិទ្យាល័យភូមិន្ទវិចិត្រសិល្បៈ)	
៧-២២ ខែមីនា ឆ្នាំ១៩៩៤	បុរាណវិទ្យា ៧៦	[ប្រវត្តិសាស្ត្រ] - ប្រវត្តិសាស្ត្រអង្គរ [បុរាណវិទ្យា] - មូលដ្ឋានបុរាណវិទ្យា - សារមន្ទីរវិទ្យា - បុរាណវិទ្យា - អនុវត្តបុរាណវិទ្យា [ភូគម្ភសាស្ត្រ] - ភូគម្ភសាស្ត្រទូទៅ [ប្រវត្តិសាស្ត្រវប្បធម៌] - វប្បធម៌ឥណ្ឌូចិន	Yoshiaki Ishizawa Yoshiharu Nakao Yoshiharu Nakao Kunikazu Ueno Kunikazu Ueno Shinji Tsukawaki Yoshiharu Tsuboi
	១០នាក់	កម្មសិក្សា៖ ១៣-២២ ខែមីនា ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី)	
	បុរាណវិទ្យា ១០	[បុរាណវិទ្យា] - Kunikazu Ueno, Hiroshi Sugiyama, Yoshiharu Nakao, Yukio Fujita	
<b>លើកទី៩</b>	៧នាក់	កម្មសិក្សា៖ ៣១ ខែកក្កដា - ២២ ខែសីហា ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី)	
៣១ ខែកក្កដា - ២២ ខែសីហា ឆ្នាំ១៩៩៤	បុរាណវិទ្យា ៧	[ប្រវត្តិសាស្ត្រ] - Yoshiaki Ishizawa [បុរាណវិទ្យា] - Yukio Fujita, Masako Marui	
<b>លើកទី១០</b>	១២នាក់	កម្មសិក្សា៖ ១៩-២៩ ខែធ្នូ ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី)	
១៩-២៩ ខែធ្នូ ឆ្នាំ១៩៩៤	បុរាណវិទ្យា ៦ ស្ថាបត្យកម្ម ៦	[ប្រវត្តិសាស្ត្រ] - Yoshiaki Ishizawa [ស្ថាបត្យកម្ម] - Masao Katagiri, Yasuyuki Furuya ma	

		[បុរាណវិទ្យា] – Kunikazu Ueno, Masako Marui
លើកទី១១ ១០ ខែកុម្ភៈ - ៣១ ខែមីនា ឆ្នាំ១៩៩៥	១៩០នាក់	ថ្នាក់បង្រៀន៖ ១០ ខែកុម្ភៈ - ៩ ខែមីនា (សាកលវិទ្យាល័យភូមិន្ទវិចិត្រសិល្បៈ)
	បុរាណវិទ្យា ៧០ ស្ថាបត្យកម្ម ១២០	[ស្ថាបត្យកម្ម] - Yutaka Shigeeda [សង្ខេបស្ថាបត្យកម្ម] - Yutaka Shigeeda
	២២នាក់	កម្មសិក្សា៖ ១០-៣១ ខែមីនា (សៀមរាប, បន្ទាយក្តី)
	បុរាណវិទ្យា ១០ ស្ថាបត្យកម្ម ១២	[ប្រវត្តិសាស្ត្រ] - Yoshiaki Ishizawa [ស្ថាបត្យកម្ម] – Masao Katagiri, Yasuyuki Furuyama [បុរាណវិទ្យា] – Kunikazu Ueno, Nobuhiro Matsuo, Masako Marui
លើកទី១២ ១-១៧ ខែសីហា ឆ្នាំ១៩៩៥	១០នាក់	កម្មសិក្សា៖ (សៀមរាប, បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត)
	បុរាណវិទ្យា ៥ ស្ថាបត្យកម្ម ៥	[ប្រវត្តិសាស្ត្រ] - Yoshiaki Ishizawa [ស្ថាបត្យកម្ម] – Masao Katagiri, Yutaka Shigeeda, Yasuyuki Furu yama, Futoshi Jingu [បុរាណវិទ្យា] – Kunikazu Ueno, Yoshiharu Nakao, Nobuhiro Matsuo, Masako Marui
លើកទី១៣ ២០-២៣ ខែមីនា ឆ្នាំ១៩៩៦	១០នាក់	កម្មសិក្សា៖ (សៀមរាប, បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត)
	បុរាណវិទ្យា ៥ ស្ថាបត្យកម្ម ៥	[ប្រវត្តិសាស្ត្រ] - Yoshiaki Ish izawa [ស្ថាបត្យកម្ម] – Masao Katagiri, Yutaka Shigeeda, Yasuyuki Furu yama, Byungha Choi [បុរាណវិទ្យា] – Yoshiharu Nakao, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui
លើកទី១៤ ២ ខែមីនា- ២៣ ខែឧសភា ឆ្នាំ១៩៩៦	៦៣នាក់	ថ្នាក់បង្រៀន៖ (សាកលវិទ្យាល័យភូមិន្ទវិចិត្រសិល្បៈ)
	បុរាណវិទ្យា ឆ្នាំទី១ ៣៦ ឆ្នាំទី៤ ២៦	[វិស្វកម្មនៃរចនាសម្ព័ន្ធនៃប្រវត្តិសាស្ត្រ] – Nobuo Endo, Masako Marui
លើកទី១៥ ១៥ ខែកក្កដា- ៣១ ខែសីហា ឆ្នាំ១៩៩៦	១០នាក់	កម្មសិក្សា៖ (សៀមរាប, បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត)
	បុរាណវិទ្យា ៥ ស្ថាបត្យកម្ម ៥	[ប្រវត្តិសាស្ត្រ] - Yoshiaki Ishizawa [ស្ថាបត្យកម្ម] – Masao Katagiri, Yutaka Shigeeda, Yasuyuki Furuyama, Byungha Choi [បុរាណវិទ្យា] – Yoshiharu Nakao, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui
លើកទី១៦ ១៧ ខែវិច្ឆិកា- ២៩ ខែធ្នូ ឆ្នាំ១៩៩៦	១០នាក់	កម្មសិក្សា៖ (សៀមរាប, បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត)
	បុរាណវិទ្យា ៥ ស្ថាបត្យកម្ម ៥	[ប្រវត្តិសាស្ត្រ] - Yoshiaki Ishizawa [ស្ថាបត្យកម្ម] – Masao Katagiri, Yutaka Shigeeda, Yasuyuki Furuyama, Byungha Choi [បុរាណវិទ្យា] – Kunikazu Ueno, Masako Marui
លើកទី១៧ ២៨ ខែកុម្ភៈ- ៣០ ខែមីនា ឆ្នាំ១៩៩៧	១១នាក់	កម្មសិក្សា៖ (សៀមរាប, បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត)
	បុរាណវិទ្យា ៦ ស្ថាបត្យកម្ម ៥	[ប្រវត្តិសាស្ត្រ] - Yoshiaki Ishizawa [ស្ថាបត្យកម្ម] – Masao Katagiri, Yutaka Shigeeda, Byungha Choi [បុរាណវិទ្យា] – Yoshiharu Nakao, Yasuharu Miyamoto



លើកទី១៤ ២៥ ខែកុម្ភៈ- ២៣ ខែឧសភា ឆ្នាំ១៩៩៧	១៣៣ នាក់	ថ្នាក់បង្រៀន៖ ( សាកលវិទ្យាល័យភូមិន្ទវិចិត្រសិល្បៈ ) [គ្រប់គ្រងបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌] - Nobuo Endo, Masako Marui
លើកទី១៩ ១៥ ខែវិច្ឆិកា- ៣០ ខែធ្នូ ឆ្នាំ១៩៩៧	៩នាក់	កម្មសិក្សា៖ ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត ) [ប្រវត្តិសាស្ត្រ] - Yoshiaki Ishizawa [ស្ថាបត្យកម្ម] – Masao Katagiri, Byungha Choi [ចុះបញ្ជី] – Kunikazu Ueno, Masako Marui
លើកទី២០ ២០ ខែកុម្ភៈ- ១០ ខែមេសា ឆ្នាំ១៩៩៨	៩នាក់	កម្មសិក្សា៖ ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត ) [ប្រវត្តិសាស្ត្រ] - Yoshiaki Ishizawa [ស្ថាបត្យកម្ម] – Masao Katagiri, Byungha Choi [បុរាណវិទ្យា] – Yoshiharu Nakao, Masako Marui
លើកទី២១ ២០ ខែសីហា- ១៦ ខែកញ្ញា ឆ្នាំ១៩៩៨	៩នាក់ ( បុគ្គលិក )	កម្មសិក្សា៖ ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត, ស្ថានីយ៍ឡូតានី ) [ស្ថាបត្យកម្ម] – Masao Katagiri, Byungha Choi [បុរាណវិទ្យា] – Kunikazu Ueno, Masako Marui [ឡូតានី] – Yoji Aoyagi, Tatsuo Sasaki, Takenori Nogami, Kazuhiko Tanaka, Masako Marui, Tokiko Sumida
លើកទី២២ ២០ ខែតុលា- ៣០ ខែធ្នូ ឆ្នាំ១៩៩៨	៧នាក់ ( បុគ្គលិក )	កម្មសិក្សា៖ ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត ) [ប្រវត្តិសាស្ត្រ] - Yoshiaki Ishizawa [ស្ថាបត្យកម្ម] – Masao Katagiri, Byungha Choi, Satoru Miwa [បុរាណវិទ្យា] – Kunikazu Ueno, Masako Marui
លើកទី២៣ ១០ ខែមករា- ៣១ ខែមីនា ឆ្នាំ១៩៩៩	៧នាក់ ( បុគ្គលិក )	កម្មសិក្សា៖ ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត, ស្ថានីយ៍ឡូតានី ) [ស្ថាបត្យកម្ម] – Masao Katagiri, Byungha Choi, Satoru Miwa [បុរាណវិទ្យា] – Yoshiharu Nakao, Masako Marui, Hisao Arah [ឡូតានី] – Yoji Aoyagi, Tatsuo Sasaki, Takenori Nogami, Kazuhiko Tanaka, Masako Marui, Tokiko Sumida
លើកទី២៤ ២០ ខែមិថុនា- ១០ ខែកញ្ញា ឆ្នាំ១៩៩៩	៦នាក់ ( បុគ្គលិក )	កម្មសិក្សា៖ ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត, ស្ថានីយ៍ឡូតានី ) [ប្រវត្តិសាស្ត្រ] – Yoshiaki Ishizawa [ស្ថាបត្យកម្ម] – Masao Katagiri, Byungha Choi, Satoru Miwa [បុរាណវិទ្យា] – Kunikazu Ueno, Masako Marui, Hisao Arah [ឡូតានី] – Yoji Aoyagi, Tatsuo Sasaki, Takenori Nogami, Kazuhiko Tanaka, Masako Marui, Tokiko Sumida
លើកទី២៥ ១៥ ខែធ្នូ- ៣១ ខែធ្នូ ឆ្នាំ១៩៩៩	៩នាក់ ( បុគ្គលិក )	កម្មសិក្សា៖ ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត ) [ប្រវត្តិសាស្ត្រ] - Yoshiaki Ishizawa [ស្ថាបត្យកម្ម] – Masao Katagiri, Satoru Miwa [បុរាណវិទ្យា] – Yasuharu Miyamoto, Tetsuo Hishida, Masako Marui, Hisao Arah

<p><u>លើកទី២៦</u> ១០ ខែមីនា- ២៥ ខែមីនា ឆ្នាំ២០០០</p>	<p>៨នាក់ ( បុគ្គលិក) បុរាណវិទ្យា ៤ ស្ថាបត្យកម្ម ៤</p>	<p>កម្មសិក្សា៖ ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត) [ប្រវត្តិសាស្ត្រ] - Yoshiaki Ishizawa [ស្ថាបត្យកម្ម] – Masao Katagiri, Satoru Miwa [បុរាណវិទ្យា] – Kunikazu Ueno, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Hisao Arah</p>
<p><u>លើកទី២៧</u> ១០ ខែសីហា- ២៥ ខែសីហា ឆ្នាំ២០០០</p>	<p>៩នាក់ ( បុគ្គលិក) បុរាណវិទ្យា ៥ ស្ថាបត្យកម្ម ៤</p>	<p>កម្មសិក្សា៖ ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត, ស្ថានីយ៍ឡូតានី) [ប្រវត្តិសាស្ត្រ] – Yoshiaki Ishizawa [ស្ថាបត្យកម្ម] – Masao Katagiri, Satoru Miwa [បុរាណវិទ្យា] – Yasuharu Miyamoto, Tetsuo Hishida, Masako Marui, Hisao Arah [ឡូតានី] – Yoji Aoyagi, Tatsuo Sasaki, Takenori Nogami, Kazuhiko Tanaka, Masako Marui, Tokiko Sumida</p>
<p><u>លើកទី២៨</u> ១០ ខែធ្នូ- ២៥ ខែធ្នូ ឆ្នាំ២០០០</p>	<p>៩នាក់ ( បុគ្គលិក) បុរាណវិទ្យា ៥ ស្ថាបត្យកម្ម ៤</p>	<p>កម្មសិក្សា៖ ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត) [ប្រវត្តិសាស្ត្រ] - Yoshiaki Ishizawa [ស្ថាបត្យកម្ម] – Masao Katagiri, Satoru Miwa, Masatoki Takahashi [បុរាណវិទ្យា] – Kunikazu Ueno, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Hisao Arah</p>
<p><u>លើកទី២៩</u> ៥ ខែមីនា- ២៥ ខែមីនា ឆ្នាំ២០០១</p>	<p>១៥នាក់ បុរាណវិទ្យា ៥ ស្ថាបត្យកម្ម ១០</p>	<p>កម្មសិក្សា៖ ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត) [ស្ថាបត្យកម្ម] – Masao Katagiri, Satoru Miwa, Masatoki Takahashi [បុរាណវិទ្យា] – Kunikazu Ueno, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Hisao Arah</p>
<p><u>លើកទី៣០</u> ១ ខែសីហា- ៧ ខែកញ្ញា ឆ្នាំ២០០១</p>	<p>១២នាក់ បុរាណវិទ្យា ៧ ស្ថាបត្យកម្ម ៥</p>	<p>កម្មសិក្សា៖ ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត, ស្ថានីយ៍ឡូតានី) [ស្ថាបត្យកម្ម] – Masao Katagiri, Satoru Miwa [ឡូតានី] – Yoji Aoyagi, Tatsuo Sasaki, Takenori Nogami, Kazuhiko Tanaka, Masako Marui, Tokiko Sumida [បុរាណវិទ្យា] – Kunikazu Ueno, Tetsuo Hishida, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Hisao Arah</p>
<p><u>លើកទី៣១</u> ១ ខែធ្នូ- ១៥ ខែធ្នូ ឆ្នាំ២០០១</p>	<p>៧នាក់ បុរាណវិទ្យា ៧</p>	<p>កម្មសិក្សា៖ ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី) [បុរាណវិទ្យា] – Tetsuo Hishida, Masako Marui</p>
<p><u>លើកទី៣២</u> ១ ខែសីហា- ៧ ខែកញ្ញា ឆ្នាំ២០០២</p>	<p>១៣នាក់ បុរាណវិទ្យា ៧ ស្ថាបត្យកម្ម ៦</p>	<p>កម្មសិក្សា៖ ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត, ស្ថានីយ៍ឡូតានី) [ស្ថាបត្យកម្ម] – Masao Katagiri, Satoru Miwa, Yoko Kojima [ឡូតានី] – Yoji Aoyagi, Tatsuo Sasaki, Takenori Nogami, Kazuhiko Tanaka, Masako Marui, Yukitsugu Tabata, Tokiko Sumida [បុរាណវិទ្យា] – Kunikazu Ueno, Tetsuo Hishida, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Hisao Arah (ស្រាវជ្រាវបន្ថែមព្រះពុទ្ធរូបបុរាណ)</p>
<p><u>លើកទី៣៣</u></p>	<p>៣នាក់</p>	<p>កម្មសិក្សា៖ ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត)</p>

១០ ខែវិច្ឆិកា ឆ្នាំ២០០២- ១០ ខែមករា ឆ្នាំ២០០៣	បុរាណវិទ្យា ៣	[ស្ថាបត្យកម្ម] – Masao Katagiri, Satoru Miwa, Yoko Kojima [បុរាណវិទ្យា] – Tetsuo Hishida, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Yukitsugu Tabata
លើកទី៣៤ ១០ ខែសីហា- ៣០ ខែសីហា ឆ្នាំ២០០៣	១៤នាក់ បុរាណវិទ្យា ៨ ស្ថាបត្យកម្ម ៦	កម្មសិក្សា៖ ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត) [ស្ថាបត្យកម្ម] – Masao Katagiri, Satoru Miwa [បុរាណវិទ្យា] – Kunikazu Ueno, Tetsuo Hishida, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Yukitsugu Tabata, Hisao Arah (ស្រាវជ្រាវបន្ថែមព្រះពុទ្ធរូបបុរាណ)
លើកទី៣៥ ១៨ ខែធ្នូ- ២៩ ខែធ្នូ ឆ្នាំ២០០៣	៣នាក់ បុរាណវិទ្យា ៣	កម្មសិក្សា៖ ( សៀមរាប, បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត) [បុរាណវិទ្យា] – Kunikazu Ueno, Masako Marui ( និស្សិត២នាក់ និងបុគ្គលិក១នាក់)
លើកទី៣៦ ១៦ ខែសីហា- ៣១ ខែសីហា ឆ្នាំ២០០៤	៩នាក់ បុរាណវិទ្យា ៤ ស្ថាបត្យកម្ម ៥	កម្មសិក្សា៖ ( បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត) [ស្ថាបត្យកម្ម] – Masao Katagiri, Satoru Miwa [បុរាណវិទ្យា] – Kunikazu Ueno, Tetsuo Hishida, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Yukitsugu Tabata ( និស្សិតបុរាណា៣នាក់ និងបុគ្គលិក១នាក់) ថ្នាក់បង្រៀនពិសេស៖ ពិចារណាលើការបាត់បង់សំណង់តាមរយៈតីកតាងបុរាណវិទ្យា (Kunikazu Ueno, ២៨ ខែសីហា នៅសាកលវិទ្យាល័យកូមីនូរិចិត្រសិល្បៈ)
លើកទី៣៧ ១៣ ខែសីហា- ១៣ ខែកញ្ញា ឆ្នាំ២០០៥	១៥នាក់ បុរាណវិទ្យា ១០ ស្ថាបត្យកម្ម ៥	កម្មសិក្សា៖ ( បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត) [ស្ថាបត្យកម្ម] – Masao Katagiri, Satoru Miwa [បុរាណវិទ្យា] – Kunikazu Ueno, Tetsuo Hishida, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Yukitsugu Tabata ( និស្សិតបុរាណា៣នាក់ និងបុគ្គលិក១នាក់)
លើកទី៣៨ ១៦ ខែសីហា- ៤ ខែកញ្ញា ឆ្នាំ២០០៦	១៥នាក់ បុរាណវិទ្យា ១០ ស្ថាបត្យកម្ម ៥	កម្មសិក្សា៖ ( បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត) [ស្រាវជ្រាវអំពីខ្មែរ] – Yoshiaki Ishizawa, លី វណ្ណា, កែវ គីណាល់ [ស្រាវជ្រាវអំពីបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌] – Yoshiaki Ishizawa, Masako Marui, ឯក ប៉ុនថា [ស្ថាបត្យកម្ម] – Satoru Miwa, ម៉ៅ សុនី [បុរាណវិទ្យា] – Kunikazu Ueno, Tetsuo Hishida, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Yukitsugu Tabata, ជឿន រុទ្ធី [រុក្ខវិទ្យា] – Jun Yokoyama
លើកទី៣៩ ២១ ខែកុម្ភៈ- ៧ ខែមីនា ឆ្នាំ២០០៧	១៥នាក់ បុរាណវិទ្យា ១០ ស្ថាបត្យកម្ម ៥	កម្មសិក្សា៖ ( បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត) [ស្រាវជ្រាវអំពីបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌] – Yoshiaki Ishizawa, Shigeo Aoki, Akiko Tashiro, Shinji Tsukawaki [ស្ថាបត្យកម្ម] – Satoru Miwa, ម៉ៅ សុនី [បុរាណវិទ្យា] – Masako Marui, Yukitsugu Tabata, ជឿន រុទ្ធី [រុក្ខវិទ្យា] – Jun Yokoyama

<p><b>លើកទី៤០</b> ១៣ ខែសីហា- ៩ ខែកញ្ញា ឆ្នាំ២០០៧</p>	<p>២១នាក់ បុរាណវិទ្យា ១០ ស្ថាបត្យកម្ម ៥ និស្សិតសុហ្វីយ៉ា ៦</p>	<p>កម្មសិក្សា៖ ( បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត) [ស្រាវជ្រាវអំពីខ្មែរ] – Yoshiaki Ishizawa, ទិន ទីណា, កែវ គីណាល់ [ស្រាវជ្រាវអំពីបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌] – Yoshiaki Ishizawa, Shigeo Aoki, Akiko Tashiro, Shinji Tsukawaki, ទិន ទីណា, ថ្លាង សុខឿន, Noboru Goto [ស្ថាបត្យកម្ម] – Satoru Miwa, ម៉ៅ សុនី [បុរាណវិទ្យា] – Kunikazu Ueno, Tetsuo Hishida, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Yukitsugu Tabata, ទិន ទីណា, ជឿន រុទ្ធី [រុក្ខវិទ្យា] – Jun Yokoyama</p>
<p><b>លើកទី៤១</b> ១០ ខែសីហា- ១៥ ខែកញ្ញា ឆ្នាំ២០០៨</p>	<p>១៥នាក់ បុរាណវិទ្យា ១០ ស្ថាបត្យកម្ម ៥ និស្សិតសុហ្វីយ៉ា ៥</p>	<p>កម្មសិក្សា៖ ( បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត) [ស្រាវជ្រាវអំពីខ្មែរ] – Yoshiaki Ishizawa, Masako Marui, Noboru Goto [ស្រាវជ្រាវអំពីបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌] – Masako Marui, Nobuo Endo, Shinichi Shimizu, Akiko Tashiro [ស្ថាបត្យកម្ម] – Satoru Miwa, ម៉ៅ សុនី [បុរាណវិទ្យា] – Kunikazu Ueno, Tetsuo Hishida, Yasuharu Miyamoto, Masako Marui, Yukitsugu Tabata, ទិន ទីណា, ជឿន រុទ្ធី, ភិន ភក្តី [រុក្ខវិទ្យា] – Jun Yokoyama [អប់រំបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌] – Masako Marui, Makiko Kubo - លើកទី១៖ “អប់រំបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌សម្រាប់អ្នករស់នៅតំបន់អង្គរ” ( នៅថ្ងៃទី២៦ ខែកុម្ភៈ អ្នកភូមិរហាលចំនួន១៤០នាក់បានមកចូលរួមក្នុងកម្មវិធី ដែលរៀបចំនៅបន្ទាយក្តី, ស្ថានហាលចូលអង្គរវត្ត និងសារមន្ទីរព្រះនរោត្តម សីហានុ-អង្គរ) - លើកទី២៖ “អប់រំបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌សម្រាប់អ្នករស់នៅតំបន់អង្គរ” ( នៅថ្ងៃទី៣០ ខែសីហា អ្នកភូមិជ្រៀវចំនួន៦០នាក់បានមកចូលរួមក្នុងកម្មវិធី ដែលរៀបចំនៅបន្ទាយក្តី, ស្ថានហាលចូលអង្គរវត្ត និងសារមន្ទីរព្រះនរោត្តម សីហានុ-អង្គរ)</p>
<p><b>លើកទី៤២</b> ១៤ ខែមីនា- ១៤ ខែមីនា ឆ្នាំ២០០៩</p>	<p>៨នាក់ បុគ្គលិក សារមន្ទីរព្រះនរោ ត្តម សីហានុ-អង្គរ ៨នាក់</p>	<p>កម្មសិក្សា៖ សារមន្ទីរព្រះនរោត្តម សីហានុ-អង្គរ [ប្រចាំបំរុង] – Yoshiharu Nakao</p>
<p><b>លើកទី៤៣</b> ៩ ខែសីហា- ៥ ខែកញ្ញា ឆ្នាំ២០០៩</p>	<p>២៣នាក់ បុរាណវិទ្យា ១៥ ស្ថាបត្យកម្ម ៥ និស្សិតសុហ្វីយ៉ា ៣</p>	<p>កម្មសិក្សា៖ ( បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត) [ស្រាវជ្រាវអំពីខ្មែរ] – Yoshiaki Ishizawa, Masako Marui, Noboru Goto, កែវ គីណាល់ [ស្រាវជ្រាវអំពីបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌] – Masako Marui, Shigeo Aoki, Akiko Tashiro [ស្ថាបត្យកម្ម] – Satoru Miwa, ម៉ៅ សុនី [បុរាណវិទ្យា] – Kunikazu Ueno, Tetsuo Hishida, Yasuharu Miyamoto,</p>

		<p>Masako Marui, Yukitsugu Tabata, ទិន ទីណា, សោម វិសុទ្ធ, ជឿន រុទ្ធី</p> <p>[រុក្ខវិទ្យា] – Jun Yokoyama</p> <p>[អប់រំបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌] – Masako Marui, Makiko Kubo</p> <p>- លើកទី៣៖ "អប់រំបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌សម្រាប់អ្នករស់នៅតំបន់អង្គរ"</p> <p>( នៅថ្ងៃទី២៦ ខែកុម្ភៈ សិស្សចំនួន៤១២នាក់និងគ្រូបង្រៀនចំនួន៣៤នាក់មកពីសាលាបឋមសិក្សាសាមគ្គីសហគមន៍បានមកចូលរួមក្នុងកម្មវិធីដែលរៀបចំនៅបន្ទាយក្តី និងសារមន្ទីរព្រះនរោត្តម សីហនុ-អង្គរ)</p>
លើកទី៤៤	៦នាក់	កម្មសិក្សា៖ ( បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត)
១២ ខែសីហា- ១១ ខែកញ្ញា ឆ្នាំ២០១០	បុរាណវិទ្យា ៤ ស្ថាបត្យកម្ម ២	<p>[ស្ថាបត្យកម្ម] – Satoru Miwa, ម៉ៅ សុនី</p> <p>[បុរាណវិទ្យា] – Yukitsugu Tabata, ឯក ប៉ុនថា, សេង ចាន់ថា, សោម វិសុទ្ធ, ជឿន រុទ្ធី</p> <p>[អប់រំបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌] – Chie Abe</p> <p>- លើកទី១៖ "កម្មវិធីអប់រំបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌អាស៊ី"</p> <p>( នៅថ្ងៃទី១៤, ២១, ២៨ ខែសីហា និងថ្ងៃទី៤ ខែកញ្ញា សិស្សចំនួន៤១២នាក់និងគ្រូបង្រៀនចំនួន៣៤នាក់មកពីសាលាបឋមសិក្សាក្រវាត់បានមកចូលរួមក្នុងកម្មវិធីដែលរៀបចំនៅបន្ទាយក្តី និងសារមន្ទីរព្រះនរោត្តម សីហនុ-អង្គរ)</p> <p>* កម្មវិធីរៀបអង្គរវត្តដោយប្រើដុំឈើតូចៗលើកទី១ នៅថ្ងៃទី១២ ខែកញ្ញា សិស្សនៅវិទ្យាល័យ Sophia Fukuoka បានចូលរួមនៅក្នុងកម្មវិធីយល់ដឹងអំពីតំបន់វប្បធម៌បេតិកភណ្ឌវប្បធម៌ដោយប្រើដុំឈើតូចៗចំនួន៣ម៉ឺនដុំរៀបជាប្រអង្គរវត្ត។</p>
លើកទី៤៥	៦នាក់	កម្មសិក្សា៖ បន្ទាយក្តី
២២ ខែធ្នូ-៣១ ខែធ្នូ ឆ្នាំ២០១០	បុរាណវិទ្យា ៤ ស្ថាបត្យកម្ម ២	<p>[ស្ថាបត្យកម្ម] – Satoru Miwa, ម៉ៅ សុនី, ជឹង ឆោមមុនី</p> <p>[បុរាណវិទ្យា] – Yukitsugu Tabata, ឯក ប៉ុនថា, ជេង ស៊ីថា, សេង ចាន់ថា, សោម វិសុទ្ធ, ជឿន រុទ្ធី</p>
លើកទី៤៦	១១នាក់	កម្មសិក្សា៖ បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត
៨ ខែសីហា- ១០ ខែកញ្ញា ឆ្នាំ២០១១	បុរាណវិទ្យា ៦ ស្ថាបត្យកម្ម ៥	<p>[ស្ថាបត្យកម្ម] – Satoru Miwa, ម៉ៅ សុនី, សំ ពៅ, ជឹង ឆោមមុនី</p> <p>[បុរាណវិទ្យា] – Yukitsugu Tabata, ឯក ប៉ុនថា, លី វណ្ណា, ជេង ស៊ីថា, ជឿន រុទ្ធី</p> <p>[អប់រំបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌] – Chie Abe</p> <p>[Remote-sensing (ការប្រមូលព័ត៌មានតាមរយៈផ្កាយរណប)] – Hiroyuki Kamei</p> <p>- លើកទី២៖ "កម្មវិធីអប់រំបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌អាស៊ី"</p> <p>( នៅថ្ងៃទី១៣, ២០, ២៧ ខែសីហា និងថ្ងៃទី៣, ១០ ខែកញ្ញា សិស្សចំនួន៥៩៦នាក់ និងគ្រូបង្រៀនចំនួន៣១នាក់មកពីសាលាបឋមសិក្សាចំនួន១១ នៅឃុំវត្តរុន ស្រុកបន្ទាយស្រី ជាមួយនិងនិស្សិតជប៉ុនចំនួន៥០នាក់បានមកចូលរួមក្នុងកម្មវិធីដែលរៀបចំនៅបន្ទាយក្តី និងសារមន្ទីរព្រះនរោត្តម សីហនុ-អង្គរ)</p> <p>* ថ្ងៃទី១៣ ខែកញ្ញា សហការជាមួយJQA ( ស្ថាប័នធានាគុណភាពជប៉ុន) បានរៀបចំកម្មវិធីអប់រំបរិស្ថានដល់សិស្សសាលាបឋមសិក្សាក្នុងតំបន់អង្គរ</p> <p>* កម្មវិធីរៀបអង្គរវត្តដោយប្រើដុំឈើតូចៗលើកទី២ ថ្ងៃទី២៥ មិថុនា កម្មវិធីរៀបចំនៅ "ថ្ងៃផ្លាស់ប្តូរនៃតំបន់រវាងគ្រូបង្រៀននៅក្នុង</p>

		<p>តំបន់" នៃអនុវិទ្យាល័យ Kanagawa Prefecture Zushi Numama</p> <p>* កម្មវិធីរៀបអង្គវត្តដោយប្រើដុំឈើតូចៗលើកទី៣</p> <p>ថ្ងៃទី២៩ ខែតុលា កម្មវិធីរៀបចំនៅវប្បធម៌នៃអនុវិទ្យាល័យ Takaido, Sugunami Ward, Tokyo</p>
លើកទី៤៧	១១នាក់	កម្មសិក្សា៖ បន្ទាយក្តី
២៤-៣០ ខែធ្នូ ឆ្នាំ២០១១	បុរាណវិទ្យា ៦ ស្ថាបត្យកម្ម ៥	<p>[ស្ថាបត្យកម្ម] – Satoru Miwa, ម៉ៅ សុនី, សំ ពៅ</p> <p>[បុរាណវិទ្យា] – Yukitsugu Tabata, ឯក ប៉ុនថា, លី វណ្ណា, ជឿន រុទ្ធី</p>
លើកទី៤៨	១៩នាក់	កម្មសិក្សា៖ បន្ទាយក្តី, អង្គវត្ត
៣ ខែសីហា-៨ ខែកញ្ញា ឆ្នាំ២០១២	បុរាណវិទ្យា ១៣ ស្ថាបត្យកម្ម ៦	<p>[ស្ថាបត្យកម្ម] – Satoru Miwa, ម៉ៅ សុនី, សំ ពៅ, ជឹង ឆោមមុនី, ឈាន រដ្ឋា</p> <p>[បុរាណវិទ្យា] – Yukitsugu Tabata, ឯក ប៉ុនថា, លី វណ្ណា, ជេង ស៊ីថា, ញឹម សុធាវិន្ទ, ជឿន រុទ្ធី</p> <p>[អប់រំបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌] – Chie Abe</p> <p>- លើកទី៣៖ "កម្មវិធីអប់រំបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌អាស៊ី"</p> <p>( សិស្សចំនួន៣៨៣នាក់ និងគ្រូបង្រៀនចំនួន៣៦នាក់មកពីសាលាបឋមសិក្សា ចំនួន៥ នៅភូមិបន្ទាយស្រី និងប្រជាក ក្នុងស្រុកបន្ទាយស្រីជាមួយ និងនិស្សិត ជប៉ុនចំនួន៧១នាក់បានមកចូលរួម ក្នុងកម្មវិធីដែលរៀបចំនៅបន្ទាយក្តី, សារមន្ទីរព្រះនរោត្តម សីហានុ-អង្គរ និងអង្គវត្ត)</p> <p>* កម្មវិធីរៀបអង្គវត្តដោយប្រើដុំឈើតូចៗលើកទី៤</p> <p>ថ្ងៃទី២៧ ឧសភា កម្មវិធីរៀបចំនៅថ្ងៃបុណ្យ "All Sophians's Festival" ដែល សាកលវិទ្យាស្ថានយ៉ាបានបើកនៅឆ្នាំ១៩២៣</p> <p>* កម្មវិធីរៀបអង្គវត្តដោយប្រើដុំឈើតូចៗលើកទី៥</p> <p>ថ្ងៃទី១២ ខែធ្នូ កម្មវិធីរៀបចំនៅអនុវិទ្យាល័យ និងវិទ្យាល័យនារី Niigata Seishin</p> <p>* កម្មវិធីរៀបអង្គវត្តដោយប្រើដុំឈើតូចៗលើកទី៦ នៅតំបន់តូហុគឹ៖</p> <p>"បង្ហាញអំពីបេសកកម្មអន្តរជាតិនៃសាកលវិទ្យាស្ថានយ៉ាដល់កុមារនៅតំបន់ រងគ្រោះដោយសារគ្រីណាមី" ខួប១០០ឆ្នាំនៃសាកលវិទ្យាល័យស្ថានយ៉ា</p> <p>ថ្ងៃទី១៨ ខែវិច្ឆិកា កម្មវិធីរៀបចំនៅមជ្ឈមណ្ឌលសហគមន៍ Shimo-Yahagi Rikuzentakata City, Iwate Prefecture</p>
លើកទី៤៩	២៣នាក់	កម្មសិក្សា៖ បន្ទាយក្តី, អង្គវត្ត
៣ ខែសីហា- ១៥ ខែកញ្ញា ឆ្នាំ២០១៣	បុរាណវិទ្យា ១៤ ស្ថាបត្យកម្ម ៩	<p>[ស្ថាបត្យកម្ម] – Satoru Miwa, ម៉ៅ សុនី, សំ ពៅ, ជឹង ឆោមមុនី, ឈាន រដ្ឋា</p> <p>[បុរាណវិទ្យា] – Yukitsugu Tabata, Masako Marui, ឯក ប៉ុនថា, លី វណ្ណា, ជេង ស៊ីថា, ញឹម សុធាវិន្ទ, ជឿន រុទ្ធី</p> <p>[អប់រំបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌] – Chie Abe, នៅសៀមរាប Satoru Miwa និង Saori Tanaka</p> <p>- "កម្មវិធីអប់រំបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌"</p> <p>( ថ្ងៃទី ២២, ២៧ ខែមេសា និង ថ្ងៃទី២, ៤, ៩, ១១ ខែឧសភា</p> <p>សិស្សចំនួន៣៧២នាក់ និងគ្រូបង្រៀនចំនួន១៥នាក់មកពីសាលាបឋមសិក្សា វត្តព្រះឥន្ទកោសិយ៍ និងស្រះស្រង់ បានមកចូលរួមក្នុងកម្មវិធីដែលរៀបចំនៅ បន្ទាយក្តី, សារមន្ទីរព្រះនរោត្តម សីហានុ-អង្គរ និងអង្គវត្ត)</p>

		( នៅប្រទេសជប៉ុន) Chie Abe សិក្ខាសាលាអំពីបរិស្ថាន និងការអប់រំបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌ “កម្មវិធីរៀបអង្គរវត្តដោយប្រើដុំឈើតូចៗ”។ កម្មវិធីនេះរៀបចំនៅថ្ងៃទី១៣ និង១៤ ខែសីហា នៅ United Nation University GEOC Global Environment Partnership Plaza
២៨ មីនា, ២៩ ឧសភា, ២៥ តុលា ២០១៤, ៣០ មករា ២០១៥	៣៤នាក់	ថ្នាក់បង្រៀន៖ សាកលវិទ្យាល័យភូមិន្ទវិចិត្រសិល្បៈ [មូលដ្ឋានសិក្សាប្រវត្តិសិល្បៈខ្មែរ] – Makiko Kubo
លើកទី៥០ ៩ ខែសីហា- ១០ ខែកញ្ញា ឆ្នាំ២០១៤	១៦នាក់ បុរាណវិទ្យា ៨ ស្ថាបត្យកម្ម ៨	កម្មសិក្សា៖ បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត
		[ស្ថាបត្យកម្ម] – Satoru Miwa, Yoko Kojima, ម៉ៅ សុនី, គង់ កុសល ( ព្រឹទ្ធបុរសនៃមហាវិទ្យាល័យស្ថាបត្យកម្ម) [បុរាណវិទ្យា] – Masako Marui, ញឹម សុធាវិន្ទ, ភិន កក្កី, ជឿន រុទ្ធី ( អាជ្ញាធរអប្សរា៖ ឆាយ រចនា, ហេង ថាន, គឹម សំណាង) បុង សុវត្ថិ ( សាកលវិទ្យាធិការនៃសាកលវិទ្យាល័យភូមិន្ទវិចិត្រសិល្បៈ), មួន សុភាព ( ព្រឹទ្ធបុរសនៃមហាវិទ្យាល័យបុរាណវិទ្យា) [ចូលរួមបង្រៀន] – Fumiaki Matsuura, Makiko Kubo, Keiko Sato, ទិន ទីណា, ឆាយ រចនា, ឈាន រដ្ឋា [អប់រំបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌] - “កម្មវិធីអប់រំបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌” ( ថ្ងៃទី៤ ខែសីហា សិស្សចំនួន១១០នាក់ មកពីអនុវិទ្យាល័យវត្តចក រួមជាមួយក្រុមនិស្សិតស្ម័គ្រចិត្តបង្រៀនភាសាអង់គ្លេសនៃសាកលវិទ្យាល័យសុហ្វីយ៉ា (STP ) បានចូលរួមទស្សនានៅប្រាសាទអង្គរវត្ត) ( ថ្ងៃទី២៩ ខែសីហា អ្នកភូមិរហាលចំនួន៩០នាក់ បានមកចូលរួមក្នុងកម្មវិធីនៅបន្ទាយក្តី)
១៣-២០ ខែសីហា ឆ្នាំ២០១៤  ចំនួន៨ថ្ងៃ	សមាជិកចូលរួម ១០នាក់  ខ្មែរ ២នាក់ លាវ ២នាក់ ភូមា ២នាក់ ថៃ ១នាក់ វៀតណាម ៣នាក់	សិក្ខាសាលាអន្តរជាតិលើកទី១ស្តីអំពីបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌នៃប្រទេសតាមដងទន្លេមេគង្គ។ “សកម្មភាពផ្លាស់ប្តូរនៃកិច្ចសហប្រតិបត្តិការអន្តរជាតិ ដើម្បីថែរក្សាបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌របស់ប្រទេសទាំង៥នៅអាស៊ីអាគ្នេយ៍” ។ - ទីកន្លែង៖ មជ្ឈមណ្ឌលស្រាវជ្រាវនិងបណ្តុះបណ្តាលធនធានមនុស្សអាស៊ីនៃសាកលវិទ្យាល័យសុហ្វីយ៉ា, សៀមរាប។ - សហការរៀបចំដោយ៖ Regional Center for Archaeology and Fine Arts (SEAMEO SPAFA), ក្រសួងវប្បធម៌និងវិចិត្រសិល្បៈនៃប្រទេសកម្ពុជា, អាជ្ញាធរជាតិអប្សរា - រដ្ឋបាល៖ Yoshiaki Ishizawa, Chie Abe, ឡាវ គឹមលាង - អ្នកសម្របសម្រួល៖ U Nyunt Han, អាំង ជូលាន, Yoshiaki Ishizawa

		<ul style="list-style-type: none"> <li>- សមាជិក៖</li> <li>+ កម្ពុជា៖ លី វណ្ណា, ឈាន រដ្ឋា</li> <li>+ លាវ៖ Phanthavong Orlany, Phimmsehng Sybounhevang</li> <li>+ មីយ៉ាម៉ា៖ Than Htike, Tin Htut Aung</li> <li>+ ថៃឡង់ដ៍៖ Poshyanandana Vasu</li> <li>+ វៀតណាម៖ Nguyen Hoangbach Linh, Nguyen Nhut Phoung, Nguyen Phoung Thao</li> </ul>
<p>៨-១៤ កុម្ភៈ ២០១៥</p>	<p>សមាជិក១១នាក់ មកពីប្រទេស ចំនួន៥</p> <p>ខ្មែរ ៣នាក់ លាវ ២នាក់ ភូមា ២នាក់ ថៃ ១នាក់ វៀតណាម ៣ នាក់</p>	<p>សិក្ខាសាលាអន្តរជាតិលើកទី២ស្តីអំពីបេតិកភណ្ឌ វប្បធម៌នៃប្រទេសតាមដងទន្លេមេគង្គ។</p> <p>“សកម្មភាពផ្លាស់ប្តូរនៃកិច្ចសហប្រតិបត្តិការអន្តរជាតិ ដើម្បីថែរក្សាបេតិកភណ្ឌ វប្បធម៌របស់ប្រទេសទាំង៥នៅអាស៊ីអាគ្នេយ៍” ។</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- ទីកន្លែង៖ មជ្ឈមណ្ឌលស្រាវជ្រាវនិងបណ្តុះបណ្តាលធនធានមនុស្សអាស៊ីនៃ សាកលវិទ្យាល័យសូហ្វ៊ីយ៉ា, សៀមរាប។</li> <li>- សហការរៀបចំដោយ៖ Regional Center for Archaeology and Fine Arts (SEAMEO SPAFA), ក្រសួងវប្បធម៌និងវិចិត្រសិល្បៈនៃប្រទេសកម្ពុជា, អាជ្ញាធរជាតិអប្សរា</li> <li>- រដ្ឋបាល៖ Yoshiaki Ishizawa, Chie Abe, ឡាវ គឹមលាង</li> <li>- អ្នកសម្របសម្រួល៖ U Nyunt Han, អាំង ជូលាន, Yoshiaki Ishizawa</li> <li>- សមាជិក៖</li> <li>+ កម្ពុជា៖ លី វណ្ណា, ឈាន រដ្ឋា</li> <li>+ លាវ៖ Phanthavong Orlany, Khamheng Vongsy</li> <li>+ មីយ៉ាម៉ា៖ Than Htike, Tin Htut Aung</li> <li>+ ថៃឡង់ដ៍៖ Poshyanandana Vasu</li> <li>+ វៀតណាម៖ Nguyen Hoangbach Linh, Nguyen Khanh Trung Kien, Nguyen Phoung Thao</li> </ul>
<p>ថ្ងៃទី២៥ ខែកុម្ភៈ ឆ្នាំ២០១៥</p>	<p>ស្ថាបត្យកម្ម ២០នាក់</p>	<p>ថ្នាក់បង្រៀន៖ សាកលវិទ្យាល័យភូមិន្ទវិចិត្រសិល្បៈ</p> <p>[ការថែរក្សាបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌] – Satoru Miwa</p>
<p>ថ្ងៃទី១៣-២០ ខែសីហា ឆ្នាំ២០១៥ (៨ថ្ងៃ)</p>	<p>សមាជិកចូលរួម ១២នាក់</p> <p>ខ្មែរ ៣នាក់ លាវ ៤នាក់ ភូមា ២នាក់ ថៃ ២នាក់ វៀតណាម ១នាក់</p>	<p>សិក្ខាសាលាអន្តរជាតិលើកទី៣ស្តីអំពីបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌នៃប្រទេសតាមដង ទន្លេមេគង្គ</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>- រដ្ឋបាល៖ Yoshiaki Ishizawa, Makiko Kubo, ឡាវ គឹមលាង</li> <li>- អ្នកសម្របសម្រួល៖ U Nyunt Han, អាំង ជូលាន, Yoshiaki Ishizawa</li> <li>- ប្រធានបទ៖</li> <li>“សកម្មភាពផ្លាស់ប្តូរនៃកិច្ចសហប្រតិបត្តិការអន្តរជាតិ ដើម្បីថែរក្សាបេតិកភណ្ឌ វប្បធម៌របស់ប្រទេសទាំង៥នៅអាស៊ីអាគ្នេយ៍” ។</li> <li>- ទីកន្លែង៖ មជ្ឈមណ្ឌលស្រាវជ្រាវនិងបណ្តុះបណ្តាលធនធានមនុស្សអាស៊ីនៃ សាកលវិទ្យាល័យសូហ្វ៊ីយ៉ា, សៀមរាប។</li> <li>- សហការរៀបចំដោយ៖ Regional Center for Archaeology and Fine Arts</li> </ul>



		<p>(SEAMEO SPAFA), ក្រសួងវប្បធម៌និងវិចិត្រសិល្បៈនៃប្រទេសកម្ពុជា, អាជ្ញាធរជាតិអប្សរា</p> <p>- សមាជិកចូលរួម៖</p> <p>+ កម្ពុជា៖ ឈាន រដ្ឋា, ទិន ទីណា, ម៉ៅ សុនី</p> <p>+ លាវ៖ Khamphoumy Manila, Phouthong Phongxayponh, Siliphoum Somnuek, Khamleuan Aphaiyavong</p> <p>+ មីយ៉ាម៉ា៖ Arkar Aye, Yan Aung</p> <p>+ ថៃឡង់ដ៏៖ Surayoot Wiriyadamrong, Hiengkaew Pongthorn</p> <p>+ វៀតណាម៖ Nguyen Hoangbach Linh</p>
លើកទី៥១	១៤នាក់	កម្មសិក្សា៖ បន្ទាយក្តី, អង្គរវត្ត
៣០ ខែសីហា- ១៣ ខែកញ្ញា ឆ្នាំ២០១៥	បុរាណវិទ្យា ៧ ស្ថាបត្យកម្ម ៧	<p>[ស្ថាបត្យកម្ម] – Satoru Miwa, ម៉ៅ សុនី, គង់ កុសល ( ព្រឹទ្ធបុរសនៃមហាវិទ្យាល័យស្ថាបត្យកម្ម)</p> <p>[បុរាណវិទ្យា] – Masako Marui, ញឹម សុធាវិន្ទ, ភិន ភក្តី, ជឿន រុទ្ធី, ( អាជ្ញាធរអប្សរា៖ ឡេង សក្យា, ភិន សំណាង, វិទូ ភិរម្យ, មួង ច័ន្ទរស្មី) បុង សុវត្តិ ( សាកលវិទ្យាធិការនៃសាកលវិទ្យាល័យភូមិន្ទវិចិត្រសិល្បៈ), មួន សុភាព ( ព្រឹទ្ធបុរសនៃមហាវិទ្យាល័យបុរាណវិទ្យា)</p> <p>[ចូលរួមបង្រៀន] – Kunikazu Ueno, ទិន ទីណា, ឆាយ រចនា, ឈាន រដ្ឋា, ថុ ថុន</p> <p>[អប់រំបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌] – Masako Marui, Satoru Miwa, ឡាវ គឹមលាង, ញឹម សុធាវិន្ទ, ភិន ភក្តី, ជឿន រុទ្ធី</p> <p>- “កម្មវិធីអប់រំបេតិកភណ្ឌវប្បធម៌”</p> <p>( ថ្ងៃទី៤ ខែសីហា សិស្សចំនួន១២០នាក់ មកពីអនុវិទ្យាល័យវត្តចក រួមជាមួយ ក្រុមនិស្សិតស្ម័គ្រចិត្តបង្រៀនភាសាអង់គ្លេសនៃសាកលវិទ្យាល័យសុហ្វីយ៉ា (STP ) បានចូលរួមទស្សនានៅប្រាសាទបាយ័ន)</p> <p>( ថ្ងៃទី២៧ ខែសីហា សិស្សមកពីសាលាបឋមសិក្សាព្រះឥន្ទកោសិយ័ចំនួន ៦០នាក់ បានមកចូលរួមក្នុងកម្មវិធីនៅប្រាសាទវត្តព្រះឥន្ទកោសិយ័, បន្ទាយក្តី និងសារមន្ទីរព្រះនរោត្តម សីហនុ-អង្គរ)</p>

កំណត់សម្គាល់៖

១. ចាប់ពីឆ្នាំ១៩៩៦ កិច្ចការផ្សេងៗដូចជា៖ ថ្នាក់បង្រៀន ចុះបញ្ជីនិងសម្ភាគរក្ខសិល្បៈ រៀបចំនៅមជ្ឈមណ្ឌលស្រាវជ្រាវនិងបណ្តុះបណ្តាលធនធានមនុស្សអាស៊ីនៃសាកលវិទ្យាល័យសុហ្វីយ៉ា ខេត្តសៀមរាប។
២. ថ្នាក់បង្រៀននៅសាកលវិទ្យាល័យភូមិន្ទវិចិត្រសិល្បៈ៖ ចាប់ពីខែមីនា ឆ្នាំ១៩៩១ដល់ឧសភា ឆ្នាំ១៩៩៧មានសាស្ត្រាចារ្យចំនួនប្រហែល៥៩នាក់ បានបង្រៀនចំនួន១១ដងនិងមុខវិជ្ជាចំនួន១៦ ដល់និស្សិតចំនួនប្រហែល១៥០០នាក់។ ចាប់ពីខែមីនា ឆ្នាំ២០១៤ ដល់ខែមករា២០១៥ មានថ្នាក់បង្រៀនចំនួន៤ដង ដោយមាននិស្សិតចូលរួមចំនួន១៣៦នាក់។
៣. ហ្វឹកហ្វឺននៅតំបន់អង្គរ៖ ចាប់ពីខែមីនា ឆ្នាំ១៩៩១ ដល់ខែកញ្ញា ឆ្នាំ២០១៥ បានអនុវត្តចំនួន៥១ដងក្នុងអំឡុងពេល ២៤ឆ្នាំ មានអ្នកជំនាញចំនួន៣៨០នាក់ ជួយបណ្តុះបណ្តាលនិស្សិតបានចំនួន៥២៩នាក់។

## アンコール遺跡を科学する

---

第20回アンコール遺跡国際調査団報告

特集：ピタウ先生とソフィア・ミッション  
—上智大学のアジア貢献—

発行者— 上智大学アンコール遺跡国際調査団  
団長 石澤良昭（上智大学特別招聘教授）

発行— 2016年3月1日

発行所— 上智大学アジア人材養成研究センター  
〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1  
Tel. 03-3238-4136 Fax. 03-3238-4138

制作— 株式会社ムーンドッグ  
〒164-0003 東京都中野区東中野4-9-1  
Tel. 03-5348-7058 Fax. 03-5348-7059

---

カンボジアのアンコール遺跡調査・研究に関するお問い合わせは上記の上智大学アジア人材養成研究センターまでお願い致します。